
道の先には.....

神山 備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道の先には……

【ZPDF】

Z1006R

【作者名】

神山 備

【あらすじ】

何を思ったのか、異世界ファンタジーです。魔が差したとしか思えません。異世界にもし行けたらやってみたいことを、思う存分やる予定。

僕、宮本美久みやもとよしひさと会社の先輩鮎川幸太郎あゆかわこうたろうは仕事で郊外に出掛けの途中迷子になつて、運転している先輩と地図の読めない僕のどっちが悪いかで喧嘩を始めた。その時、車がものすごい光に包まれたかと思うと、すとーんと落下。? 何で?? 前に道あつたと思うんだけど

ど……次に気がついた時、僕らがいたのはモンスターと魔法のある世界だった。

そんな僕と先輩とあっちの世界の住人マシューとの『ゴボゴ珍道中』。

何気に、主人公チートかも。

4／25、完結を一旦はずして幸太郎スピノフ始めました。

9／1原稿をこことサイトの二箇所にしました。

11／4ファンタジー抜きの小ネタはじめました。

「だあーつ、もう一 セツぱぱつお前と来ると禄な事がねえ、」の疫病神！！」

そう言つて車のダッシュボードを叩くのは、僕の会社の先輩鮎川幸太郎。

「そんなん、道に迷つたのは僕のせいじゃないですよ
遠慮がちにそういう僕を先輩はぐつと睨んだ。

「富本、お前のせいじゃないって！？ この状態のどこが都内で頻繁に迷子になる地図の読めないお前のせいじゃないって言うんだ。
だから、ナビ付きの俺の車で行くって言つたんだ」

「でも、こんな山道で先輩の真っ赤なセリカちゃんなんて走らせたら、それはそれで何と言われるか……」

それで遠慮がちにそう言つた僕に先輩は間髪入れずに、「黙れ、ヘタレ富本のくせに。確かにこんな道で俺のかわいいセリカWXに傷でもついた日には、泣くにも泣けない。でも、こんな訳の解らないところで迷つよりは何ぼかましだろ」と、返した。

「けど、今回は地図見てないし、僕のせいじゃないですって…」

「うるさいつ！ 自分が地図見れないのを自慢するな！！」

そう言いながら不毛な言い合いをしているそのとき、ものすごい光に包まれたかと思うと、僕たち（正確に言えば僕たちの乗った車）はいきなり落ちたのだった。

何でだろ、たしかに前に道はあつたはずなのに……

僕たちはしばらくそのまま気を失っていたらしい、次に気がついた時、森の中にいた。落ちる前も山道を走っていたのはそうなんだけど、木の種類が全く違っていた。落ちる前に走っていた周りの木はいかにも日本らしい杉木立だつたけれども、今日の前にあるのは広葉樹。しかも、青々としている。それに、心なしか気温も高い気がする。

それに、落ちてきたはずの切り立った崖とか斜面なんてものはなくて、緩やかな丘みたいなものが遙か向こうまで広がっている。アスファルトで舗装された道は石畳になっているし、なにより確かにかなりな高さを降りたはずなのに、僕たちはもちろん、会社の車（先輩に言わせれば廃車寸前のポンコツ）にもぜんぜん傷なんか一つも付いていなかつた。

「おい、富本、乗れっ」

それを確認した先輩は、そう言って車に戻る。慌てて僕も車に乗ることエンジンをかけ発進させた。

「ちゃんと走るみたいですね」

「ああ、ポンコツの割には上等じゃねえか」

先輩はそう言つてさらに車を走らせた。

しばらく行くと道ばたに大きなリンゴの木が見えてきた。真っ赤な実が所狭しとひしめき合つている。

「そう言えばお腹空きましたね。あのリンゴ食べましょうよ

「富本、お前の頭には食うことと寝ることしかないのか？」

「そんなこと言つたつて、お腹空いたんですから。それに、こんな道ばたにぽつりと植わってるんだから絶対に野生ですよ。採つたって誰にも怒られないと思います」

呆れる先輩に僕は胸を張つてそう答えた。どう言つたつて先輩は僕をバカにするだろうし、それなら開き直つて空腹を満たす方が建設

的だと思わない？

「じゃあ、お前勝手に行って採つて来い！ 僕は知らん」
先輩はそう言つと、僕をリンゴの木の端まで戻つて降りしてくれた。
僕は僕の背でも届くところになつていてる実を三つ四つ採り、その
内の一つにかぶりついた。

「うー、おいひい

間違いなく完全無農薬のそれは、僕が今まで食べたリンゴの中で一
番美味しかつた。

しかし次の瞬間、僕は

「ぎやつ！－

という、悲鳴を上げた。

「富本、どうした？ やっぱり毒リンゴだったのか、それ」
その悲鳴を聞きつけて先輩は後から考えるとあんまりな台詞を吐き
ながらそれでも降りてくれた。

「違いますよ、ほ、ほらアレ……うわあ！－」

そのとき、震える僕に向かつて、そのゲル状の物体が突進してきた
のだった。

先輩はとつさにその辺にあつた木の棒を持つて構える。某ド〇ク〇の初期アイテム『ひのきのぼう』つていうのがあるけど、さしづめこれは『りんごのぼう』つてところだろうか。何にしても再弱アイテムには違いない。確か剣道2段の先輩は格好に反して意外と素早いゲル状を、それでバンバンぶつ叩いている。何をしても様になる人だと思う。

そのとき、先輩がぶつ叩いているのとは別のゲル状が僕の足にまとわりついてきた。ひえ～っ、キモチワルイ！！ 僕は全身総毛立ちながら、そのゲル状に自分の食べていたリンゴをぶつけた。そして自分の手でもげる範囲のリンゴを次々ともぎとつて、ガンガンゲル状に投げつける。

「富本、もういい。これ以上やつたら、リンゴがもつたいない」
しばらくして、そう言いながら先輩が僕の腕を抑えた。

「僕がどうなつてもいいつていうんですか」

「どうなるつて、どうもならんだる。もうこいつとくにノビてるし」

だって、こんなアンデットっぽい奴、またすぐ復活して動き出しそうな気がするんだもの。そう言おうとした僕に先輩は、

「でも、お前思ったよりもなかなかやるな。さしづめ技名は『リンゴ乱舞』ってどこか。ガキ大将に泣きながらめちゃくちゃな攻撃加えるチビガキみたいで、なかなか良かつたぞ」と言った。一応褒められているみたいだけど、そんな褒め方つてなんかウレシクナイ。

とにかく、投げたリンゴを回収して（だって、そのまま放置したつて腐っていくだけだし、それなら洗って食べた方が……）車に乗せると、先輩はそれを見て鼻で笑った。その時、ちょっと離れたところから

「Help help me!」

と、ちょっと訛った英語で助けを呼ぶ声が聞こえた。僕はその声を聞くと、自分のスキルなんてものは一切無視して、そこに走り出していた。

「おいこら、宮本！ 待てよ！！」

それを見た先輩がやれやれと首を振りながら、今度はトランクを開けて車から修理用のスパナを取り出し、僕の後を追いかけた。

変な第一村人？ 発見

僕たちが駆けつけると、声の主は茶髪で碧眼の男。大きな荷物を今度は犬？ みたいな（そう言つにはかわい氣のない）奴らに取られようとしていた。その男自身結構がたいもテカくて一匹ぐらいなら振り切れるんだろうが、相手は4匹もいて、その中の一匹が指揮して集団的に動いているという、なかなか獸とはいえ賢そうな連中だった。

僕はそのときになつてやつと、自分が「」を車の中に全部置いてきたことを思い出した。

「富本、お前は下がつてろ！」

僕がそのことに気づいてあたふたしていると、先輩はそう言つて、スパナで犬もどきをボカボカと殴つてあつと言つ間に退散させた。

【助けてくださつて、本当にありがとうございました。この中には王都にもつて行かなきゃならんでえじな手紙が入つていたもんで、焦つたですじや】

その男の人は何度も頭を下げながら早口口に言つた。

【オウト？ オウトつて何？】

【王都と言えば、王都グランディーナに決まつてつてでしょ？ おかしなことを聞かんでくだせ】

「先輩、この人変です」

「さつきから出てきている変な化けもんと言い、この外人と言い、確かに妙だがな、俺に言わせりやお前も変だ。大体俺には何を言つてるのかさっぱりわからん。そんな男とちゃんと会話できているお前つていつたい何だ？」

「えつ、先輩わからないんですか。この人王様に届ける手紙を守つてくれたつてお礼言つてるんですけど」

「お前こいつがしゃべつてることわかるのか？」

ものすごく驚いてそう言つた先輩に、僕は逆にビックリしながら頷いた。確かに早口だったし、ものすごく訛つてゐるけど、この人のしゃべっているのは基本英語だ。それがわかれば、時々くるう文法を少し修正すれば内容はつかめる。

「だつて、この人のしゃべつてるの英語ですよ」

「英語?」

「ええ、かなり訛つてますけど」

「富本、お前帰国子女か?」

「いいえ。大学英文科でしたけど、外国なんて一度も行つたことがないですよ、僕」

「じゃあ、何で解るんだ?」

「僕授業ちゃんと出てましたもん」

外国に行つたことがないと言つた僕に信じられないと目を瞠つた先輩に僕は胸を張つて答えた。

「……とにかくだな、この男が変なのかお前が変なのかもう少し行つてみれば判るだろ。おいそこの、お前も乗れ! …… Ride in this car」

先輩はひとしきり頭を抱えてから、そう言つて男に車に乗るように強要した。

【この車に乗つてくださいと言つてます】

だけど、先輩に車に乗るように言つてもきょとんとしている男に僕が通訳する。

【コレに? 馬のない馬車に……ですか? 勇者様方も、モンスターに襲われて馬を盗られたんですね。それでいらを助けて下さつたんかあ。ここでまず一休みしてから出発つてことですね。んじやま、Lady】

男はそう言つて、先に僕が乗り込もうとしていた助手席のドアを開けると、僕の手を取つた。そして、僕が乗り込むとおもむろにドアを閉め、自分は後部座席のドアを開けて荷物をドンと放り込むと自

分も乗り込んだ。僕は勇者様とLadyという単語にすぐ嫌な予感がした。その部分だけは先輩も理解したらしく、僕の顔を見てぶつと吹きながら車に乗り込む。

【で、これからどうするんですかい】

それから身を乗り出しながら聞いた男に、先輩は答える代わりにエンジンをかけ、思いつきリアセルを踏んだ。

【ば、馬車が……馬もないのに走って…… めやあ、お助けを！
！】

続いて車の中には、僕たちが駆けつける時に聞いたよつさうにひもつた悲鳴が響きわたったのだつた。

異世界トリップ決定

車の中には晴れやかに笑う先輩と、恐怖でゆがんだ顔の男。やがて僕らの行く先に、見慣れないヨーロッパ風の田舎町が見えてきた。

【リルムの町だ！】

それを見て男はひきつったまんまでちょっと綻んだ。逆にそれを聞いた先輩の方が苦虫を噛みつぶした顔になって、車を停めた。
「やっぱり、さっきの光で僕たちの方がとばされたみたいですね。異世界トリップってやつですかね」

思案顔で僕がそう言うと、先輩は僕の頭を叩いて、「何、冷静に分析してやんだ。つたく、やっぱりお前と一緒にいると碌なことがない」とハンドルに突っ伏した。

「だからあ、先輩が運転してたんだし、僕の所為じゃないですって！」

「つるさい、黙れ！！ なら俺の所為だとでも言いたいか」「別にそんなこと、言つてないでしょ！」

だけど、僕たちがいつものように言い合いを始めた時、はじめは呆気にとられていた男がクスクスと笑い出した。

【おい、何笑つてんだ。それと、お前名前は？】

【マシュー、マシュー・カールっす】

すると先輩はむつとした顔のまま男に聞いた。

「先輩もこの人の言葉判るんですけど？」

「お前がさつきこいつのしゃべってるのは英語だつて言つたら。お前にできることが、俺にできない訳あるか！」

僕が驚いて聞き返すと、先輩はそう言つた。でも、よくよく考えてみると、名前聞いただけなんだよね。それだったら誰でもできる…なんてことは口が裂けてもいえないけど。

【で、勇者様方のお名前は】

【俺？ 俺は鮎川幸太郎。あ、「コーラー・アユカワ、わかるか？】

「〇—〇—〇・コーラル、コーラル」

「コーラー」

「「コーラ」

「ま、これが限界か。OK」

マシューは頷くと今度は僕を指さしたので、

【僕は宮本美久。ヨシヒサ・ミヤモト】

「ヨシヒサ？」

「ヨシヒサー！」

「ヨシヒサ？」

「よつしゃ、よつしゃそれでいい」

ヨシヒサと言つたマシューに、先輩はうなづきながらOKを出す。
「勝手に決めないでください。よつしゃよつしゃって、何十年か前の政治家じゃあるまいし、良い訳ないでしょー。」

名前を聞かれてるのは僕なんですから。

「お前も古いな。じやあ、音読みでビクとでも呼ばせれるか

「音読み？ ヨシヒサでもあるでしょ？」

まあ、ヨシヒサよりはまし……そう言いかけた僕に、マシューはビクといつワードで反応し、

「Oh~ヴィクトリアー！… OK、OK

と満面の笑みで理解？ を示した。

だけど、ヴィクトリアって……

【ダメです、やっぱリダメ！！ ヴィクトリアって言つたら女性の名前じゃないですか。ダメ、Not Victoria! I'm not female!!】

「Not female!？」

慌てて訂正した僕に、マシューは皿をまん丸にしてせつ聞きを返した。

ああ、こんなに美味しいものが……だなんて

【男お……】

【そんなにびっくりすることないでしょ！？ 僕ちゃんとスカートなんか穿いてないじゃないですか！】

【そりや、勇者様の連れなんだから、お忍びの姫様のかなあとか……】

女性に間違われていたことに激怒する僕に、マシューが遠慮がちにそう言った。その目はどことなく傷ついた風。そして、

【バカ、こいつがそんな品のいい顔してるか？】

【確かに上品とは言えないかもしだれいけど、かわいいじゃないですか。コータロと並ぶとお似合いです】

先輩がいつものように僕をじき下ろすのに同調して、何気に酷いことをさうっと言つてのける。「うう、確かに165cmの僕は、183cmの先輩やほほ変わりないだろ」マシューからすれば小柄だけね、

【げつ、こいつとお似合いだなんて言つたな！】

すかさず先輩が言つ。でも、それはこっちの台詞です。

【そりや、妙な光に包まれてこっちに運ばれてきたねえ。あんたたちこれからどうするね】

それから、僕たちはマシューにここに運ばれてきた経緯を捶い揻んで話した。マシューは僕たちが別に高貴な出自でもなく、歳もさして変わらないことが判ると幾分碎けた口調になっていた。だけど、元々敬語が曖昧（日本語が厳密すぎるのか）な英語では大して変化はないのだけれど。それに、マシューが僕たちを高貴な出自だと勘違いしたのも、その口語というより、ブリティッシュティングリッシュな日本の英語教育が原因なのだろうし。

大体、僕だつて私だつて、こちちぢゅ全部 I my meだ。そ

れが間違いの根元だつて気がする……つて、英語にハツ当たりしても仕方ないのだけどね。

【とにかく、腹が減つていてはなんもい考えは浮かばんて、リルムの町で腹¹」しらえといくか】

マシューに促されて僕たちは町外れで車を降りると（馬のない馬車なんかに乗つていたら、絶対にドン引きされるとマシューが言つので）リルムの町に入った。

【お、良いぞ。今日は市が立つて】

見ると町のショボいメインストリートにはいくつかの屋台が出ていた。

「プリンだあ！」

その中に僕は『Mon Pudding』といつ看板を見つけて色めきたつた。車のないこの世界には当然プラ容器なんてものはないらしく、極小のブリキっぽいバケツに黄色いフルプルが収まっていた。

【それ二つ】

すると、その声を聞いたマシューがプリンを買って僕たちに手渡してくれた。

【助けてくれた礼だ、食え】

【うわあ、ありがとう】

僕はそれを受け取ると、添え付けの木の棒で掬い取つて口に入れる。予想通りと言つて、予想以上の美味しさ。

「んまい！ 幸せだあ～」

思わず日本語でうなつてしまひ。

「相変わらず、おまえの幸せはお手軽だなあ。ま、なかなかいけるがな」

先輩もまたどうでもない様子。

【ぬいか】

【はー、とつても】

味を聞いてきたマシューに僕はぶんぶんと首を縦に振つてやう答えた。でも、僕の頷きにマシューが言つた
【やうだろ、そうだな。】には本当に良いスライムがいっぱい
とれるからな】

の一言で、僕と先輩は互いの顔を見合させて固まつてしまつた。

「す、スライム……？」

「お、おえ～っ…」

僕が素つ頓狂な声を上げると同時に先輩が吐いた。あんなに美味しかつたプリンの原料がほんのつこさつき戦つたあのゲル状だったなんて……

「ショックだ……」こんなに美味しいものがスライムでできているなんて……

「つていいながら、お前まだ食つてんじやねえか。一体どんな神経してんだ」

ショックだと言いながらどんどんと食べ続ける僕に、先輩は蒼い顔をしながらそう言つた。

「だけど、こんなに美味しいんですよ。それに、途中で捨てるなんてもつたいないです、そんなこと僕にはできません」

そのあとも僕は、

『何でこんなに美味しいものがスライムからできるんだ』と繰り返しつぶやきながら、先輩の分のプリンも平らげただつた。

食堂にて

それから気を取り直して、僕たちは町で唯一の居酒屋兼食堂らしきところに入った。さすがにちゃんとした店構えならそんなに妙なものは出でこないと……信じてマシューに注文してもらつ。ただ、先輩は料理と一緒にちやつかりビールを注文していた。

「先輩、これからまだ車に乗るんだつたら、飲酒運転はダメですよと僕が奢めると、

「うるさい、これが飲まずにやつてられるか。それに、車の存在している社会で飲酒運転もクソもあるか

と逆ギレした。言われてみればそうかも。たくさんあるからルールが出てくるのであって、僕たちが乗っている車一台しかなければ、そんなものできる訳がない。

やがてやつてきた料理を僕たちは一切聞かずに食べた。もし聞いて、その材料にさつきマシューが襲われていた『犬もどき』やその他奇妙なモンスターなんかが使われていることが判つてしまつたら、僕たちは餓死しかねない。僕はともかく、先輩はその可能性大だ。その証拠に、先輩はさつきからベジタリアンに宗旨替えたのかと思ふほど野菜しかつつついていない。

それでも何とか食事らしいものを終えると、先輩は徐にタバコを取り出して、ライターで火をつけた。それを見てマシューが驚く。

【「一タロ、あんた剣の腕もあるのに、魔法も使えるのか?】

【は? ああ、これね。まあちょっとな】

先輩はマシューがまじまじと見ている、今度の新商品につける予定だったロイヤリティーのライター（つまりタダもらいの品物）を手のひらで転がして不敵な笑みを浮かべた。

「先輩っ！」

「何だ、富本。お前何か言いたそудだな」

「先輩、コレって要するにおまけじゃないですか。そんなんで魔法

「堅いこと言つくなつて。あつちが勝手に勘違いしてんだから」と、
使ひこいつになんかしてると後でイタい目に遭いますよ

「堅いこと言つくなつて。あつちが勝手に勘違いしてんだから」

やがて、先輩が一服し終わり、僕たちは席を立つた。

【あのお、お代は】

【はい、75ガルドになります】

そして料金を尋ねた僕に、店のおかみさんは愛想の良い笑みを浮かべてそう答えた。そうか、75。ずいぶん安いな。えつ？ 75…

：75ガルドお…！

「先輩、通貨単位が違つ…」

「そりやそつだろ。言葉が通じない世界で、金が一緒なわけないだろ」

持つているお金が使えないこと気づいて慌てる僕に、先輩は平然とそう返す。

「じゃあ、どうして払つんですか！ マシュー、まつかり払わせられないでしょ？」

「何なら、お前が身体で払つ？ お前なら高く買ってもひさえそうだぞ。何せビクだもんな」

続く僕の言葉に、先輩はそう言って高笑いした。

……やつぱりこの人、鬼だ……

敏腕営業マンの鍊金術？

【田那、お困りですかい？】

その時、店の奥から、ひとりの男が僕たちに近づいてきた。『さ
れいな身なりをしていて、隙がない。旅人のかかそれとも王都あ
たりの商人で、この町に来ているのか、何にしてもこの田舎町には
似つかわしくないギラギラとした目つきをしていた。

【良けりや、あっしがお出ししやすよ】

と、続ける田線の先には先輩が握っているライターが……えつ、そ
れがあ田当てなの？

【ふつ、あんたもこれが田当てか。安くはないぞ】

一応、先輩の名譽のためにライターとか言つたけど、実はアウトド
アグッズの販促品であるそのチラシカマンを握り直して、先輩はそ
う言つてニヤリと笑つた。そうやつて見てみると、あの形はマジック
クロツドみたいに見えないこともないし、『キャンプのお供に…
ファイアメイト』のロゴは、日本語なんて知らない彼らには何かの
詠唱呪文を刻んでいいようにしか見えないかも。けど、安くはない
つて……元々タダでしょうが！ 先輩、どんだけふっかける気なん
だろ。

【数は用意できぬでじょうかね。そしたらそれ相応の物はこち
らも用意させてもらこやす】

【わかった、じゃあ5つ6つ用意しよう。ただ、貴重品だからな
、しかるべき所に隠してある】

車の中に問題のマジッククロツドもどきは100個以上あるって言
うのに、先輩はそう言つて、一人先に店を出た。僕に日本語で、
「つけられなこよつて、お前はこじてあいつを見張つてお
と言ひ残して。

先輩が戻つて来て、僕たちはリルムの町の旅館の男が泊まっている部屋に行つた。そこは回復系の木の実やら、石化防止のペンダントやらがいっぱい。僕が興奮しつぱなしで、一つ一つ眺めているのを先輩は些か冷めた眼で、マシューは幾分呆れた顔で見ていた。だつて、これつてリアルRPGのオンパレードじゃない！ これが興奮せずにいられますかつて！！

僕はその中に古ぼけた本が一冊あるのを見つけた。何が書いてあるのか見ようと開いた僕に男は言った。

【止めたきな、そいつは持ち主を選ぶんだ。大抵の奴は読めもしねえよ】

先輩にはへつらつてているクセに、随分と僕にはタメ口なんじやない？ なんて思いつつ、

【へえ、そうなの】

と返しながら、僕はパラパラとページをめくつて、

「火に関する呪文かあ…… fire ball <火の玉>つて、笑えるう

と声を出しながらその本を読む。それを聞いて男はあるか先輩やマシューまでもがギョッとして僕を見た。そして僕はその本の冒頭部分にあつた『注意書き』を参考に『こめかみに意識を集中』して、もう一度、

「火の玉」fire ball！」

と詠唱した。胸の前に広げた手にぽあつと赤い玉が生まれる。だけど、起こつたことにビックリして気がそげちゃつたのか、それはすぐ消えちゃつたけど。

「うわっ、これつてますますリアルRPG！」
と一人はしゃぐ僕に、後の3人の大の男は完全にフリーズしていました。

【お前、魔女なのか……】

しばらくしてから、やっと気を取り直して男がそう言った。僕は『

魔女』とこうワードにちょっと『またか』と思いつつも、

【そうみたいですねえ、僕、超ド級の初心者ですけど】

と男に返した。

で、目立たないようにこつち仕様の服とか、ちょっととした武器などをチツカマン計10本で購入。その中にはちゃんとさつきの『魔道書』（チツカマン3本相当）も含まれている。

僕はホクホクでその本を読みながら宿屋を出た。先輩はマシューに先に小声で耳打ちしてから僕に、

「こら、読みながら歩くな。転ぶぞ。それにな……」

「町のはずれまで来たら、一気に車まで走るぞ。その本を俺に渡す

か、小脇に抱えてろ」

と言った。別に声のボリュームを下げるなくたって日本語なんだから、ここの人には誰も解りやしません、とか思いながら僕は小脇に本を抱えた。

そして、町外れに来た僕たちは、一瞬3人で顔を見合せると、車に向かつて一気に駆けだした。

* - * - - *

僕たちが走り出した途端、慌てて追いかけてきた一団があつた。

総勢10名ほどか、さっきの商人が差し向けた者だろう。目的はたぶんあのチツカマンだ。先輩が一人で取りに行つたのを見て、まだ隠し持つていると思ったに違いない。確かに希少価値と言えばそういうかもしれないけど、なんだかなあ。

そんなに足は遅い方じゃないはずだけど、彼らは普段車なんか乗らずに生活してるんだろうから、かなり早くて少しづつ間合いを詰められている気がする。このままじゃ、車に乗って発進するためのタイムロスで追いつかれてしまつ。何か彼らの足を止める方法は？

その時僕が小脇に抱えている本がきらりと光った気がした。『君、持ち主を選ぶんだよね。僕を持ち主だと思ってくれているなら、助けてくれない？』と僕は本に囁きかけると、走るのを止め、追っ手の方に向き直ると『魔道書』をぱつと開いて、そのページを見る。

やつた！ 停止魔法だ！！ 僕は、

「汝の影よ、その大地に貼り付け！ STOP!!」と囁えて、彼らをじっと見据えた。追っ手はまるで『だるまさんがこじろん』で鬼に見られた時のようにぴたりとその場で動きを止めた。

「富本何をしている。早くこっちに来い！」

その様子に、先輩が慌ててそう叫ぶ。

「だ、ダメです。僕の今の集中力では、一瞬でも眼を離したらそこで術は切れます。だから、先輩が車を取ってきてここまで回していください」

「お、おう分かった。待ってる」

先輩は僕のその言葉にそう言って、マシューに車に向かうように促した。そして車に乗り込むと、先輩は旋回しながら僕の前にピタリと車をつけた。その間約20秒。僕が眼を離すとすぐ、金縛りが解けた追っ手が慌ててまた走ってきたけど、僕が乗り込むのがわずかに早かつた。先輩は僕が乗ったのを確認するとドアを閉める前にアクセルを全開で踏み込んで……一気にリルムの町を後にした。

【ここまでくりやもう大丈夫だろ、ふええ、助かった】
しばらく走ったところでマシューがそう言つたので、先輩は車を停めた。

【それにしてもビク、お前すごいな。いきなり魔法を使いこなすか？】

【えへへ、あれは何でもいいから相手の動きを止められたらって思つてページを開いたら、たまたま停止魔法のページだつたってだけです。偶然ですよ】

ビクと呼ばれるのは幾分不満だけど、褒められるのはなんだか悪い気はない。そしたら、隣に座っていた先輩が

僕の髪をわしづと掴んで

「いい気になるんじゃねえ」

と言つたので、僕はふくれつ面で先輩をにらんだ。

「大体、俺に命令するなんざ、一〇〇年早いんだ。ヘタレ富本のクセに」

「でも、あの時には敵の動きを止めなきゃ……」

「だからって、できるかどうかも判らない魔法で乗り切りろうと思ふ奴があるか。まったく、寿命が縮まるかと思つたぞ」

先輩はそう言いながら、髪を掴んだままあらつぱく僕の頭をなで続ける。ああそうか、先輩心配してくれてんだ。

「先輩、ありがと」

「ま……解ればいいんだ、解れば」

その時、マシューがうん、と一つ大きな咳払いをして、

【俺に判る言葉でしゃべつてもらねえかな。どうせさつきから自分
が邪魔者みたいな気がして、しようがない】

と憮然とした表情でそう言つた。

【邪魔者って……ただ、いきなり魔法を使ったのを叱られているだ

けです】

【「一タロが怒つてゐる？ 言葉が解らない俺からすれば、見つめあつて愛を語り合つてゐる様にしか見えなかつたぞ】

【マシュー、氣色悪いことこのうなー 何が悲しくて男に愛を語らなきやならん】

それは、こいつの台詞！

【いや、愛があれば性別だつて乗り越えられるのかなど……】

【マシュー！】

ぼそっと小声でそう言つたマシューを僕はキッと睨んで、パラパラと『魔道書』のページをめくる。

【わあ、どれにしようかな】

その言葉に、マシューはもうろん先輩まで蒼くなる。

「おこ、止める富本。こんなところで魔法なんか発動したら、このポンコツが爆発しちまつ！」

【え？、それがどうしたの？ どうせポンコツでしょ？】

それに対して僕は笑顔でそう返しながら手を胸の前に繰り出す。その仕草を見て、先輩とマシューは同時に叫んだ。

【ひえーっ、魔女様お助けを！】

……だから、魔女じゃないつてば……

僕は指をこきこき鳴らしながら笑みを浮かべていた。でも、魔法を使おうとした僕は急にめまいがして目の前が真っ白になつた。次に目覚めた時、僕はちゃんと宿屋のベッドに寝かされていた。「目、覚めたか。急に目を回すから心配したぞ。マシューが言うには、魔力の使い過ぎだそうだ。初心者が時空系の停止魔法なんつー上級魔法をいきなり複数にかけるなんぞ、今まで聞いたことがないつてよ」

「どうか、MP切れつて訳か。元々ほとんどMP自体が少ないのだろうし、

「あ、ありがとうございます。ちゃんと運んでくれたんですね」「感謝してくれよ、マシューはあんな団体してるので、実はちつとも力がないしで、結局俺が一人でここまで運んだんだからな。それにしても、おまえ重いぞ。抱き上げた時、腰が折れるかと思つた」「すいません、重くて。でも、僕は先輩がいつも抱いているような、女人みたいに軽くはないですよ。なんせ男ですから」

『男』というワードに力を込めて僕が言つ。

「うそそうぞ、重かなかつたよ。ははは、魔女発言をまだ根に持つてんのかお前」

「当たり前でしょ？ それよりマシューは？」

「そう言えばマシューがいない。マシューが居たら、『また俺の分からぬ言葉で一人こそそこそしゃべつてる』と拗ねられかねないほど、日本語で会話している。

「あ、さつきなんかぼそぼそと訳の分からない」とつぶやきながら出かかるつて言つて出てつたが

そんなことを話していると、マシューが戻ってきた。

【ビク、気が付いたか】

【うん、たつた今】

【ほー、コレ】

マシューはそう言ひつと、真っ赤な実を僕の手の上に乗せた。

【何なのコレ?】

【これは、ガザの実だ。魔力の回復に効果がある。食え】

【買つたの?】

【いや、そこの森で取つてきた】

【わざわざ取つてくれたの? うわあ、ありがと!】

【あ、いや、礼なんかい】

僕が、お礼を言つと、マシューは赤い顔をしてもじもじしている。

【何? 僕何か変なこと言つた?】

「おい宮本、お前がそんな殺傷能力のある笑顔なんかしてやるから
だ。しまいに押し倒されるぞ」

それを見ていた先輩が、ぶつと吹き出しながらさう言つた。うー、
何考えてんだか、この先輩は。

でも、真っ赤な顔をしているマシューのこと、ちょっとかわいい
とか思つたりして……

僕、ちょっとヤバいかもしれない。

僕、視力検査が必要ですか？

自分のそんな感情を振り払うかのように、僕はガザの実をがりつと大きな口で齧った。酸っぱい！ それも梅干しなんて目じゃないくらい目から星が出てきそうなくらいの酸っぱさで、思わず口が歪んだまま固まる。

「ふ、ふつはい！」

真っ赤な色からは想像できなかつたその味に驚いて、僕は思わず嚥まずに飲み込んでしまつた。

【あ、ごめん。不味かつたか？ 僕、味は知らなかつたもんで】
その様子に、マシューが慌ててそう言つ。そつだよな、見るからに体育会系の（その割には非力らしいけど）マシューが魔法系の回復アイテムを食べることなんてないんだろう。よく、こんな実の事を知つていたなと思った。まあ、こつちの方では食べなくても基本のアイテムなのかもしれないけどね。

【ううん、ちょっと（実はかなりなんだけど）酸っぱかつただけ。心配しなくて、えつ？……！】

それに対しても心配しないでと言おうとした僕は驚いた。目の前にいたマシューがいきなりかわいい女の子になつていていたのだ。歳はたぶん、10歳前後。同じ茶髪で碧眼なんだけど、髪は長くて緩やかにウエーブがかかっている。

【ど、どうした？ そんなに穴のあくびりこ見つめられると、いくら俺でも照れるぞ】

だけど、そう見えたのは一瞬で、そう言つた彼は相変わらずいかついおつさんだつた。

【ほ、僕疲てるのかな。一瞬マシューが女の子に見えた……】

【は？ どこをどう見たらこいつが女の子に見えるつて！？ おみさん丸出しだろうが】

それに対して、先輩は息も絶え絶えに笑つていて。マシューも

【昨日の仕返しか、俺のどこが女だ。しかも女の子?】

と、怒つてはいるが、どことなく焦つてているような気もする。

「使つたことのない魔法を使って、頭いかれたんじゃねえか? も

うこのまま飯食わないで寝ろ!】

「えーっ、こ、飯は食べますよ。僕MP切れで倒れたんですよ。食べなきゃ回復しませんよ!】

先輩のご飯抜き発言に、僕は猛抗議した。でも、日本語のわからぬ

いマシューは心配そうに僕たちを見つめる。それに気づいた先輩は、

【心配すんな、大丈夫だよ。この食い気バカが簡単にくたばるか。

飯抜いて寝ろってったら、怒つてんだよ】

と説明している。その説明も説明だけど、それに対しても大きく頷いて納得するマシューもマシューだ。

うー、僕病人なのに……みんな大っキライだ!!

しつかり食べてぐつすり眠った僕は、翌日すっかり元気になった。魔力が完全に回復したかどうかは全然判んないけど、何だか今朝はどんどんと力が湧いてくる気がする。あのガザの実つて、実は強壮剤？ マシューがいきなりかわいい女の子に見えちゃつたりするし。

朝食を食べ終えた僕は、先輩から“悲しいお知らせ”を聞く。どうやらあの通称ポンコツ（正式には社用車だけど）のガソリンがもう残り少ないと呟つ。

【たぶん、次の町までは保たないだろ？。だから、ここに置いていく】

自家用車は、ガソリンなればただの鉄くず……。よリまだ性質が悪い。中途半端なところでエンストしてしまえば道を塞ぐし、車を知らないこの世界の人の好奇の目にさらされる。悪くいけば山賊あたりにバラバラに解体されてしまつかもしない。先輩の言うことはもつともだけど、気楽に着替えなんかの荷物は載せておけるし、何より僕らは営業と言つたつて普段は電車や車を利用しての間つなぎの徒步だ。そんなに長い距離を歩いている訳じやない。あまり急な山道なんかはないみたいだけど、次の町まで歩き切れるのか？

【仕方ないかあ……】

僕はそう相槌を打ちながら、ふと道端の屋台に目が行つた。その屋台は、軽く干した魚をフリッターにして売つてゐる。

「富本、お前朝あんなに食つたのに、まだ食つつもりか？」

屋台の揚げ用の大鍋を凝視してゐる僕に、先輩は呆れ顔でそう言ったけど、僕はそれに返事をせず、逆に店のおばさんに

【この揚げた後の油つてどうされるんですか？】

と聞いた。するとおばさんは、

【えつ、コレ？ 捨てるだけだけど。カスは肥料にもなるけど、油

は使いようがなくつていつも困るのよ】

頭を抱えるようなポーズをしてそう答えた。

【じゃあ、僕がソレ、いただいていいですか？】

【持つていつてくれれば、こっちも助かるよ。そこの樽がそっただから、好きなだけ持つてきな】

おばさんはそう言って、路地の隅に置いてある樽を指差した。

【じゃあ、樽」と頑いていきます】

【樽」と！？ こいつ何に使うんだい。言つとくけど、もうそんなのじや何も食えるもんは揚げられないよ】

【別に食べませんから、大丈夫です】

驚いてそう言つおばさんに、僕は笑顔でそう答えると、

【さあ、樽をひつくり返すのを手伝つてください。転がしていくますよ】

と、先輩とマシューに言つた。先輩は慌てて

「お前、まさかこれをあのポンコツに入れるつもりじゃねえだろ？」
と言つた。

「ええ、そのまさかです」

僕は、先輩にそう言つと、先輩は憮然とした表情で

「確かにそういう車が一時話題にはなつてたが、あれはソレ用に改造してはるはずだ。お前、完全に壊す気か？」

と返す。それに対しても僕はマシューに、

【マシュー、ここから王都グランディーナまではあと50のマイル（
80km）くらいつけて言つてましたつけ】

と聞くと、マシューは

【ああ、あと町3つだからそれくらいだらうな

と言つた。

「何もそのままで入れるつもりはないですよ、先輩。まあ見てください

僕はそう言つて、首をかしげながら樽を押していく一人の男の前を

鼻歌交じりで先導していく。

文系のガソリン捻出大作戦 2

車の前まで樽を運んでもらつた僕は、その樽を凝視し、中身だけに集中する。

「よし、ロックオンっと

「何をやるつもりだ

「先輩、石油っていうのは、太古の生物が化石になつて液状化したものですね。僕、文系だから詳しくしらないんですけど」

「は？ 僕も文系だしよく分かんねえけど、そうだったかな」

「じゃあ、それ再現しちゃえば良いんですよ

「再現つて……」

どうやつたら再現できるつてんだ？ と頭の中に疑問符を一杯蓄えているのが丸分かりの先輩と、日本語で会話しているので、意味が分からず（もつとも英語で説明したつてこの世界のマシューには内容が理解できるとは思えないけど）僕の出方を見守っているマシューを後目に、僕はもう一度樽の方に向き直つて、

〈汝その嘗みを止め、石となれ。Stone!〉

と、中身を石化させ、

〈Press〉

と圧縮させる魔法を発動させる。それから、

〈時の流れよ、汝の中で光陰の如く駆け抜けよ。Still!〉

と、樽の中身の時間だけを一気に進ませた。

「さてつと、一億年ぐらい進んだかな

「一億年！！」

「先輩、中身が液状化してるか確かめてください」

僕は一億年という途方もない数字に驚いている先輩にそう指示した。

先輩は、

「富本の癖に、俺に命令なんかするな」と言いつつ、素直に僕の指示に従う。樽の栓を抜くと、嗅いだこと

のある揮発性の香りがあたりに広がった。

「う、ウソだろ？ ホントにガソリンが出来てんのかよ」

「じゃあ、入れましょう」

僕はそう言つと、車のガソリンタンクの栓を開いて、高く手を挙げると、

「汝その重さを天使の羽の如くし、我の手の動きに従え。Move！」

と唱えると、樽は軽々と空中に浮き、自分からガソリンタンクにその中身を注ぎ入れた。こぼれてしまわない程度で僕は手を下に控る。樽はゆっくりと元の位置に戻った。

「はあ、終わった」

その途端、達成感と共に、急激な疲労が襲ってきて、僕はその場に膝をついて崩れた。

【ビ、ビク！】

そこでかかっていた魔法が解けたかのように、今まで固まっていたマシューがものすごい勢いで駆け寄ってきた。

【ねえ、大丈夫？ 賴むから無茶なんてしないで！】

と、涙目で叫ぶその声は、いつもの低い声ではなく、高く透き通つたかわいい声だ。

【マシュー、やっぱ、かわいい。でも、その顔で、オネエ、言葉は、ちょっと、キモチ悪い、かも】

それに対して僕は肩で息をしながらそう言つてグッジョブポーズで微笑んだ。目がかすんで体が傾ぐ。

その時、いきなり僕の唇に何かが触れた。強引に口に押し込まれる。えつ、まさかマシューが？ キス？？ と思つた瞬間、目も覚めるような酸っぱさが広がる。

それは、

【誰がオネエだ。『じたご』た言つてないで、コレを食え！！ 死んじまうぞ】

と言いながら、真っ赤になつて怒つているマシューが手にしている
ガザの実だった。

【まだ持つてたの？】

僕は酸っぱさで口を曲げながらそう聞いた。

【ああ、一つでもいくつでも手間は変わらんだろうが】

そりやそうだろうけど、どうもこの強烈な酸っぱさは慣れない。『良薬口に苦し』とは聞くけど、『良薬口に酸っぱし』なんて反則技だ。まあ、一晩ですっかり回復してまた魔法が使えたんだから、かなりの妙薬だつてことは認める。でも、脳まで痺れる酸っぱさはどうにかしてほしい。

おかげで何とか倒れずに済んだんだけどね。

せつかくガソリンを満タンにしたんだから、一気にグランディーナまで行こうと言った僕に、マシューは、

【王都は都会だ。こんなもんどこにも隠しておく所がない。リルムの町でもそつだつたんだ、欲に駆られた連中にまた狙われるぞ。一ツ手前のガルダモで降りて歩こう】

と言った。僕はそれに対して、ため息を一つ落として、

【そして、マシューは一人で行くんですよね、違う？】

と返す。マシューの肩が図星という感じで揺れる。

【俺には……】

【大事な手紙を運ばなきゃいけないってことは解ってる……】

そして僕が言おうとしていることを聞きもしないで、

【解つてない、ビクは全然判つてない！ 僕の正体も知りもしないでのこのこ付いて行こうなんにするなー！ それに、お前にはコータロがいるだろ。コータロはコータロの考えがあるだろ？】

と怒鳴り気味に先輩に尋ねる。それに対して先輩が、

【いや、俺は別にマシューとグランディーナに行くのには異論はない。大体、この世界じゃ右も左も判りやしないしな。ってことは、

俺たちはどこに行こうが何をしようが自由つてことだ。それに王都ならひょっとして俺たちが元の世界に戻る方法を知ってる奴もいるかもしないしな。俺たちにとつても全くの無駄足じやないと思つてるんだがな。それとも、お前の方が一緒に行つてまざい理由でもあるのか?】

と聞き返すと、

【いや……まざいことなんて……ない】
と、なんだかじどうもどろで答えた。

【じゃあ、問題ないだろ。『袖擦り合いつも多生の縁』ともいって、

な、富本】

【はい!】

ニヤリと笑いながらそういう先輩に、僕が元気に返事をする。それから、先輩が少し声をひそめて、

【それにな、こいつを敵に回したら怖いぞ。本気で怒らせてあの『一億年』の魔法なんかかけられてみる。一瞬で塵だぞ】

と付け加えた。それを聞いたマシューはぎよつとして僕を見る。そして、ぼそつと

【そうだよな、魔女様を怒らせると禄なことがないよな】
と、つぶやく。次の瞬間、

【誰が魔女様だって?】

と薄笑いする僕に、二人は完全に固まった。でも、

【冗談はそれくらいにして、早く行きましょう】

と、言って一步足を出したところで僕は目の前が真っ暗になつてその場に蹲る。結局、二人に支えられて車に乗り込む始末だ。

「これじゃ、メガモンテを連発するマーティーモンと変わらない……かも。

やがて、僕らの前にグランティーナの城郭が見えてきた。お城だけではなく、町自体も堀で囲まれていて、その端には警備の兵が常駐している。マシューが言うようにのんきに車で乗り付けられる雰囲気ではない。よくよく考えてみれば、城下町にそう易々と入れるようではそれこそ問題なのだ。

僕たちは街道筋の外れに車を置いて歩き始めた。車に乗っている間に僕はマシューから口にねじ込まれたガザの実を身震いしながら完食してはいたけど、たかだか2～3時間のインターバルでは失ったダメージは回復しておらず、足下はおぼつかない。本当なら肩をかしてもうらう所だけど、マシューも先輩も背が高すぎてそういう訳にもいかず、僕は蟬みたいにマシューにしがみついて歩いた。何故マシューかと言えば、先輩にそんなことをしたら、絶対になぐられると思うから。

だけど、町に入るための跳ね橋の手前の所で、僕らに突進してきた一団があった。ちゃんとこの世界のトレンドに着替えてあるんだけどな、それでも『不審者』がバレた？

思わず三人で顔を見合わせる。そして、半ば引き気味の僕たちの前に息を切らせながらやってきた老人は、先輩の前で膝を折り、【殿下、殿下、よくぞご無事で。フローリア姫様が到着されてもお帰りにならないので、心配しましたぞ】

と臣下の礼をとった。で、殿下！？ 電化じゃなくって？
(もつとも英語じゃ全く違う単語なんだけど)

老人はポカーンとしている先輩にお構いなしに、今度は立ち上がりて僕の手を取ると、

【セルティオ卿もお役立ございました。はて、そこの御仁は……】

握手を求めながらそつと言づ。えつ、僕も誰かと間違われてるの？

握手を求めながらそつと言づ。えつ、僕も誰かと間違われてるの？

その中でマシューだけがそつくりさん？　がいないらしく、老人が胡乱な表情で彼を覗き込む。それに対し、マシューが

【わ、私はガッシュタルトのマシュー・カールと言つ者です。フローリア姫に火急の文を届けに参りました】

つつかえながら老人に挨拶をした。

【なんと、ガッシュタルトのお使者であられるか。私め、このグラントディール王国の家令を仰せつかつておりますクロヴィスと申します。さあ、殿下、陛下も心配されちゃられます。一刻も早くお城へと、先輩を促す。

「お、おいここは付いて行くべきなのか？」

それで慌てた先輩がこそっと僕に耳打ちをする。

「とにかく、マシューが手紙を渡すまでは、このまま付いて行つた方が良いんじゃないですか？　でないと、マシューまで疑われて、手紙届けられなくなりそうです」

「分かつた」

僕の答えに先輩は頷いてから、クロヴィスさんに続いて、城下町に入つて行く。僕もそれに続いて歩きだしたけれど、まだ体に力が入らなくてマシューに寄りかかってゆつくりしか歩くことができない。それをクロヴィスさんに見とがめられた。

【やつ、これはセルディオ卿、いかがなされました。】

【あの、えつと、これはガス欠……いえ、ちょっと……】

ガソリン作ったから電池切れですなんて言えないしなあ。僕が答えられずにもじもじしていると、

【長旅で体調を崩されましたか。それは大変】

クロヴィスさんは勝手に体調不良と判断して（この人ホント自己完結型だよね）、一緒にいる騎士らしき人に目で合図を送る。すると、見るからに屈強な男の人が、

【失礼します】

と頭を下げる。いきなり僕をお姫様だっこして歩き始めた。

【あ、大丈夫です。僕、ちゃんと自分で歩けますから】

男が男にお姫様だつこされているというとんでもなく恥ずかしい状況に僕は真っ赤になつて抗議したが、だつこしている方の騎士は顔色一つ変えず、肃々と歩みを進めていく。

【ねえ、降ろしてつて言つてるでしょ！】

そして、なおも抗議を続ける僕に、少し前を歩いていた先輩がいきなり僕の方に向き直ると、

【そんなに気を使つな、セルディオは私を守るためにちと力を使いすぎた。ここまで戻つてきたからにはもう案ずることはないではないか。陛下の御前までは楽をさせてもらえ】

と言つた。げつ、いきなり王子なりきりですか、先輩。確かに、みんなのためにガソリン作つて力使い果たしましたけどね。そんな汚闊な発言して、もし偽物だつてバレたらどうするんですか！ 僕の顔が恐怖でひきつる。それを見た先輩はつかつかと僕の耳元まで戻つてくると、みんなに分からないように日本語で、

「こらつ、王子のフリしろつてつたのはてめえだろつが。とにかく今はなりきつて、お前の体力が回復し次第何か理由付けてばっくれりや良いんだよ。今のお前の体力じゃ到底逃げきれないからな。がんばつてそのなんたら卿になりきれ！」

と言つてから、

【本当に、私に忠誠を頼くのは良いが、自分の身も労つてくれよ】
とわざと大きな声でそう付け加えた。

【では、このように帰還が遅れたのはやはり殿下に……】
クロヴィスさんがそれを聞いて慌てて先輩に尋ねる。

【ああ、命も危うかつたが、セルディオの力で何とかな】
調子に乗つて先輩は王子の演技を続ける。それにしても、セルディオさんのキャラも知らないのに、そんなテキトーなこと言つて良い

わけ？でも、その発言に、みんながおおといふ感嘆の声が挙がり、クロヴィスさんがここにこしながら、

【殿下の危急を救われたのですか。さすがは希代の魔術師と謳われたお方。私も見込んだ甲斐があつたというもの】

と返した。良かつた。そのセルティオさんって言う人もやっぱり魔法使いらしい。顔が似るとキャラもくるんだろうか。ホツとした途端、全身から汗が噴き出す。

【陛下との謁見が終わられたら、一旦城で休んで行かれると良らしいでしよう】

あ、セルティオさんは一応お城の人じゃないんだ。

先輩さえ何とかできれば、僕は体調さえ回復したらいいを出される。僕は少しは希望を持てる展開に胸をちょっととなで下ろして、ふとマシューの方を見た。マシューの方も僕を見ていたらしく目があつたが、何とも複雑そうな顔をして目を逸らした。マシューは日本語が解らないから、先輩は本当は王子様で、騙されていたとしても思つていいのだろうか。

マシューに本当のことが説明できないまま、僕たちはグランディール城内へと入つていった。

謁見の間

城に入った僕たちにまるで卒業式みたいに両側に人の垣ができる。卒業式と違うのは彼らのほぼ全員が男性で、拍手の代わりに臣下の礼をとっている所だろう。

人の波を進んで、広い部屋（謁見の間）に入ると、僕はやつと床に降ろしてもらえた。そしたら、マシューがさりげなく、僕に脇（肩じゃないのが本当に悲しいけど）貸してくれた。王様に謁見するのに座つたりはできないもんね。

すると、王様が謁見の間につく前に、一人の女性が入ってきた。彼女はまっすぐ先輩のところに来て、

【コーテル様ご無事で何よりです。本当にわたくし、心配いたしました。良かった】

と言った。王子様の名前つてコーテルなの？ 僕はびっくりする反面、マシューが幸太郎という名前をコーテルと言つたことに納得した。こっちではコーテルという名前が結構あるのかもしれない。

だけど、その女性を見てまたびっくりする。

「か、薰！」

先輩が思わず素つ頓狂な声を上げた。だって、そこにいたのは総務の谷山先輩のそつくりさんだつたからだ。

谷山先輩というのは、総務の女子社員で、先輩と売り上げの伝票のことなんかでつば迫り合い繰り返している、先輩とは犬猿の仲つて感じの人だ。確か、谷山先輩のお祖母ちゃんがイギリス人で、どうなく日本人離れした顔（先輩はそれを『人間離れした顔』なんて茶化すけど）だから、この外人っぽい異世界集団にいても、僕らよりもっと違和感ないんだけれども。

そのとき、谷山先輩もどきの体が傾いだ。先輩がとっさに彼女の肩を抱いて支える。

【フローリア姫様、大丈夫ですか】

それを見てお付きの侍女が慌てて彼女に近づいたが、先輩はそれをやんわりと制して、そのまま彼女を抱いたままでいた。そうか、谷山先輩もどきが、ガッシュタルトからきたフローリア姫なんだ。状況から考えると彼女はコーラル王子の婚約者みたいだから、ふらつく婚約者をさっさと侍女に預けちゃうのはまずいもんね。

【姫様は殿下が消息を絶たれてからほどんど眠つておられませんでしたから】

侍女がそう補足する。

【だつて、わたくしコーラル様ともう会えなくなつてしまつのではないかと不安で……】

【もう心配しなくて良い。私はこうして無事だ】

それを聞いた先輩は、そう言つて彼女の頭を撫で始めた。そんな先輩の顔を横目で見ると、先輩はものすごく照れくさそうで嬉しそうな顔をしている。その顔はとても演技だとは思えない。もしかして先輩、本当は谷山先輩のこと好きだったの？ いつもケンカばかりしているけど、よくよく考えてみればじやれあつていたような……

「そつかあ

僕がぷつと吹き出してそう言つと、

「宮本、何を変な妄想してる」

と、先輩は横目で僕をにらんだ。僕は、

「何にも。あ、お姫様の手前、あまり日本語でしゃべらない方が良いですよ」

と返した。

そのことで改めて僕の存在を思い出したみたいの（ホント、2人の世界だつたもんねえ）お姫様、

【セルディオ卿も、今度は誠にご苦労さまでした。あら、そちらの方は……】

とマシューを覗き込む。手紙を届けなきやならないご本人登場で、しかもかなりの美人だから緊張しているのかもしれないけど、マシューは目を泳がせて明後日の方向を見る。

【ほらマシュー、ガッシュタルトからの手紙渡さなきや。本人が出てきたからって固まつてどうすんのさ】

貸して貰っている脇を突つきながら、僕はそう言った。日本語が通じるんだつたら、彼の名誉のために日本語で囁いてあげたい位だ。

【手紙ですか？ お父様かお母様に何か？】

僕の発言を聞いてフローリア姫がものすごく不安そうな顔になる。そりやそうだろ、婚約者がやつと戻ってきたと思つたら、今度は親が……なんてことになれば、マジで倒れるかもしれない。でも、マシューは手紙を取り出すどころか、ますます明後日の方を向く。それを見たお姫様は、何かを気づいた顔になり、

【まああなた、なんて格甲をしているの？ 正体をあらわしなさい！】

と、マシューに向かつて一喝したのだった。

マシュー！ 君つてば何？ 実はラスボスだったとか言わないでよね。

フローリア姫に一喝されたマシューは唇をかみしめて立ち廻りして、いたが、姫様が

【エリーサ！ 分かつているのよ】

と言つと、マシューははつと大きなため息を吐いた後、それこそしゅるしゅるという擬音が聞こえてきそうな勢いで、どんどんと縮んでいき、あつと言づ間に子供の姿になつた。それは、僕がガザの実を初めて食べたときに見たあの少女だつた。ガザ実を食べる」とで、一時的に魔力が上がり、マシュー（エリーサちゃんと言づべきなのかな）のかけている魔法を見破つていたのだろう。でも、僕は経験値が限りなくゼロに近かつたから、一瞬だつたんだろうな。

それに、日本語と違つて英語は言葉尻で性別を特定するのは難しいし、僕にとつては外国語だからマシューの体格で低音の聲音で話されたら、僕の頭は無意識のうちにそれを男言葉として認識していた。だから、マシューのことを本当は女の子だつたなんて微塵も思わなかつたのだ。

【お姉ちゃん、なんで分かつちやつたの？】

エリーサちゃんは、フローリア姫にふくれつづらでそつ尋ねた。

【分からぬい訳がないでしょ、あなたが家出したつてことはひとつくにソルグが知らせてきてるし。あなたがお城を出て、向かうとしたら、私の所しかいだらうつて、おじいさまもね】

【そう、バレてたの……それにしてもあのバカ鳥、速すぎるよ】
フローリア姫の答えに、エリーサちゃんが舌打ちをする。

【あら、あなたが遅すぎるのよ。大体、空を突つ切つて飛んでくる鳥に、徒步のあなたが勝てるわけないじゃない。途中からは、コータル様たちの馬にでも乗せてもらえたの？ 先触れの者からは、あなたたちが歩いていたと聞いたけれど】

ソルグというのは、伝書鳩みたいなもんなんだろうか。鳥だと、

届けるのは不幸の手紙みたいな気はするけどね。

それはともかく、この世界の魔法使いが簞に乗つて空が飛べるかどうか僕は知らないけれど、あの魔道書にも、空を飛ぶ項目はなかったし、飛ぶ魔法とかはないかもしない。

と言つことは、この幼い少女はなりを大人にえていたとしても、たつた一人で車で何時間もかかる道程を行こうとしていたつてことだ。

パシンッ、次の瞬間、広い謁見の間に平手打ちをする音が響く。いや、正確に言えば響かせる。僕が、エリーサちゃんの頬を打つたのだ。

「なつ、富本！」

【ビク！！】

フローリア姫をお姉ちやまと呼ぶのだから、エリーサちゃんは間違いないく隣国のお姫様。国際問題に発展しかねないその状況に、周りは一気に青ざめた。だけど、僕は怯まずに、

【エリーサ様、あなたは何という無茶をなさるんですか。魔法で大人のフリをしたからと言つて、それはあくまでもフリでしかないんですね。あのときもたまたま殿下と私が通りかかったからよかつたものの、そうでなかつたらどうなつていしたことでしょう。そうなつたときに、お悲しみになる陛下やお后様のことを考えなかつたんですけど！】

と言つた。

【だつて……】

【だつてじゃないです。知り合つて3日と経たないこの僕が、それを知つたらこんなに苦しいんですよ。何もなくて本当によかつた】僕はそう言いながらエリーサちゃんの頬を撫でた。すると、エリーサちゃんは泣きながら僕にしがみついてくる。やつところで立つている僕はちょっとよろけたけど、何とか踏ん張つて、彼女を抱きしめた。その様子に、安堵のため息がそこかしこからもれてくる。

【お、おほん、そろそろ陛下が参られます。お控えください】

その時、奥の方から出てきた人が僕たちをちらりと横目で見てそう言った。僕は慌ててエリーサちゃんの身体を離し、臣下の礼をとつて、王様を待った。

しばらくして奥の扉が全開になり、王様が徐に大臣やらお付きのものを大勢引き連れて現れて玉座に着いた。人々は概ね遅ればせながらの王子の戻還に喜びと安堵の表情を浮かべている。でも、若干名そうじやない者もいるようだ。特に大臣らしき小太りの中年のおっさんは、顔こそ笑つてはいるが、目が笑つてはあらず、なんとなく心の中で舌打ちしているのが聞こえてきそうな気がした。

【コーラル、ようやく帰つて参つたか。あまりに遅いので、無法者に襲われて命を落としたという者まで現れてな、心配したぞ。いくらこちらでの挙式がまだだからとは言え、セルディオとたつた2人でなく、姫の馬車と同行する形で帰つても良かつたのではないか?】王様は先輩にそう言つた。やつぱりフローリア姫は王子の婚約者だつたんだ。王様の言つてることを考えると、一応、ガッシュタルトでの結婚式は終わつているみたいだけど。

【いいえ、今度のことは私が不注意だつただけのこと。そのためにはセルディオを大変な目に遭わせてしました】

王様の労いの言葉に、先輩がさつきのクロヴィスさんへの発言とも辯證を合わせるように報告する。

【そうだ、セルディオ、コーラルの命を救つてくれたのだとな。このバルド、高い壇上からではあるが、心から礼を言つぞ】

【とんでもない。私は殿下に仕えるものとして、当然の責務を果たしたまでのこと。そのようなお言葉、もつたいのうございます】王様の感謝の言葉に、僕は低くしている姿勢をなお低くしてそう答えた。というより、一旦膝をついてしまつたら、もう元に戻せなくなっているもある。ホントのところをこうと、僕の額にはつつすらと脂汗が浮かんでいる。

【して、その美しい少女は?】

続いて、王様は僕の横でそんな僕の様子を心配げに頭を下げている
マシュー改めエリーサちゃんに眼を向けた。

【ガッシュタルト王女、エリーサ様にございます】

僕の紹介にエリーサちゃんは、王様にお辞儀をした。その仕草はとても優雅で美しい。こんなにちゃんとしつけられている彼女がある大男マシューと同一人物だったなんて信じられない。

【ごめんなさい、お姉ちゃんのご成婚がどうしても見たくて、ノーダル様を追いかけて、強引に付いてきました】

ここにいる理由をそう言つたエリーサちゃんに、

【そりゃ、やはり小さくても女性は女性ということか。姫の婚儀をそれほどまでに見たかったか】

と、目を細める王様。でも、結婚式を見るために男になりますまで、たぶん、200km近い距離は歩かんでしょう、普通。本当は違う理由があるんだろうけど、そこは今聞けないし、これは乗つた方が良い。

【謝るのは私の方です。遅れた分、一刻も早く城に戻りうと、あなたを先にお送りせずに、連れ歩いてしまいました。その上、リルムの町では危ない目に遭わせてしましたし、そんな私をあなたはわざわざガザの実を取りに行ってまで看病してくださったじゃないですか】

と、熱くエリーサちゃんを見る。

【殿下と姫様のご婚儀が終わり次第、ちゃんとガッシュタルトまで私がお送りしますからね】

【セルディオ様】

エリーサちゃんがうるさいの眼で僕を見つめた。これで、僕はこの城を出られる。先輩は……このままグランディールの王子様になつてもらおう。

たぶん、僕の推測では王子様とセルディオさんはもうこの世にはいない。もしいたら、今頃きっとお城に帰つて来れなくとも何らかの連絡はしているはずだ。それがなつてことは……そう言つこと

なんだと思う。

【それでは、婚儀は明後日に執り行う。國中に触れを出せ】
一通り話を終えた後、王様は高らかに結婚式の日程を宣言した。しかし、その時、慌てて

【王よ、お待ちください。騙されではなりませんぞ。こちつらは、
殿_{だい}下とセルディオ卿を騙る偽物でござります】

そう進言したのは、一人眼の笑つていなかつた小太りのおっさんだ
つた。

ラスボス登場……なのか？

【テオブロ、いい加減なことを言うでないぞ】

小太りのおっさん改めテオブロ（胡散臭いので、敬称略！）は眉にしわを寄せてそう言う王様に、胸を張つてこう言った。

【いい加減ではございません。よくご覧ください、殿下の髪や肌はもつと淡かつたはず、セルディオはこれほど小さくはなかつたと思ひますぞ。

それに、こやつは殿下が襲われたのがリルムの町だと言つております。したが、私がその報を聞いたのはトレントの森。話が違います】

大臣クラスの自信満々の発言に、騎士たちがさつと身構える。
確かに先輩はちょっと染めていて真つ黒ではないけれど、それはあくまでも日本のビジネスライフにひつかからない程度の茶色だ。肌はこの色が生まれつきなんだから仕方ない。……にしても、どーせ僕はチビですよ！ 改めて言つことないじゃないですか！－でも、これで僕はこのテオブロって奴が王子とセルディオさんを襲つた真犯人だとわかった。

【ふうーん、テオブロさん、王子たちが襲われたのはトレントの森だつた訳ね】

【そうだ、リルムの町ではないわ。トレントの森奥で殿下らしき者が魔物に切り裂かれていたと報告が……】

【なにつ、確かに、トレントの森と言えば街道沿いを行くよりは近道で、あの在のセルディオとなれば行つても不思議はなかろうが、わしはその様な報告は聞いておらんぞ！】

テオブロの言葉に王様の声が裏返る。へえ、セルディオさんつてお城に住んでないとは聞いていたけど、森に住んでるんだ。いかにも魔法使いつぽい。

【へえ、王様も知らないことを知ってるんだ、テオブロさんつてば

【何が言いたい！ わしは余計なことを耳に入れて王に心配をかけ

まことだな……】

【ふふふ、確かに僕たちは本物の王子と魔法使いじゃない、日本つて国から飛ばされてきた、なんてことない異世界人ですよ】
ちょっとぴり歯切れの悪いテオブロの答えに、僕は軽く笑いながらそう返す。

【び、ビク！】

「富本、自分で言つてどうする…」

その答えに、エリーサちゃんも先輩も一瞬で青ざめた。

【ほほう、取り繕つてもボロが出ると解つてあつさり認めおつたか。この偽王子たちをひとつ捕らえよーー】

テオブロはしてやつたりという表情で騎士たちにそう命じた。だけど、それがウソだつたら、とんでもない不敬罪だし、本物のセルディオさんは『希代の魔法使い』と呼ばれるくらいの人だから、何か術を仕掛けてくるんじゃないかと思つて騎士たちはゆっくりしか近づけない。

【何をしてある、早く捕らえぬか！】

【ちょっと待つてくださいよ。確かに僕たちは本物ではないから、王子様たちが襲われた状況は全く知らないです。

でも、あなたは僕たちが偽物だつて最初から判つていた。どうしてですか？ 本物の王子様はもうこの世にいないと知つてる、そういうことですよね】

【な、何が言いたい！】

【あなたが王子様がいないと断言できるのは、あなたが……いえ、あなたが直接手をくだしたのでは勿論ないでしょうが、あなたの手の者が王子様たちを闇に葬つた、そういうことなんじゃないですか？】

そして僕は……

僕の爆弾発言に謁見の間の空気が一瞬固まる。

【えい、ええい、何を言つたかと思えば！ 王子になりますことがありますかなわぬと知れば、今度はわしを犯人扱いにするなど、言語道断。わしを王弟テオブロと知つての狼藉か！】

テオブロ一人が沸騰した薬缶みたいになつてがなり散らすけど、騎士はぴくりとも動かない。そつか……テオブロは王様の弟な訳ね。じやあ、王子がコーネル様一人なら、それで次の王様は自分のモノつて訳だ。充分な動機あり過ぎで、僕と彼の言つことのどちらが眞実か量りかねているのだろうし、騎士は基本的に王様に従つもの。テオブロは王様じやないもんね。

【な、何をしておる。この大悪人を早く捕らえぬか！】

【テオブロよ……お前よもやコーネルを手に掛けたとは言つまいな

その時、王様が沈痛な面もちでテオブロにそう言つた。

【王よ、王はこの血を分けた弟の言つことより、素性も分からぬ輩の言つことを信じるおつもりですか！】

【わしとて信じどはなはいが、かねがねあまり良くない噂も聞いてあるのだぞ】

【……】

王子様の暗殺計画は今回に始まつたことじやないらしい。テオブロは、王様にそう言われて、拳を握りしめ、唇をかんで黙つていたけど、

【なぜじや、なぜわしの言つことを聞かん。もういい、ならばわしがこの大罪人を成敗してやる！】

と、逆上し、先輩にいきなり切りかかった。ダメだ、王子様だけじゃなくつて、先輩まで殺される！ 僕は、やっぱり自分のスキルなんて一切無視して、テオブロと先輩の間に割り込んで……

僕はテオブロに、あつさりぱつぱり切られた。スローモーションで視界が横に流れしていく。その時に床に飛び散った血が見えて、意外と血つてよく飛ぶもんだなと思う。

切られたところは痛いと言うより熱かつた。それに、心臓がふたつになつたみたいに、切れたところから動悸を打つ。それくらい血が流れているんだろうか。一旦、床に転がつてしまつと、頭を上げることすらできなかつた。

その後、なおも先輩を切り下とするテオブロは、王様が騎士に取り押せえるよつ命じて、あつと言つ間に取り押せられた。テオブロが、

【なぜわしがこのよつな仕打ちをされねばならん。罪人はこやつらじゃ！ 離せ、離せぬか！】

と、大声で叫びながら暴れるのを数人ががりで抑えて謁見の間の外に連れ出されていくのが見えた。

「富本、しつかりしろ！」

騒動が収まつたあと、先輩が慌てて僕を抱き起こす。すると、僕の目に、超どアップのエリーサちゃんの泣き顔が飛び込んできた。

【エリーサちゃん、せつかくの、ドレス、汚れちゃうよ】

僕はそう言つて、彼女の頬の涙を掬つた。

【ビク！ ドレスなんてどうでも良いよ。ねえ、あたし お父様の言つ通り、ビクのお嫁さんになる。だからお願ひ、死なないで！】

? なんでお父様の言つ通りにするとどうしてエリーサちゃんが僕と結婚しなきやなんないのか、その辺が全く分からない。でも、切れすぐはとっても熱かつた身体は、ずいぶんと血が抜けてしまつたのだろうか、今度は急激な寒さがやつてきて、ふるえで口が上手く動かくなつてきはじめた。

【なに？ お嫁さん】

ところのがやつとで、それもものすごく小さく声しか出なかつた。

【ミシヤシシャ、ミシヤシシャ……】

すると、ヒリーサちゃんは懸命に美久と発音しようとした。それを聞いて先輩が、

【一度に言おうとするとき発音できないんだから、区切ればいい。ミシ、ヒサ。ああ、言つていいんだ】

と助け船を出す。

【ミシシ、ヒサ……ミシシ、ヒサ】

ヒリーサちゃんは一文字ずつ区切つて僕の名を呼ぶ。でも、ミシシーなんていつたら長い舌で卵を飲み込まなきやならなくなりそんだけどなんて、つつこみを脳内ではいれつつ、それでもかわいいから許すと僕は思つていた。

【な……】

【好きだから、大好きだから……しないで、お願ひずっとあたしのそばにいて……】

実は僕も君が好きだよ。君がいかついおつさんときから、たぶん。自分が同じ男に惹かれる意味が解らなくて戸惑つてしまつたりもしたけれど、きっと僕はマシューの中にちゃんと君を見つけていたんだと思うよ。

だけど、僕はその想いを彼女に伝えることはできなかつた。『I love you』と言つた言葉は、荒い自分の息に書き消されて、そして……僕の意識は深い闇の中へと沈んでいった。

い、生きてるっ…！

僕は、闇の中でセルディオさんに会った。闇の中なのに、セルディオさんだけが、ぽかっと浮かび上がっていた。

そして、確かによく似てはいたけれど、魔道士が着るよつなローブを纏つた彼は、僕より数段落ち着いて見えた。

「美久、巻き込んだ上に痛い思いまでさせてしまって、どうもすいませんでした」

僕は彼が日本語で語りかけてきたので、驚いた。ああ、でも、ここは天国なんだろうから（いや、真つ暗だし、もしかしたら地獄？）悪いことはしないつもりなんだけど（そんなのもアリなのかなと思う。僕は、

「セルディオさん、あなた方の仇はとりましたよ」

と言った。そしたら、セルディオさんは、くつくつくと笑うと、「仇ですか、じゃあ、そう言つことにしておきましょうか。では、

私はこの辺で

と言つてボワーンと消えた。なんかどこまでも魔法使いっぽい人……

そして、僕はその途端、闇の中からいきなり光の中に放り出された。あまりの眩しさに、一旦目を開けたもののまた閉じなきやならないほど。そして、次の瞬間お腹に強烈な痛みが襲ってきた。テオブロに切られたところだ。生きている、僕まだ生きているんだ！！僕が再度目を開けると、そこは謁見の間ではなく、白い壁に囲まれた、小さな部屋だった。僕はベッドに寝かされていて、隣のベッドには先輩が。その手をフローリア姫が心配気に握っている。テオブロはもう捕まつたはずなのに、どうして先輩までベッドに寝かされているんだ？！

「せん……ぱい……せん」

僕が先輩を呼ぶと、フローリア姫は弾かれたよつこ、僕の方を見て、「富本君、気が付いたの…！」

と日本語で言つた。あ、じゃあ、この人はフローリア姫じゃなくつて、谷山先輩？ そう思つて、先輩の方をもう一度見ると、先輩には、あつちではお目にかかれそうもない管やら機械に囲まれている。ああ、ここは日本だ。僕たち、戻れたんだ。そう思つたら痛みは尚更現実化してきて、たまらずに、

「ううう」

と僕は呻き声を漏らした。その声を聞いて、

「痛いの？」

と尋ねる谷山先輩への返事の代わりに、僕は切られた所を庇うように身をすぐめた。その様子を見て彼女があわててナースコールを押す。

程なく、病室に看護師がやってきて、僕の着ていた布団をひつペがすと、

「大変だわ！」

と叫んでだだだとまた慌ただしく病室を飛び出していった。それからしばらくして、その看護師は他の看護師やら医師やらを引き連れてどやどやと戻つて来た。

「大変だ、しかし、何で今更縫合部分が外れたのか。とにかく、緊急手術の用意！－！」

僕を見た医師が、首を傾げながらそう言つ。縫合部分？ 僕はこっちの世界でも怪我をしてたのか。痛みでぼんやりとしてきた頭でどう思った僕は、こっちの世界に戻ってきたばかりだというのに、またすぐ麻酔で眠らされてしまった。

僕は眠りそれでも、さっきまでの世界に行くことはなかった。どうでも良いような取り留めのない、ホントに夢らしこ夢を何個か続けて見てまた目覚めた。その時、

「お兄ちゃん、大丈夫？」

と僕の顔をのぞき込んだのは……なんとエリーサちゃんだった。彼女を見て、あ、僕はまた異世界に戻ってきてしまったんだと思って嬉しくなってしまった。現実逃避といわれても仕方ないかな。

「お兄ちゃん、本当にいめんね」

枕元で、エリーサちゃんが申し訳なさそうに頭を下げる。

「エリーサちゃんがどうして謝らなきゃならないの？」

そうだ、エリーサちゃんが謝る必要なんてない。本当は大男に変身できる位の魔女だった訳だから、もしかして魔法を駆使して僕を強引に呼び戻しでもしたとか？ でも、彼女から帰ってきた答えは僕の予想とは全く違っていた。

「英梨紗が道路に飛び出したから」

「道端に飛び出した？ エリーサちゃんが？」

グランディーナのジコの道端に飛び出したからって、どうして僕に叱られなきゃならないと思つんだわ。あ、隣国まで家出したことで、平手打ちにしちゃつたんだっけ、僕。あれが、トラウマにでもなってる？

「うん、なんか違う。そつきから彼女はエリーサじゃなく、エリサって言つてるし、僕をビクじやなくお兄ちゃんと呼んでいる。それに、よくよく考えれば（よくよく考えてみなくとも）彼女がしゃべつてるのは紛れもない日本語。僕や先輩や谷山先輩のそつくりさんのがいたように、エリーサちゃんのそつくりさんもいたって訳か。もっとも、僕の側から言えばエリーサちゃんのそつくりさんがエリー サちゃんというのが、正しにのだらうけれど。

あの日僕たちは、アウトドアでの調理器具を展示するために、幕張に行く予定だった。先輩がセリカちゃんに乗らなかつたのは、何のことはない、見知つた道だつたからで、そもそも迷子にもなつてなんかない。

で、真相は、会社近くの道路に飛び出してしまつたエリサちゃんを避けようとして先輩がハンドルを切り損ね、ガードレールに激突した、そういうこと。

しかも間の悪いことに、僕たちはあの時、ロイヤリティーのチッカマンを大量に乗せていた。事故後そのチッカマンに引火し車は大破。僕たちは瀕死の重傷だつたといつ。

「エリサちゃんはどこも怪我していないの？」

「うん」

「なら、良かった。謝ることなんて何もないよ。僕は君が無事でいてくれればそれで充分だよ」

僕はそう言つて、エリサちゃんの柔らかくて細い髪を撫でた。エリサちゃんの頬がぽあつと薔薇色に染まる。

「でも、どうして、お兄ちゃんは英梨紗の名前を知つてゐるの？ 最初変なとこ伸びてたけどさ」

そして、不思議そうにエリサちゃんはそう聞いた。

「うん？ 何でかな、エリサちゃんの夢を見てた。君が僕をここに連れて帰つてくれたんだよ」

「ひえ？？」

当然だけど、エリサちゃんは意味が全く解らないだろう。でも、僕はこの展開に運命すら感じているんだけどね。夢の中で言えなかつた『I love you』をきつと言えると確信したから。

「僕のことは、夢の中みたいにビクつて呼んでくれる？」

そう言つた僕の言葉に、エリサちゃんは薔薇色を通り越して、茹で蛸になりながら、ブンブンと首を縦に振つた。

僕の耳に、相変わらず眠つたままの先輩が夢の中で言つた、『お前、しまいに押し倒されつぞ』の言葉が聞こえた気がした。

先輩、僕このままじゃ押し倒される前に、押し倒しちゃうですけど。
それって、犯罪……ですよね。

僕の傷は順調に回復していった。先輩も傷は大分良くなつていて、もう命の心配はないという。だけど、先輩は僕が目覚めても一向に目覚める気配がなかつた。

とんでもない大事故だつたにも関わらず、僕にも先輩にも脳に損傷はないという。なのに目覚めることがない先輩……僕はある一つの思いにどんどんと心が苛まれるようになつていった。

僕たちがいたあの世界はもしかしたら僕の夢の世界なのではないだろうか。そして、本来なら先に先輩がテオブロに切られてこちらの世界に戻り、それから僕が戻る。あるいは、僕が本当はもうこっちの世界には戻ることができなかつたのかも。

だけど、僕は先輩を押し退けてテオブロに切られた。そのために先輩をあつちの世界に閉じこめてしまつたんじゃないのかと。

長い間眠つたままの先輩の肌は抜けるように白くなり、少し痩せてしまつていて。でも、まだちゃんと生きていることを主張するかのように髪が少しずつ伸びる。その髪をまるで壊れものを扱うように優しく丁寧に剃る谷山先輩を見ていると、僕は胸が詰まりそうだった。先輩、こんな戦闘不能の状態から早く抜け出してきてくださいよ。マシュー曰く、先輩は勇者様なんでしょう？

先輩の髪を剃り終わつた後、谷山先輩がぽつりと、「富本君、どうしたら鮎川は目を覚ますんだろうね」と言つた。

僕はRPGの戦闘不能なら、死者蘇生の呪文を唱えればそれで良いのになと思つた。実はあの魔道書を最初に見た時、ゲーマーの僕はそこを真つ先にチェックしていて、その詠唱文言もちゃんと覚えていた。だけど、現実世界でそれが効くとは思えないし、死者蘇生の魔法は、ランク的に最上級に属するはずだから、よしんば僕にまだ魔力が残つていたとしても、全然MP不足だらう。でも、あつち

の世界では超初心者の僕が結構、ぼんぽんと上級魔法唱えていた。後で、ぶつ倒れるおまけ付きだけど。それでも、唱えてみるだけの価値はある？

もし効いたらガザの実のないこの世界では、僕の方が今度は寝つきになってしまつかもしない。ちょっとそんな考えが頭を過ぎつて、僕はかすかに震えながら谷山先輩に、

「谷山先輩、僕ね、眠っている間すつごくチートな魔法使いだったんですよ。案外死者蘇生の魔法を唱えたら、復活したりして」とわざとおどけてそう言った。

「ふふっ、なにそれ。チープなコミックスジゃあるまいし」

案の定先輩はそう言って笑った。

「でも、やってみる価値はありますよね。何もやらないよりは良い」僕はそう言って、やつとくつこいたばかりのテオブロに切られた傷を底いながら立ち上がり、背筋をピンとのばすと、

〈黄泉の世界を統べるものよ、我の声に応えてこの者の魂を現し世に呼び戻せ、Rise dead〉
と高らかに詠唱した。

先輩の頬が上気したような気がした。でもそれだけで、先輩はやっぱり目を覚まさない。当然と言えば当然だけど、魔法なんてありはしないのだから。

「ヤダ、それもしかしてラテン語？ イヤに本格的じゃない」

谷山先輩が目を丸くした後、バカ笑いする。ひとしきり笑った後、小声でありがとうと言つて、

「じゃあ、お姫様がキスでもしたら、田覚めるのかしら。眠り姫ならぬ、眠り王子は」

と、言つた。彼女は全くの冗談のつもりだつたんだろうけど、僕が「それ、アリかもしませんよ。僕の夢の中では谷山先輩はお姫様で、先輩は王子様だつたんです」

と、マジ顔で返すもんだから、ちょっとびり引き気味だつたけど、

「じゃあ、やつてみよっか。せらなりよりはマシかもね」

と、笑うと、照れながら先輩に顔を近づける。そして、二人の口び
るが重なったとき……

窓も扉も全く開いていない病室に一陣の風が吹いた。驚いて、窓
を確認した僕の耳に、

【つ……ん、フローリア愛してる】

と言つ先輩の声が聞こえる。ギョッとして先輩の方をみると、先輩
はがしつと谷山先輩を腕の中に閉じこめて、キスをしている。谷山
先輩が突然の事態にあたふたしていた。

唇が離れたあと、谷山先輩に、

「あ、鮎川っ！ いきなり舌を入れてくるなんて、どうこう了見？
ホントはいつから意識があつたの？ このエロ親父！！」
と言われてグーで殴られたことは言つまでもない。

「フローリア」

「はい？」

先輩がお姫様を呼ぶ声に、谷山先輩は疑問形で語尾を若干上げて応える。

【フローリアってなんだ】

先輩は今度は英語でそう聞く。

「だから何だつてのよ」

谷山先輩はそれに対しても若干ウザ^ザ気にそつ返す。

「お前薰だろ、何返事してんだよつ！」

「鮎川こそ何言つてんのよ、フローリアは私の英名ー。薰は日本名！…」

「は？ 英名とか日本名とかセレブなこと言つてんじやねえよ、薰のくせに。お前、ばーちゃんがイギリス人なだけだろ」「

「イギリス人だからよ。私ね、教会で幼児洗礼受けてるの。フローリアはその洗礼名なの！ だけど鮎川がなんでその名前を知つてんの？」

「俺の夢の中に出てきたお前にそつくりな女がその名前だったんだよ」

谷山先輩の思わず発言に、先輩は舌打ちをしながらそつ答えた。えつ、じやあ……

「もしかして、先輩も僕と同じ夢を見てたんですか？」

「僕と同じ夢つて……お前、王都グランディーナとか言つとこに行つたか？」

やつぱり、先輩もグランディーナにいたの？

「はい、車^ごとおつこちちやいましたよね」「

「スライム食つたか？ しかも俺の分まで」

「はい。でも、ちゃんとスライムプリンつて言つてくださいよ。な

んかそれじゃ僕がスライムのおどり食いをしたみたいじゃないですか

か

「似たようなもんだ。じゃあ、マシュー・カールは？」

「はいっ！エリーサちゃんですよね」

やつぱり、僕たちは同じ異世界にいたんだ！

「俺と同じ夢見てたってのか？」

首を傾げながら先輩がそう言つ。

「そうです。一人で同じ夢みてたんですよ！」

「信じらんねえ。まあ、そこまで一緒なんなら、同じ夢だったのか
もな」

そして、先輩は半信半疑ながらそのことを認めた。

「そうですよ。僕が目を覚ましても先輩ずっと目を覚まさないし、
もしかしたら同じ夢の中に入いるのかもって、戦闘不能を治す呪文唱
えたんですけど、それでも起きてこないし、途方に暮れてたんです。
そしたら、谷山先輩が『王子ならお姫様のキスで目覚めるんじゃな
いか』って。いやあ、ホントにお姫様のキスが効くとは思いません
でした」

でも、先輩の生還劇を喜々として話す僕に先輩は、

「余計なことしゃがつて」

と言つた。

「は？」

「お前が余計なことしなきや、今頃はその夢の世界で、お姫様と甘
い新婚生活の真っ最中だつたんだ。何が悲しくてこの凶暴女のキス
で戻らなきやなんねえんだ」

「何ですつて…！ 富本君、あんたまだ魔法使える？ お姫様とし
て命じるわ、こいつを瞬殺して」

先輩の凶暴女の発言に谷山先輩は思わず暗殺（あ、大っぴらに殺す
のは暗殺とは言わないのか）命令を僕に下した。

「しゅ、瞬殺つて、物騒な。でも、谷山先輩すぐ心配してたんで
すよ。それなのに、そんな言い方するなんて。海より深く反省して

ください」

と、言いながら僕は手を前に繰り出す。

「お、おい何の呪文をかけるつもりだ。富本？　まさか、あの『一億年』とか言わないでくれよ。ホント、『ゴメンあやまるからや』、その動作に、先輩は完全に怯えきっている。あれは夢の中のことだ、僕が現実世界で魔法が使えるはずもないのに。でも、事故からの谷山先輩の気持ちを考えると、ちょっとお灸をすえないとねと僕も思つたし、かつこうだけしてみる。

だけど、手を振り上げた途端、僕にまたあの上級魔法を使つた後のような激しいめまいがして、僕は

「なーんちゃつてね」

と言いながら意識を失つたのだった。

意識を回復した先輩は、まるで怪我なんかしてなかつたかのようにバカみたいに元気になつた。一方、僕の方は意識を失つた後原因不明の高熱が出て、点滴生活に逆戻り。

「急変するのはよくあることだが」

と言いながらも、どこか腑に落ちないという表情で担当の医師は僕を見た。

結局、退院は先輩の方が先で、僕はその3日後。その週いっぽい自宅療養して（一人暮らしの僕はというより、居なかつた分ほこりのたまつた部屋の掃除とか、たまつた洗濯をするとか、事後処理に明け暮れていたのだけど）、週明けにお久しぶりの出社をした。正直入社して半年そこいらで事故で長欠した僕の席がまだあるのか不安だった。

深呼吸して、営業部のドアを開く。

「おはようございまーす」

「お、富本、やつと元気になつたみたいだな」

声をかけてくれたのは、兵藤さん。

「はい、おかげさまで。本当に長く聞こ迷惑おかけしました」

そう言いながら、僕がデスクにつこうとするところ……

「富本、そこもつお前の席じゃないぞ」

と、兵藤さんが言つた。や、やっぱりもう僕の席はどこにもないの！ 不安が的中して頭が真っ白になつてしまつた僕に兵藤さんは笑いながら、

「お前、掲示板ちゃんと見たか？ 辞令が降りてんだよ、配置換え。わかつたらさつと見て、新しい部署に出社しろ。早く行かないとい、

大目玉くらうぞ」

と言つた。は、配置換え？ はあ、辞めなくて済んだのは良かつたけど、それでも窓際行きかあ。僕はのろのろと掲示板を見に行って、

そこににかかれてある辞令に……

マジでひつくり返った。そこには、

宮本美久

上記の者平成 年 月 日付けで秘書課勤務とする。

以上

と書かれてあつたからだ。秘書課あ？ この僕が？？ 何かの間違いでしょ！

だけど、いつまでも呆けてはいられないし、僕はとりあえず今度は秘書課のドアを叩いた。

「どうぞ」

と言われて中にはいると、そこにはなんと先輩がいた。

「先輩！」

「遅いぞ宮本。社長より遅れできたら洒落になんねえんだからな」先輩はそう言つて僕にデコピンを食らわせた。

「なんか悪い冗談なんですかね、秘書課なんて」

「ああ、そう思いたいよ。お前はなんかまだ良いぞ。俺なんか頃合い見て取締役会に出席のおまけ付きだぞ」

取締役会？ 完全に予想外のワード連発に頭がついていかない。

先輩はため息を落として、

「俺さ、お前が倒れた後薫にその……プロポーズしたんだわ。んで、退院した日に薫の親に挨拶に行つてさあ、そしたらこうなつた」と言つた。まあ、夢の中에서도奥さんにするくらいだから、本気で惚れることを自覚してちゃんと向き合つたんだろうけど、それがどうして取締役会やら僕まで秘書課勤務になるんだろう。

「へっ？」

「薫、この会社の会長の孫。正真正銘のお姫様」

「げつ。でも、それじゃなんで僕まで秘書課なんですか」

「あれ、気づいてねえのか？ 薫とあの子、英梨紗はこいつの世界でも、姉と妹なんだよ。お前、あの子口説いだる。薰と俺が結婚するつて言つたら、あの子もおまえと結婚するんだつて駄々こねてさ、ほんじやま様子見つて」と社長のそばに置くつて事になつたわけ

「はあ」

その言葉に今度は僕からため息が出た。

「ま、英語も呪文も使いこなす『語学マスター』なんだから、案外おまえつて、向いてんじやねえの、この仕事」

向いてる向いてないは解なんいけど、エリサちゃんと再会したとき、運命を感じた僕の予感は当たつていたのだろつた。それが良い運命なのかどうかは別として……

谷山先輩とエリサちゃんは本当は姉妹ではなく、会長の長女の娘の谷山先輩と、最初の奥さんが亡くなつた後、30歳年下の奥さんと再婚した会長の娘のエリサちゃんは実は姪と叔母の関係であることが分かるのは、また後日の話。

道の先には…… Happy endが転がつていた。なーんてねつ！！

— The End —

道の先は……（後書き）

以上をもちまして、本編終了となります。

あとは、あの性格の悪い魔法使いの視点のみ。本編だけではちょっと不完全燃焼だったところも、これで完璧に分かる……はず。

よろしけつたら続きを読をお付き合このせびを。

アンデッドマン、登場

僕たちが現実に戻つてきてたつた一つ氣にかかつてたのは、僕たちが居なくなつた後のフローリア姫とエリーサちゃんのこと。そのことをおそるおそる先輩に聞くと、先輩は、「お前知らねえんだつたな。あの後、なかなかケツサクだつたぞ」と語つて、僕がこつちの世界に戻つてからのこと話を話し始めた。

* - * - * - *

【ねえ、ビク。田を覚まして。あたし、ビクのお嫁さんになるから、約束するから】

エリーサちゃんが大泣きで僕の身体を揺すぶるのを、みんながもう泣きしていいたときのことだった。僕がいきなりぱちりと田を開いて、

【本当に？ 本当に今度は逃げないで私の妻になつてくださいますか？】

と語つと、すつと立ち上がり優雅にお辞儀したのだやうだ。

【 × - ! マリー、あ、包帯してないからマリーじゃないわ、グール…】

エリーサちゃんはそれを見て、恐怖にひきつった顔をしてありつけの言葉で僕をアンデッド宣言。

【ひどいな、私はまだ腐つてしませんよ】

【もうすぐ、腐るわ】

死体だもの、とエリーサちゃんは小さな声でそれに付け加えた。

【それは困つたな。私はまだ、あと100年は腐らないつもりなんですが】

それに対しても僕は、いたずらっぽい笑みを浮かべてそう返す。

【マシュー、腐らねえぞ。第一死んでない、こいつ富本じゃねえんだから】

【さすがは鮎川さんですね。では、ちょっと失礼します】

何かを気づいた先輩に僕はそう言つと、王様の前にひれ伏し、

【王よ、ビクトール・スルタン・セルディオ、ただいま戻りました

と言つた。

【うむ、よくぞ戻つた。で、コーネタルは無事なのか】

【ビク、ビクトールって?】

エリーサちゃんが僕と言つたが、僕もどきのセルディオさんのファーストネームに妙な反応する。あれつ、セルディオさんの口振りではエリーサちゃんはセルディオさんのプロポーズを振り切つて逃げ出したみたいなのに、どうして彼のファーストネームを知らないんだろう。

【エリーサ様、王にじる報告申し上げたら、いくらでもじる質問にお答えしますからね、少々お待ちください】

セルディオさんはエリーサちゃんに向かつて、人差し指を口に当てながらそつと言つと、王様にこれまでの顛末を話し始めた。

失策

【まずは、殿下の安否についてですが、殿下は確かに生きておられます】

セルティオさんの王子の生存宣言に、王様以下城のみんなから安堵のため息が漏れる。

【生きてはおられますか、今とても動かせる状態ではなく、とある場所でご静養いただいております】

【それはトレントの森か。しかし、そなたたちの搜索に当たった者たちが、トレントの森のそなたの屋敷にも行つたが、誰もおらんだと聞いておるが】

【はい、ご静養いただいているのはトレントの森ではございません。それどころか、このグランディールでもガッシュタルトでもあります】

それは、この鮎川様の世界である、“一ホン”と言ひ所でございま
す】

謁見の間にざわめきが起こる。

* - * - * - * - *

殿下が何者かに命を狙われているといふことは、私もよく理解をしておりました。何しろ、普段トレントの森に引きこもって研究三昧の私にその任の白羽の矢が立つたのはまさに、そやつの攻撃から魔法面で殿下をお守りするという意味合いでしたから。

恙無くガッシュタルトでの婚儀を終えた私たちは、姫様と別行動を取りました。敢えて敵方に連絡させる隙を作り、私たちは姫様の下を離れました。

そして、私たちは一人だけでトレンントの森を突つ切る道を選択したのです。よしんば敵に襲われたとしても、一個小隊程もある姫様の花嫁道中よりは身動きもとれるし、被害も少なくて済む。なにより姫様に被害が及ぶことがない。

それに、トレンントの森は私の庭とも言つべき場所です。敵方は私と同じように動き回ることはできないでしょう。あまり凶暴な魔物も棲息してはおりませんので、私たちは姫様よりかなり先に城にたどり着き、姫様をお出迎えできると算段していたくらいです。

しかし、敵方は私たちのそんな行動を予想してたかのように、森に最適の刺客 魔物使いを送り込んできたのでした。

何とかその魔物使いを返り討ちにしたもの、数多くの魔物たちによって私たちは満身創痍、特に殿下は一刻も早く治癒しないことには、お命も危ない状態。しかし、ここは辺境の森で、私より他に治癒できる者はなく、如何に私の魔力が高いといつても、一人で治療術を繰り出すのには限界がありました。

私はとんでもない間違いを起こしてしまったのかと、頭を抱えました。

しかし、窮すれば通ずと言つのでしょうか、一旦は肩を落とした私は、とある場所のことを思い出していました。

(あの場所ならば、そして彼らならば……上手くいくかもしけない)
そして私は、その禁断の呪文の扉を開いたのです。

失策（後書き）

いきなり、セルディオ語りにスイッチしました。彼、美久より性格暗いみたいで、いきなり語り口が硬くなつてしましました。

次回、そんなセルディオの王子救命大作戦です。

この世界には私たちの住むこのオラトリオの大地とは別に、いくつかの大地があるのです。その世界・仮に並行世界・と申し上げておきますが、その並行世界には私たちとそっくりな人々が違った生活を営んでいます。

実は私は11歳の頃、偶然ニホンに飛ばされたことをきっかけに、そのニホンのことを研究し、ニホンが魔法を介さずに病や怪我を治してしまった治療技術を持つていることや、私の映し身の美久に私が殿下に仕えるようになった同じ時期に殿下にそっくりな男、鮎川幸太郎氏と職場で出会つたことを知つていました。

最初、私はこんな強引な方法を探らず、ただ出かけていつて、幸太郎氏に殿下との交替をお願いするつもりでいました。

しかし、界渡りの呪文を唱えて私がニホンに現れたとき、彼らは道に飛び出してきた少女を避けて彼らの乗っている自動車という大きな鉄の塊を急旋回させてまさに道の端にぶつかろうとしていたのです。

私が殿下に仕える時期に美久が幸太郎氏と出会つたように、この並行世界では、環境の違いで出来事は違つてはいますが、こちらが危険になればあちらでも似たような事が起こるようでした。私は、とつさに時間を止める魔法をかけました。

私はどうしたものかと思いました。このまま時を進めても彼らは無機質な道具にぶつかっていくだけで、彼らもまた治療が必要になるのは目に見えています。

とりかえはや物語

私はまず、彼らの乗っている自動車のレプリカを作りました。内部などは全く分からぬので適当ですが、結果壊してしまって、何ら問題はないと思いました。そこに彼らが持っていた火の属性をもつ魔道具（美久はそれをチャ カマンと呼んでいましたが）を少量もらい受け、その上で、彼らを自動車」とグランティールへと送りました。

場所の特定まではする余裕はなかつたのですが、結果街道筋近くにたどり着いたようです。ただ、時間を止めた反動なのか、私たちが襲われてから約一月も経つてはいましたが。

一方、私はそのままトレントの森に戻つて殿下を二ホンにお連れし、レプリカを障壁にぶち当てた後、魔道具に炎系の魔法をぶち当て、大破させました。

そして私は、殿下とともにその大破した張りぼての中に倒れ込み、時を戻したのです。私自身も無傷ではありませんでしたし、高度な魔法を連発した衰弱も相まって、ほつとした途端私も一旦は意識を手放してしました。

* - * - * - * -

【しつかしまあ、よくそんなんで……お前が王子は無事だつて言うからには、ちゃんと王子は俺として病院で治療受けてんだろう？ 日本の警察はいつたい何やつてんだつて感じだな】

【ええ、しかし幾分衝突と言つには不可解な傷が多くあるにしても、私たちはあなた方の身分証明書を持参していますし、生存している間は治癒師の領分ですから、警備隊はそこまで関われないようです

し

【まあな。医者が必死こいて助けようとしてる時に、警察が茶々入
れても医者が怒鳴つてそれで終わりだらうけどよ。それでもなんぼ
なんでも、王子目が覚めたら全部ちゃんとばれだらうが】

私の説明に、幸太郎氏は半ば呆れながらそう返しました。

【ええ、ですから殿下にはひかりをお連れする日途が経つまで眠り

【お、怪しき魔術師】

はえらい違ひだな】

幸太郎氏は、手を肩の所からここまで挙げて「ふやくよひ」と言つた。

一人の共通点 b ャ幸太郎

【王子の容態も日に日に良くなり、後数日もすればここからお連れしても大丈夫かと存じます】

【解った。セルディオ、そなたの今度のコータルの救護、まことにご苦労であった】

【いえ、それが私の仕業でありますれば、この命に代えますでも】
俺は、そう言って王様に頭を下げる事件の立役者の顔を見た。結局こいつは王子だけじゃなく、俺たちの命も救つてくれた訳か。

王様への報告が終了した後、俺は一番気になっていたことを聞いた。

【で、宮本はどうなつてんの。あいつ、切られたけど】

【あ、急所は外れていたはずですし、帰したところが治癒専門の場所ですから、治癒師が迅速に対応してくだされば、何の問題もないでしょう】

それに対し、クリソツ魔法使いはそう笑顔で答えた。まあどうでもいいが、さつきからこいつ、宮本に結構冷たいのな。ホントならお前が切られてたかも知んないのによ。するとこいつは、

【美久には悪いことをしたと思っていますよ。ただ、私ならばむざむざとあのようには切られたりしないと思いますが】

俺の頭の中の声が聞こえたかのよう、そう付け加えた。その表情は依然笑顔のまま。顔はそつくりなのに、あの天然ボケとは違つて性格悪つ！ お前口だけじゃなくつてホントに悪いと思つてんのかよ。

そうやって改めてこいつの顔をよくよく見ると、同じ顔なんだけど持っている雰囲気は全然違う。片や入社したてで怒鳴られまくっているペーペーのサラリーマンと、片や希代の魔術師と呼ばれた男。ま、同じ雰囲気を持つてゐる方が不思議か。こいつら、顔以外

に共通点なんかないかもな。あ、けど……

【あのひ、ちょっと気になつたんだけど、そもそもお前が1-1の時日本にすつ飛ばされた理由って何?】

【な、何でもよろしいではないですか】

俺がそう聞くと、それまで余裕こいていた魔術師は明らかに不機嫌になつた。

【もしかして、気に入った女に同性呼ばわりされて、ブチ切れた?
お前女顔だし、ファーストネームのビクトールをビクトリアに間違われてとか】

【そ、そんなことある訳ないじゃないですか!】

とあからさまに取り乱して怒つた。おいおい、団星つてか。ま、富

本にはこいつみたいに魔力はないだろうから、飛びようなかつだけだけどさ、まるで一緒じゃん。『子!』って女名で呼んだとたんに怪力になる、ものすごく昔に流行った刑事ドラマみてえ。
バカウケしまくる俺を、女顔の魔術師はものすごい形相で睨んだ。
なまじ、女顔だけに、怖えーっ(爆)

【それにしても、本当に二ホンの治癒術はすごいです。あの規則正しく薬湯が体に送られてくる管! 誰もいないときに起き出して何度も細部まで調べる誘惑に駆られことか!】

しばらく不機嫌全開だった奴が、次に言つて来たのがそれだつた。それからしばらく奴の日本の医療器具褒めちぎりトークが続いた。
ん? これもどつかで見覚えがあるよつなん?

【なんか、リルムの町のビクを見てるみたい】

とそのときぼそっと、マシュー改めエリーサがそう言つた。そうか、どつかで見たことがあると思ったら、リルムの町の胡散臭い商人の品物を見せてもらったときの宮本の顔だ!! R P Gと医療器具の

違ひこそあれ、それはまさしくオタクの証明。

やつぱり、こいつは正真正銘、富本のドッペルゲンガーだと俺は
思った。

ハッピーハンド？ bｙ幸太郎

【ヤーあて、殿下をお戻ししたらグラントディールまで責任を持つてお送りさせていただきますからね、エリーサ様。ところで鮎川様、二ホンではあの自動車なるモノは壊れている訳ですから、頑いても差し支えありませんよね】

自分の都合の悪いことから田を背けさせたいのか、女顔の魔法使
いは元非力な大男にそう言つた。今は、ちびっ子に戻つてゐるからあ
れだが、はじめの状態なら絶対にポジション逆だろ。

【ああ、今更あのポンコツが道端に現れでもしたら、それこそミス
テリーだからな。一応、助けてもらつた礼代わりにでも持つてけ】
俺は、それに対して頷きながらそう言つた。壊れたはずのポンコツ
がいきなりゾンビみたく現れても、俺、説明なんてできつこねえし。

【ありがとうございます】

【なんなら、あのポンコツの後ろに缶空……そんなもんこの世界に
ないか。ああ、リルムの町のあのゲテモノプリンの入れもんがあつ
た……あれでも、つり下げて走るか？】

それならいつそのことハネムーン仕様にでもすりやあいいんだと思
つてそう言つと、あいつは首を傾げながらむつとした表情で、

【は？ それは魔除けでござりますか？ そのようなものなどなく
とも、十分私がエリーサ様をお守りできますが】

と言つた。

【魔除け？ んな訳ないだろ。ま、こいつは俺のもんだから手を出
すなつて意味つてつちやそだらうな】

【じゃあ、何のため】

【ひつちじやや、結婚式が終わつた後、式場から出る新郎新婦がど
うつ腹にさ、『Just Married』とか書いた車で走んだ
けど、後ろのバンパーにあーいつのをつり下げるだ】

とはいへ、俺もそれは外国映画でしか見たことないけどな。

【そうなのですか、それは素敵です！まるで私たちを祝福する鐘を鳴らしながら走るようではありませんか！】

けど、それを聞いた口リコン魔法使いはにわかに色めき立つ。ま、本来もそーいう意味合いだっけか。にしてもお前、どーでもいいけど、この世界には存在しない車が鳴り物入りで走れば、とんでもなく田立ちすぎるぞ。それでいいのか、おい。確かに本物の魔物は寄つてこないだろうが、人も逃げるぞ、たぶん。

【ヤダ、あたしセルディオ様と一緒にには帰らない】
ほら、まず嫁が逃げた。

【どうしてですか！エリーサ様ははつきり私と結婚するって言ってくださいたじゃないですか】

【あれは、ビクに言つたんだもん、セルディオ様にじやないわ】

【ビクつて……彼の名前は美久、私の名はビクトーリオ。私の方が本当のビクじゃないですか】

【でも、どうして？あたしがお父様からきいたセルディオ様のお名前はスルタン・セルディオだけだったわ】

【そ、それは……】

【どうせ、その顔でビクトーリオつて名乗つたら『女みたい』って言われるのがいやだつただけだろ。お前どんだけ、顔と名前にトラウマもつてんだ】

【悪いですか？ですが、あなたのように体格にも名前にも恵まれた方に私の気持ちが解るものですか】

すると、コンプレックスの塊魔法使いは、そう言って逆ギレした。あ、女顔・女っぽい名前に加えてチビもその要素だった訳ね。そう言やあ、富本もそれ、気にしてたな。

【お前、そんなこと気にすんなよ。お前にはそれにあまりある位の魔力があるんだから。お前日本に居ながら、リルムの町とかで、俺たち助けたりしてくれてたんだろ】

【いいえ。私はもう一度殿下とあなた方を戻さないといけませんから。体力を回復するべく極力静養に努めておりましたよ】

【じゃあ、あれはマシュー、いやエリーサか?】

【「うん、あたしじゃない。あたしはマシューの体になつてるだけで精一杯で、余分な魔法なんて使えなかつたもん。別人になるのつて、すごく大変なのよ】

【んじや、一体誰が】

【あれは正真正銘、美久が一人でやつたんですよ。使つたことのない魔法をぽんぽん連発するからすぐ体力切れ起こしてましたけれど。鮎川様、美久に魔法を使いたいのなら、もっと体を鍛えなさいと言つておいてくださいね。いかに魔力があつても、それに見合う体力がなければ、最悪命を落としますよつて】

は？ あれは宮本がやつたつて？ だるまさんがころんだも、ガソリンも？ もし魔女発言の後、あいつが電池切れしてなかつたらと思つと、俺は血の気が全部引いちまつ氣がした。

もしあの、ゲーオタにそんな芸当ができると分かつてみろ、嬉しがつて何が起つたるか分からん。

(言わない、絶対に言つもんか！－)

俺はそう堅く心に誓つた。

そして数日後、無事日本に戻つた俺は、宮本が(こつちでは)初対面の英梨紗にいきなり口説いたと知つた。あつちの世界じゃともかく、この日本じゃ犯罪だぞ、おい。

俺には若干一人(あつちといつちで二名か)悲劇のヒロインが生まれたような気がすんだが……

ま、それでもとりあえずハッピーハンドつづりとで。

一小さなお姫様は小さな魔法使いといつまでも幸せに暮らしました
ヒセー

ん？？

あとがきに代えて

以上で、「道の先には……」完結させせていただきました。

このたびの3月11日の未曾有の大災害の中、このようなお気楽な異世界ファンタジーを書き続けることは、被災された方に失礼だと、お叱りを受けるかもしないと思い、一時は執筆しても公開は自粛しようと思つたりもしました。

ですが、本当はこの作品は昨年11月末までに完成しておかねばならぬものでした。（仲間内のイベントのため）

それより前の10月中に、友人に見せると約束していたものでした。

それが、9月に父が亡くなり、自分の中の勢いがなくなつてついつい不得手な異世界ファンタジーより「Hロ空（切り取られた青空シリーズのことをブログでそう呼んでます）」や「バニポイ」など自分が書きやすいものを優先して後回しにしてきました。

で、年末個人的にそのことを激しく後悔させる出来事が起き、私自身「明日の自分は自分にも分らないのだから、できる」とは今しておかねば」という気持ちで今回リアルタイムで公開に踏み切りました。

このおばさんから妄想を取つたら何にも残らないからです。今できることはこれしかなかつた。ごめんなさい。

もしよろしければ、このバカっぽい話で一時だけ大変なことを忘れて元気になつてくださいと思います。笑つてください。そんな気持ちで今日エンドマークをつけました。

なお、このお話を大好きな大好きな友人、祈君（仮名）に捧げます。

役者が揃つた？

やがて、長い昏睡状態がとけたことになつてゐる俺と、逆にぶつ倒れた富本とで、やつてきた医者やら看護師やらは騒然となつた。倒れている富本はもちろんのこと、俺の状態まで検査される。ビクトールは、

『たぶん、身体は調べられると思いますので、形だけ付けておきますね』

と、傷（本人がいないので、よく保つて一週間くらいだらうと言つていたが）を魔法で作り出した。こんなもんが作れんなら、張りぼりじゃなくつて本物の車も作れそうなもんだ。あんなポンコツよりもマシな奴をさ。ま、全く同じものしか作れないかもしない。俺はオラトリオだけ？あの世界にあのポンコツと同じ車がぞろぞろと並んでいる姿を想像して、笑うのを堪えたら、痛みを堪えたのと間違われて、

「痛みますか？」

と看護師に言われたんで、

「あ、ちょっと」

と痛がるフリをしなきゃならなかつた。ビクトールにあつちに飛ばされてなきや、生きてないのかもしないけど、何だかな。

そして、いつの間にか完治してゐる俺と、病院で寝てるだけなのがあり得ないほど疲労してゐる富本に医者は首をひねりまくつていた。

理由を知つていた俺は内心ビクビクもんだつたが、日本の医療機関にその真相が分かる訳きやない。結局その晩熱を出した富本は、どこかが炎症を起こしているのだらういうことで、抗生素質を点滴されている。

本当ならガザの実があれば一番いいんだらうが、よもや俺は富本がこつちに帰つて来てまで大魔法を使うなんて思わなかつたから、エリーサに残つてんならくれとも言わなかつたしな。

翌日、三時の面会時間を持ちかねたようにエリーサがやってきた。いや、正確に言えば絵梨紗。二人は俺が隣にいることなんてものとせず、

「ビク、大丈夫？　お姉ちゃんにビクがお熱出したって聞いて、あたし心配で」

「大丈夫、心配しなくていいよ。ちょっとね……慣れないことしただけだから」

それに対して、富本はさすがに魔法を使つたともいえず、そう答える。

「ホントに？」

「うん、ホントに大丈夫。それに、エリサちゃんがきてくれたから、すごく元気出ちゃった。ありがと」

つてな具合に、いちやついてる。

ま、俺と富本と薫のドッペルがいたんだから、エリーサのドッペル？（絵梨紬のドッペルがエリーサが正解か、まあどっちでもいいが）もいても別におかしかないが、こいつら一つの間にこんなラブラブモードに発展してんだ？　俺なんか薫にキスして殴られて、そこから何も話進んでねえのに……

-なんか先越された気分だ。

ええーつ、じゅりもー？

富本と絵梨紗とのこちやいぢやが見てられなくなつて、俺が病室を出たら、そこに薫が来ていた。

「目が覚めたからつて、とつととほつつき歩いて大丈夫なの？」

薫は口を歪めてそう言つた。

「ああ、医者が首を捻るくらい完全元通りだぜ」

ホントのことを言えば、最初から怪我なんかしてねえんだけど。それを説明できないし、説明する氣もねえけど。

「また、いい加減なことを言つ。ちゃんと寝てないと、富本君みたぐぶり返すわよ」

ところど、薫はやれやれといった表情でそう返す。

「いい加減じやないか。薫、今あの灼熱地獄に戻れなんて言つなよ。自分の病室なのにいたたまれないつたらありやしねえ」

「ああ、富本君と絵梨紗のこと？ 確かにあれはね。ホント、いつの間にあんなに仲良くなつたんだか」

どうせあの単純な富本のことだ。オラトリオで惚れた女のドッペルに、運命でも感じるとか思つて迫つたんだる。それに、今んとこ10歳の絵梨紗は富本よりチビだからあいつのコンプレックスは刺激されないだろうしな。

「薫、小学生は夏休みだからともかく、お前仕事は良いのか？」
そのとき、俺は今日が平日だつてことに気づいて、薫がなぜ今こにいるんだろうと思つた。。

「うん？ 今日は有給……つてか、もつ私職場に戻れないかも」
それに対してもう一つぽい発言なんて聞き捨てならない。

「何でだ
「うん、ちょっとね」
びっくりして聞き返した俺に、薫の口は重い。

「俺のせいか？」

「違うよ、鮎川のせいじゃない！」

「じゃあ、何だよ」

「言わなきやダメかな」

「言わなきや解んねえだろ。それに俺に言えなに一つことは、直接じやなくとも俺らの事故が関わって思つて間違いないんだろ」

事故の一言に、薫の頬がぴくっと動く。

「じゃあ、結局、俺のせいじゃねえか

「違うよ……」

それでも、違うと言こ張る薫は、泣き声になつていて。お前、何隠してんだ？

「じゃあ何だつてんだよ……」

俺はだんだんいろいろじりじりてきて、そう怒鳴った。

「鮎川、声デカい」

薫はいきなり急に声のトーンを落として小声でそう言った。ハツとしてあたりを見ると、声を荒げて言い合ひをしていた俺たちはいつの間にか他の患者や面会者に遠巻きに見られてくる。

「お前が、ちゃんと理由を言わないからだ」

だから、俺も内緒話みたいに、薫にそう耳元で囁いた。

「バレたの

すると、薫はぼそつとさう言った。

「誰に？ 何が？」

主語も述語もかつ飛ばしてしゃべんなつてんだ。何が何だかちつとも解んねえと思つていると、薫は意を決したよつたその理由を口にした。

「会社に、私が

「会社に、お前が？」

「櫻原宗十郎の孫だつてことがバレちゃつたの」

櫻原宗十郎ったら、ウチの会社の会長の名前じやん。

「へえ、お前、会長の孫だ……ええーっ、か、会長の孫……」

「だから鮎川、声デカいって……」

思わず俺が挙げてしまつた素つ頗狂な声に、薰はこめかみに手を当て、口をへの字に曲げてやつれてため息をついた。

ええーっ、あつちは本物の姫だが、こつちも姫級かよ。俺の方は向ひつけ玉子でも、こつちは完璧フツーのコーマンなのこだ。

「ちょ、ちょ、薰、外行いり、外」
俺はそつと強引に薰を病院の中庭みたいなところに連れ出した。

「そ、私は櫻原宗十郎の長女の娘、ホントは身内の会社になんて勤めたくなかつたんだけど、許してくれなかつたのよ。いくら武（社長の名前だ）叔父様に子供がないからつて、私にあそこで婿見縁おうなんて、前時代すぎよ。そんなの絵梨紗がいるじゃないつて思つたし、この前テビくんも生まれたから、やつと解放されたと思つてたのに」

観念して薰は事情を説明し始めた。とはいゝ、いまいち話が見えないが、薰は社内のだれかと結婚して、跡継げつて言われてた。でも社長んとこに待望の（テビくんつづーくらいだから男だろ）跡取りが生まれて、すべて丸く収まつたと、そんなとこだな。

「私は長女の娘だから櫻原、いやないし、武叔父様に『私が絶対に櫻原家の縁者じやだつてことをバラさない』つてことを約束させて会社に入ったのよ」

じゃないと、思いつきり仕事できないじやない？　と薰は続けた。
確かに使う側としちゃ使いにくいだろーな。

「で、何でバレたんだ？」

「うん……それなんだけど、あの日絵梨紗と一緒に私もいたのよ」
あの日と言われて、俺は「クリとつばを飲み込んだ。つて言つと、俺たちが事故つた日のことか。

「出かけたのが久しぶりだつたんで、絵梨紗が妙にはしゃいじやつて……道の向こうにほしかつたものを見つけて、思わず飛び出しちやつて……そこに来たのが」

「俺らの乗つてた車つて訳か」

俺の言葉に首だけで頷いた薰は、

「間一髪のタイミングで絵梨紗を交わした車は、ガードレールに吸い込まれるようにぶつかって火を噴いた。私、慌てて車の中をのぞき込んでびっくりしたわ。乗つてたのが鮎川と宮本君だったから」「薫はとっちらからりながらも何とか119番に連絡し、やがて救急隊員が来て、俺たちを車から引きずり出した。そしてその途端、車は再度爆発し、木つ端微塵になつたといふ。

「後少し救出が遅れてたらと思うと……」

薫はそのときのことを思い出して震えながらそつと云つたが、大方そればビクトールが車の張りぼてをこまかすために魔法で吹つ飛ばしてんだろう。満身創痍とか言う割に、えらく派手な演出じゃねえか。あいつ、どんだけ魔力があるんだか。

一方、衝撃的な事故を目撃してしまつた薫は、ショックでぶつ倒れ、一緒に病院に運ばれたらしい。俺たちが全然知らない奴らなら、ただ事故を目撃したで済んだんだが、事故の当事者が俺たちだつたため、当事者が一本の線でつながつて、薫が会長の孫だということが一気に社内に広がつたみたいだ。

それから、上司は薫の顔色を伺いながら仕事を持つてくるし、女たちからは今まで気楽にグチつてきた会社への不満やら悪口やらを薫が会社にチクつている様に思われて、シカトを食らうつになつた。確かに、薫は会社の悪口は言わなかつたさ。けど、ここつは誰の悪口だつて言ってやしねえぞ。

「ゴメンな、俺らのせいだ」

「ううん、鮎川たちのせいじゃないよ。鮎川は絵梨紗を助けてくれたんだし」

「なあ、薫……会社行きにくいんだつたら、辞めて俺んとこくるか」「俺は、手に汗をびっしょりかきながら、薫にそう言つた。地球とオラトリオがパラレルワールドつてんなら、オラトリオで王子と姫が結婚するんなら、俺たちも結婚するのが流れつてもんだろ。

「俺んとこつて、鮎川も一緒の会社でしうが、何変なこと言つてんのよ」「

だけど、薫は俺の言葉をプロポーズだと思わなかつたらしく、ゲラ
ゲラと笑いやがる。

「違う違う」

違うよ、鈍感女めが。

「何が違うのよ」

「だから、鮎川薫になれつてんだよ」

回りくどく言って解んねえんならストレートに言つてやる。

お前、俺にキスするぐらい好きなんだろ？ だが、それに対して薫
は、

「イヤだ！」

と、間髪入れずに即答しやがつた。なんだ、一発玉砕かよ。
何でだ？ オラトリオはパラレルワールドじやねえのか！？

「じゅあ、何で俺にキスなんかしたのかよ。富田のバカ話にホイホイ乗せられる様な歳じゃねえだろ、薫」

「4歳でおとぎ話のお姫様を地でいくとしたらいタすぎだろ。
「うつ、そんなの当たり前じゃん。でも今はヤダ。今辞めたら逃げたつて思われる。鮎川だって、せつと会長の孫つて分かつたから迫つたつて言われるよ」

「今辞めたら、今までこいつが頑張ってきたことなんてすっぱり忘れて、『それ見たことが、やつぱりお嬢様だ』とか言う奴が必ず現れるか。俺も逆玉狙いだって言われるだろ?」

「俺は、そんなもん何とも思わねえよ」

「周りが一夜にして変わっちゃつても?」

「仕事が変わる訳じやねえし、全員が敵になる訳でもないだろ。そんなもん、仕事で跳ね返してやるさ。お前も、負けたくねえんなら辞めないで一緒にいればいいさ。けじれあ」

「けど?」

「俺と一緒に鬪おうや。一人で抱え込むのお前の悪い癖だぞ」

「俺は薫の今にも泣き出しそうなほっぺたに手を当てて、そう言った。どんな奴が相手でも、怯まずつっこんで行くところがお前の良いところだけだ。切り込み隊長にも、疲れたら帰る場所があつてもいいんじゃないねえか。

「鮎川あ、それってかつこ良すぞだよ」

「薫は、そつ言つて口をとんがらせて鼻水をすすつた。

「そつそつ、俺つてホントカッコいいだろ」

「あんた、自分が言ひつへ。」

あきれた、と薫。

「おお、言ひだせ」

俺は胸を張つてそう答えた。こんな、自分が言わなきゃ、誰が言

うんだ？ 他人にこんなこと言われたら、どんな裏があるのかと思つて逆に気色悪いだろ？

「薰、お前いつ田が覚めるか分かんねえ俺をずっと見ててくれたんだってな」

それから俺はマジな顔になつて薰にそつと語った。

「うん……」

薰は照れながら頷いた。

「もし俺が、この先ずっと寝たまんまだつたとしても、そういうふれたか？」

「たぶん、ね」

俺の頭ん中には、昨日の夜の宮本の説教じみたうわいとだか報告だから判んねえ、俺が寝てる間の薰の話が渦巻いていた。さつきはそつこーでふられたけど、ここはいっちょ踏ん張つてみますか。

「俺、起きちまつたけど、これからもずっと俺の傍にいてくれねえかな。つてか、夢の中でもお前は俺の嫁だつたし、なんか他の奴考えられねーんだよな、だから」

俺は、そう言つと、異世界よろしく田下の礼をとつて、

「谷山薰さん、俺と結婚してください」と一昔前の合コン番組みたく右手を差し出した。

薰は、ぱうぱう泣きながら黙つて俺のその手を握つた。

おはにひよ、踏ん張つてみますか（後書き）

何だか、完全にラブコメになっています。ファンタジー要素皆無。
でも、この2人をまとめないと、先のファンタジーに進まないんです（涙）
もう少し、ガマンしてくださいね。

元々怪我なんかしてなかつたから、検査したつてボロなんて出なくて、とつとと病院から解放されることになり、俺はちよつとビビりながら、会計に行つた。何気に豪華なあの一人部屋に50口あまり、カードの限度額超えなきゃ良いけどな。

しかし、俺たちの支払いはもう済んでこると言つ。

「ええつ、済んだつてどうこうことだよ」

「支払いの方は全部櫻原さんの方に回すよ」といに書かれてますが

びっくりした俺に、会計の女は事務的にそつ答えた。俺は後ろにいた薰を振り返ると、

「武叔父様が

と言つた。

「社長が？」

「絵梨紗の……そつ、絵梨紗の命の恩人なんだからつて払わせるなつて

と、薰が答えた。だが、それはなんだか奥歯にものが挟まつたような言い方だった。

「そりや、確かに助けたことには違いないんだろうけどさ、一つ間違や繰いてたかも知んないし、たまたま運が良かつただけだ。それにそこまでしてもらう筋合いはないと思うけどな。だけど、突っぱねて金額聞くにもあの部屋じやなあ。」ぐふつうの大部屋にしどいてくれりや良いのに

「う、うん、そうだね。じゃないと氣、遣うよね」

俺の言葉頷く薰の返事は相変わらず歯切れが悪い。

「礼を言わなきやと思つんだが、こんな個人的な事会社で言つわけにもいかないんだけどよ、電話で済ますのも失礼だし、お前5分でいいから時間取つてもらえるように頼んでくれねえか」

「ううん、お礼なんて良いよ。叔父様がしたくてしてない」となんか
らね」「ひら

「そんな訳にはいかねえだろ」

「氣、氣にしないで。あ、そうだ、鮎川明日ウチにくるでしょ?
その時顔出し手もらうようつづいてくよ」

「げつ、社長呼ぶってか?」

薰と一緒に闘うと言つてプロポーズした手前、俺が次に出社する前にひとつと薰の親に『結婚を前提にお付き合い』の挨拶をしこうと言つことになつたのだ。まあ、一緒に聞いて認知してもらつてる方が風当たりは弱いかもしけないが、父親だけじゃなくて、叔父さんまでに值踏みされるんかよ。頭痛え……

「うん、武叔父様には早めに会つておいた方が、いいと思つのよ。
そうよ、その方がダメージが少ないわ」

その後、薰がつぶやくようつづいて書つたのが聞こえた。

それにして、ダメージってなんだ? 受けるのは社長? それとも俺?? 僕は、何だから知らないプレッシャーやら不安をひしひしと感じ始めていた。

翌日、俺は薫んちに行つた。ナビが示すのは、超ド級の高級住宅街。都内に住んでても一回も行ったことがないところだ。

そして、俺は薫んちの前で盛大にため息を吐いた。何が、叔父様の家より小じんまりしてるだよつ 白亜の豪邸じゃんかよ。じゃあ、社長の家はどんなだつてんだ！

それもそのはず、薫の父親の谷山紀文は画家で、一枚書きや、ん千万だつづ一話だ。うええ、ますます俺、場違いじゃん。一回振られた時点ですんなり諦めとくべきだつたか。

ま、いつまでもビビってる訳にも行かないんで、とりあえずインターフォンを押す。はーい、という返事の後薫が玄関のドアを開いた途端……

家の奥の方から巨大な物体が俺に向かつて突進してきた。

「うわっ」

体当たりしてきたそれを、俺は転びそうになりながらも何とか受け止めた。

「げつ」

動く毛玉、いや犬、確かボルゾイつてやつだ。そいつは、俺の肩をがつしり掴むと、俺の口元を……

ペロペロと舐めだした。そのままディープキスされそうな勢いだ。よく見ると笑顔っぽいし（犬の感情なんて判んねえけど）尻尾振つてやがる。肩掴まれて首元にこられたときには、殺られるつて本気で思つたぜ。一応、ここん家の家族を分捕つてくアウエイな訳だし。獸は人間よりもそういうことに数段敏感らしいからな。

「ミランダ、こらつ止めなさい！ S i t ! ! 」

薫にそう怒鳴られて、巨大な毛玉もとい、ミランダは渋々と薫の前にちんと座つた。しかし、熱烈歓迎の意志は示したいのか、はあはあ言いながら尻尾だけはまだ振つている。

そこに薫の母親らしき女性が玄関に現れた。薫の外人度をさらりと上げた感じで、小紋をを小されいに着こなした姿は、どつかの旅館の名物女将っぽい。彼女は、

「あらあ、ミランダちゃんも女の子ねえ、イケメンはわかるのね」と言つてミランダの頭を撫でた。

「顔じゃないわよ、鮎川あんたサラミ食べたでしょ」

「ああ、正確に言えば、サラミの乗っかつたピザをな」

50日も留守にしてるんだ、冷蔵庫にあつたもんは調味料をのぞけば全滅、からうじてフリーザーに残つてた冷凍ピザだけしか食うもんがなかつたんだよ。昨日帰りがけにうつかりと買うのを忘れたんだ。でも、何でそれがサラミだつて判るんだ？」 薫は

「ママ、彼女は鮎川の胃の中のものに反応してるのでよ。ミランダ、いくり好きだつてあんたサラミに反応しそぎ」と言いながら俺を見上げてニヤリと笑うと、

「モテたんじやなくて残念だつたわね。この子サラミに田がないのよ」

と言つた。バーカ、犬にモテたつて嬉しかねえよ。サラミに惚れてくれて結構だ。

まあ、そのバカ犬のおかげで幾分緊張感が取れて、俺は通されたそれこそそこだけで俺のアパートの部屋の何倍あるんだつていうリビングで薫の父親を待つた。

「やあ、お待たせ。君が鮎川君？」

そして現れた薫の父親は、一人娘がかつさらわれるのだといつのに、さつきのバカ犬も顔負けの満面の笑顔だ。

「初めてまして、鮎川幸太郎です。」

俺は一旦座つていたソファーから立ち上がり深々とお辞儀をする。「谷山紀文です。退院おめでとう

「ありがとうございます」

俺は、礼を言つた後、咳払いをして、いきなり本題をきりだした。

「今日はですね、お嬢さんと結婚を前提におつ……」

しかし、紀文氏は俺の口上が終わらない内に、

「そんな堅いことは抜き抜き。鮎川君薫と結婚したいんでしょ。どうぞどうぞ、こんな面倒臭いので良かつたら、是非」と、せつせつ俺たちの結婚を承諾してしまったのだ。それにしてもノリ軽つ！ しかもトドメに、

「いやあ、君がずっと眠つたままだつたらどうしようかと思つてたんだよ。それでも生きてるんだから、そちらのじ両親に承諾もらつて病床で式だけ挙げようかとか」とまで言つ。こっちが言い出す前に親公認なのも何だかなんだが、意識のない奴と結婚させようだなんて、どんだけ薫を追い出したいんだか。ホントに血つながつてんのか？ 母親の外人的要素の方が際だつて、いまいち判らねえぞ。

「パパ！！」

さすがにその発言にブチ切れて薫が思いつ切り父親を睨む。

「じょ、冗談だよ、薫。さすがに眠つたままの人間を後継者にするなんてお義父さんが許さないさ。でもね、私は嬉しいんだよ。大事な娘を絵描きになぞやるんじゃなかつたつて、そりや肩身の狭い思いをしてきたんだから」

まあな、父親としちゃいくら金取れるつてつたつて、絵描きなんて次売れるか売れねえか分かんねえヤクザな商売認められねえよな、当の会長は結構でけえ会社のTOPな訳だし。解るよ、何か一力所聞き捨てならねえ事聞いた氣もするけど、取りあえず薫の親の反対はないつてことだな。

・ピンポン・

その時、インターフォンがなつたかと思うと、だだだだつと廊下を走る音がして、

「間に合つた？ 僕間に合つた??」
と飛び込んできたのは、我が社の社長、櫻原武氏。しばらくして、そもそもと絵梨紗も入ってきた。

じゃあ、「」から「」挨拶第一「ラウンド」突入ってか?

「間に合つた？ 僕間に合つた？？ 紀文ちゃん」と薰の父親に聞く社長。それに対し、当の紀文ちゃんは、野球のアウトサインをしながら、「うーん、ギリギリアウトつてここかな」と笑顔で言つ。

「じゃあ、日取りとかも決まっちゃつた？ いつ、いつ？」日取りつて結婚式の日取りか？ つつか、なんだこのぶつ飛び具合は。社長せっかち過ぎねえか？ 僕は今日、薰と付き合つ宣言しに来ただけだぞ。そう思つてると薰が、「武叔父様、飛びすぎ。まだ、そこまで行つてない」と言つて社長を睨む。おお、会社では絶対にあり得ねえな。「じゃあ、僕のサポートの件は？」

「まだ！」

「じゃあ、取締役会の件は？」

「それもまだ！！」

「じゃあ、全然間に合つてるんじやん、僕」

矢継ぎ早に俺の解らないことを質問した挙げ句、そんな話はしてねえことを知ると、社長はホツとむねをなでおろしていた。「そういうのは、ウチには関係ないからね、タケちゃん」「ひどいな、櫻原には大事な問題なんだよ」

そして、紀文ちゃんのその言い分に、社長改めタケちゃんはむくれながらそう返す。タケちゃん、普段とぜんぜんキャラ違うくないですか。その日本人離れした顔で小首を傾げると愛くるしいっちゃそうだけど、歳考えるとカテゴリー：かわいそうな子だよな。

「あ、社長。入院中はいろいろありがとうございました。ホントあんなすごい部屋にずっとといさせてもらつて恐縮です」

俺は、そんなタケちゃんの変わりつぶりに面食らいながらも、忙し

い中折角来てもらつたんだからと、お礼の挨拶をする。

「いーのいーの、気にしないで。可愛いベスの命の恩人に窮屈な思いをさせたら、僕がパパに叱られるもん。それにさ、未来の社長の部屋としてはチープな方だよ」

ベス・エリサベツ・エリーサ・絵梨紗か。けど、未来の社長ってなんだ？？

「俺、話が見えないんですけど」

「えつフロリーから聞いてないの？ フロリーの田那様には漏れなく櫟原がついてくるつて話。

とは言つてもさ、せんぜん櫟原に関係ない子が来ちゃつたらどうしようかつて思つてたんだけど。でね一応、調べさせてもらつたよ、鮎川幸太郎君。で、合格！ 文句なしだよ。フロリーちゃん、グッジョブ。ううん、見る日あるよ」

社長は今にもとろけ出しそうな満面の笑みだ。そんで、フローリアでフロリーか……イヤイヤ、問題はそこじゃないつ、未来の社長だ。聞いてない、聞いてないぞそんな話……

「社長！ どうして俺が社長やんなきやなんないんですか……」

「じゃないと、僕が辞められないもん」

俺の問いかけに、社長がウルウルの瞳でそう答える。

「社長つてまだ40代でしょ」

「うん、48。今年49になるよ」

だから、アラフィフ男が小首を傾げてしゃべるんじゃない！

「まだ、引退するような歳じゃないじゃないですか！」

思わずそう叫んだ俺に、タケちゃんは徐に一冊の本を取りだした。

熱烈歓迎！ 2（後書き）

うつ、まだ終わらない。濃すぎる薫の身内たちに、作者まで圧倒されます。

社長改めタケちゃんが会社を辞めたがる理由は次回。

タケちゃん（もつ、社長と呼ぶ気がしねえ）が差し出したその本は最近話題の市原健の恋愛小説。作者の経歴おろか性別さえも（ただ、名前からして男性だつて思うが、何年か前に本 大賞を取つた作者は男っぽい名前だけど、女だつたりしたしな）不明な謎の作家の作品だ。タケちゃんはその本の名前の部分を指さして、

「これ、僕」

と言つた。2歳児みたく2語文じや、何言つてんのか解んねえ。

「へつ？」

「一応音だけは本名なんだよ。だけど、誰も僕だつて気づいてくれないから、寂しいんだよね」

タケちゃんがそう言つてため息を吐く。

「市原 櫻原、ぜんぜん違うじゃ ないですか」

どこが一緒だ。

「あのね、櫻の木はいちごの木とも呼ばれていてね、みんなが読み間違えるから社名はくぬぎはらにしきやつたんだけね、元々の読みはいちはら」

それに、櫻つて画数多いから面倒だし、本名で書くのもね、とタケちゃんは続けた。

「僕の書いた文章に紀文ちゃんが絵をかいてさ、一緒にやうつしていつたのに……紀文ちゃんたら、一人で絵を描いて勝手に有名になつちゃうんだもんなあ」

タケちゃんが文章を書いて紀文ちゃんが挿し絵か。それとも一人で漫画家にでもなろうとしていたんだろうか。

「タケちゃんには、会社があるだろ。タケちゃんまで引っ張つたら俺、お義父さんに殺されるよ」

まあ、嫁にやってその上跡取りを別の仕事に持つてかれたら……思いつきり立場悪くなるよな。

「紀文ちゃんも描きながら会社手伝ってくれたらいじやない」「片手間でできるひつぢゃないだる。会社潰して良いんだつたら手伝つけど?」

タケちゃんの言い分に紀文ちゃんはしれととれり返す。

「ふん、紀文ちゃんは僕よりエミナちゃんを取つたんだ」

普通そだろ、嫁より嫁の弟取つてどうする、という紀文ちゃんにタケちゃんは口をへの字に曲げて黙り込む。なんつーか、まるでガキの会話だよ。

「ま、そつ言つことだから、タケちゃんのこと手伝つてやつてくれないかな。君にも譲れない夢があるのなら別だが」

そんなタケちゃんを生温かい田で見ながら紀文ちゃんが父親の顔に戻つて俺に言つ。

「俺にそんな大層な夢なんかありませんよ。社長なんてガラジやないんですけど、サポートつてことなら構わないですよ

「やつたあ、ありがとうーー！」

取りあえず承諾した俺に、タケちゃん破顔で俺の手を握りブンブン振り回した。うー、なんだかな。早い遅いに関係なく、俺ダメージ大きいかも。

「それじゃあ、早速僕の見習いつてことで、秘書課に異動かけとくから。今まで君がしていた仕事、入院中に全部ほかの社員に振り分けられるからね。そのまま異動できる。ほんとラッキーだよ」

「げつ、すぐに異動つてか？ それも秘書課かよ。」

「後は、結婚式だね。櫻原の社長の結婚式として恥ずかしくないものにしなきやね」

タケちゃんは、会社から足抜けができると決まつたからか、上機嫌でそう言つた。この分だとあつと言つ間に会社投げてこられそうだな。安請け合ひして良かつたのかな、俺。そう思つてると、今まで黙つていた絵梨紗が、

「お姉ちやまは結婚式かあ、いいなあ」

と盛大にため息をつきながらそう言つた。けど、続けて言つた、

「あたしも、ビクと結婚したいな」という言葉にその場にいた全員の動きが止まった。

繰り上げ当選？

「ベス、ビクつて誰？」

タケちゃんが聞き捨てならないと絵梨紗にそう聞く。それに対しても

「ああ、本名^{おやもと}宮本美久、彼女の命の恩人その2ですよ」

俺が代わってそう答えた。

「じゃあ、幸太郎君と一緒に乗つてたつていう？ ビクつて言つから、ベスの学校の友達かと思つちゃった。日本人んでしょ、何でビク？」

学校の友達つて言つから聞いてみると、絵梨紗はアメリカンスクールに通つているらしい。

「ええ、ベタベタのネイティブ日本人ですよ。よしひさつてのは、美しいに久しいつて書くんですよ。つい最近ちょっと外人と知り合いになつて、そいつがよしひさつて発音できなくてヨツシャにしか聞こえないから、それなら俺が音読みでビクつて呼べば良いつてついに教えたんです」

正確に言えば、外人じゃなくて、異世界人だけどな。そう言えば、ビクつて呼ぶ元になつたマシュー改めエリーサは、宮本との別れ際、泣きながらよしひさと発音しようつと懸命に頑張つていたつけ。そんなことを思い出してると、タケちゃんは俺をリビングの隅に連れて行くと、小声で、

「ねえ、宮本君の方はベスの事どう思つてるの？ ベスの独りよがりとかじゃない？」

と聞いた。絵梨紬はまだ恋に恋する年頃、命の恩人に優しくされて、その気になつてるようなことを心配してはいるのだろう。

「いいえ、残念でしようけど、しつかり両想いですよ

寧ろ、宮本の方がお宅の姪御さんに夢中です。

「ふーん、そうか……ベス、ホントにビクくんのお嫁さんになりたいの？」

「うん、なりたい！」

なれるの！？ とその一言に身を乗り出す絵梨紗。

「でもね、ベスが結婚できる歳になるまでまだいぶあるし、それまでに気持ちが変わるかもしれないから、一応仮押さえってことで、富本くんも一緒に秘書課に異動させるよ。このままうまく行くようなら、君の補佐をしてもらつ。その方が君も気分が楽でしょう？」
でね、最初は君が僕のところにきてもらうつもりだったけど、絵梨紗の彼氏をパパにつけるのはちょっとさすがにアレだから、君がパパの方に回ってくれる？

思ったより、僕早く辞められそうだね、君は痛い思いをしただろうけど、僕としてはホントに良かつたよ

タケちゃんは嬉しそうにそう言つと、まだ仕事があるとさつさと帰つて行つた。まったく、自分が言いたいことだけ言つて行つちまつたぜ。

その後……

タケちゃんはそれから半年も経たない内に青木賞にノミネートされてしまつた。受賞後呆気なく素性をカミングアウト。社内は蜂の巣を突いたような大騒ぎとなる。それで、タケちゃんが未だ独身であることが発覚。

「じゃあ、デビくんは一体誰の子なんだ？」

と聞いた俺に、

「あれ？ 言つてなかつたつけ？」

と、薰。そこで俺たちは、デビくんこと本名櫻原英雄（英名デビッド）は会長の30歳年下の再婚相手、クラウディアさんとの間にできた、タケちゃんにとつては義弟だった。ちなみに絵梨紗は英雄の姉。つまり、タケちゃんの義妹。
「じゃあ、絵梨紗は義理の叔母？ つてことは、あの二人がくつつきや富本は俺の義理の叔父になつちまうつてか！？」

それを聞いたとき、俺がそんな雄叫びを上げてしまつたことは言
うまでもない。

繰り上げ当選？（後書き）

以上で、番外幸太郎編、一段落です。

次回よりオラトリオ組の話に戻ります。わーい、やつとファンタジーだよ。

てな訳で、次は「希代の魔術師」の方でお会いしましょう。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（前書き）

本編から、一年後位。新章の少し後へりこのお話です。

綺麗なお嬢さんは好きですか？

今日は久しぶりのお休みで、絵梨紗ちゃんピーテート。

待ち合わせに現れた絵梨紗ちゃんは小花柄のチュニックに白いレスのミニ丈のティアードスカートに、編み上げサンダル。まるで絵本から出てきたみたい。僕は鼻血が出そうになつて、思わず鼻を押さえた。

行き先はビルの森の中にある水族館。海の生き物には本当に癒される。特に、勇壮に勢いよく泳ぐマグロの大群は本当に……。うう。そう。そう思つたら無性におながが空いてきた。それもそのはず、そろそろお昼だ。

マグロを見た後だつたんでも僕の口はどうちかと言えばお寿司を要求していたんだけど、とりあえず絵梨紗ちゃんの意向を聞いてみる。「何か食べたいもの、ある？」

すると、

「うーん、ケバブ食べてみたい。確かにこの辺においしい店があるって聞いたんだ」

という答えが返ってきた。ケバブといつのほトルコ料理。平つたく言えば焼き肉みたいなものだ。まだまだ小学生の絵梨紗ちゃんは、ご両親が谷山先輩としかこの街にきたことがなく、歩きながら頬張るようなその店のケバブは、お行儀が悪いと食べさせてもらえないかったのだという。

その教育方針をあつさり曲げて一緒に買い食いしても良いものなのかと思わなくもなかつたけど、僕の貧しい口はケバブと聞いたらけで口の中に肉汁を待つ始末だったので、あつさりとその誘惑に負けて彼女の言うケバブのお店に向かい、ドナルケバブを一つずつ買いい、食べながら歩いた。

半分くらい食べただろうか、その時僕は、

「ヨシ、久しぶり」

と呼び止められた。振り返るとそこには中学時代の同級生の佐々木がいた。

「久しぶり、元気だつた？」

「おう、まあまあ。なんとかもぐりこんで会社員やってるよ。ヨシは」

「うん、僕も似たようなもん」

と僕たちはお決まりの挨拶を交わす。すると、佐々木は絵梨紗ちゃんに眼をやつて、

「ところで、横にいるのは、妹……じゃないよな。おまえんち男ばつかだつたもんな。カノジョ？」

と言つた。僕は男ばかりの3人兄弟の末っ子だ。佐々木はそれを知つていて、

「うん、ああ」

と、それに僕は適当に相槌を打つ。すると、僕を横目で見ていた絵梨紗ちゃんが、

「はじめまして、富本美久の婚約者の櫻原絵梨紗です。富本がいつもお世話になつてます」

と言つて、佐々木に頭を下げる。見るとちょっとぴりふくれつ面だ。恋人として紹介してもらえたのが不満らしい。

「こ、婚約者あ！」

一方、それを聞いた佐々木は信じられないというのがありありと判る顔をしている。

「うん、一応」

別に隠したい訳じゃないんだけどね、やっぱり婚約者って響きは照れくさいから。僕がそう思いながら頭を搔いていると、佐々木は俺の腕をとつて強引に5~6メートル向こうに引っ張つていくと、

「お、お前、婚約者つて、あの子いくつだ」とひそひそ声で聞く。

「うん？ 12」「

この間誕生日がきたから、12歳になつたはずだ。

「12！？」

絵梨紗ちゃんの歳を聞いて佐々木がまた素つ頬狂な声をあげる。

「お前それ、犯罪だろ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ、アブナイことなんかしてないから、犯罪じゃないよ」

佐々木の言いぐさに、僕は不満がましくそり答える。

「でも、婚約者なんだろ」

「結婚してるわけじゃないし」

「結婚できないの間違いだろ」

佐々木はそう言ってため息をついた後、ニヤリと笑うと、

「それにしてモシンが口りだつたなんてな」と言った。

「な、何だよ、それ。そんなんじゃないよ

「じゃあ、政略結婚か？」

「そんな政略立てるほど金持ちじゃないよ」

「だろ？ 何にしたって、自分の半分の歳の娘と結婚しようなんて考える時点で口り決定だろうが

「あ、これにはむ、いろいろ深い訳があるて……」

絵梨紗ちゃんはエリーサちゃんで、エリーサちゃんは最初マシューで、僕は彼女が大男だったときから好きだから、決して口りコンなんかじゃないと心の中では言いつつ、でもそんな夢の話をするわけにもいかず、口ごもった。僕の答えに佐々木は、

「ま、な。小学生ならお前より背が高いなんてことないもんな、でもあの子ハーフっぽいじゃん。その内逆転するんじゃね？」

と返す。「ひつ、内心気にし始めてることをひつと並んでない！ そうぞ、愛情は身長じゃない、身長じゃない……と思いたい。」「ねえ、ビクいつまでお話してるの！」

そのうち、男たちのひそひそ話に痺れを切らせた絵梨紗ちゃんが仁王立ちで怒っている。

「あ、悪い。引き留めちゃつたみたいだな。それにしても『ビク』

なんて呼ばれてるわけ？」
「シ

すっかり今から尻に敷かれてんじょんと、佐々木は吹き出した後、「俺はやっぱ、きれいなおねーさんの方が良いな。カノジョにおねーさんとかいないの？」

「いるよ」

「おつ、その子いくつ」

「25」

「俺らより年上？　いやあ、歳離れてんだな。けど、年上もそれれるねえ、是非紹介してよ」

佐々木はにやにやしながら、僕にそう言つ。

そう、絵梨紗ちゃんには確かにお姉さんがいる。僕、ウソは言つてない。

だけど、その人僕の先輩の奥さんなんですけど。先輩に殺されてもいいんなら紹介くらいはしてあげるけどね。

（先輩今、超デレモードだからね、何されても責任持てないよ。それでも良いんだつたらね）

僕は心中で佐々木にそう言つて、口角をあげた。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（後書き）

タケちゃんがほとんどの作家業にいそしむ中、きりきり舞いしている
美久と絵梨紗の水族館デートでした。何か、美久食い気で動いてま
したけど……

で、このお話はここで閉じようと思います。新章は別枠でR-15
(つてほどにはならないかも知れませんが、保険です。その方が思
いつもりはじけられますから) フラグを立てることにしました。

幸太郎が宗直替えして超テレモードになっている理由がそこで明ら
かにされる……はず。

よろしければお付き合いください。

天使様との出会い

「え、最悪だわ……」

私は、某高級ホテルの廊下で動けなくなっていた。着物を着ていたせいで、ホテルの毛足の長い絨毯に足を取られて、私は豪快に転んでしまったのだ。こつそり出ようと人気の少ない駐車場に向かっていたので、誰にも見られなかつたのが幸いだけだ。

考えたらママ、朝から拳動不審だつたのよね。

「引き出しの奥からママの若い時の着物が出てきたのよ、着てみる？」

つて、鼻先に突き出された。呉服屋の娘だつたママはたくさん着物を持つていて、確かにそれはママの若い頃のものだつたけど、持っているだけにちゃんとカテーテゴライズされていて、思い出したように出てきた代物じゃない。

先生の先生がお見えになるから、迂闊な格好はできないのでママも着物で行くつていうし、私も呉服屋の孫娘、基本的に着物は嫌いじゃない。

ただ、たかがカルチャースクールの発表展示会がこんな有名ホテルで行われる訳ないつてことにもつと早く気づくべきだつたわ。

そう、用意されていたのは、ママのカルチャースクールの発表展示会じゃなく、私のお見合いだつた。向かおうとしているラウンジに展示物が一つもなく、ちょっと頭の薄くなつた男性が座つているのを見てことを察して激怒した私に、ママはしつと、

「だつて、36にもなるとお話を持つてくれること自体が稀なのよ。それに更紗ちゃん、最初からお見合いだなんて言つたらじべもなく断るでしょ」

と言つた。だからつて、だまし討ちばかりつかと思つ。

それで仕方なく私は席についたんだけど、この相手の男性がまた、

くでくでしててどうも煮えきらないのよね。話を聞いていてイライ
ラしちゃう。

で、私はトイレに行くフリをしてその場を抜け出してそのまま逃
走を図るとしていたのに……マズった。

「お嬢さん、大丈夫ですか」

その時、頭の上で声がした。

「はい、Y e s 」

そこにいたのは、スーツを着た外人男性。下から見上げているので、豪華なホテルの照明に照らされて、まるで天使様みたいだ。あわてて英語で話そうとするけど、言葉が出てこない。

「えつ、僕ちゃんと日本語で話しましたよね。心配しないで、僕半
分は日本人ですから」

すると、天使様は困ったような顔でそう言つた。は、ハーフなんだ。
顔から火が出そつ。

「あ、すいません」

「いいえ、最近でこそあまりなくなりましたけど、結構よくそういう反応はされてるので、慣れてますよ」

天使様はそう言いながら、私に手を貸してくれた。

「イタツ」

だけど、立とうとした私は、左足首に激痛を感じた。

「ああ、足捻っちゃったみたいですね」

天使様はそのまま屈んで私の足袋を脱がせると左足を見た。あちやー、どうしよう、やつちゃつたわ。でも、

「どうしよう、早く逃げなきゃいけないのに」

思わず口を出た（最近思つてることをついつい口に出しかねるのよね、歳かしら）言葉に天使様は、

「えつ、君も逃げなきゃいけないの？」

驚いてそう言つた。でも、「も」って何？

その時、

「タケちゃん、タケちゃん！」

と焦ったような男性の声がした。

「や、ヤバい。見つかる」

天使様は舌打ちしながら小声でそう言つと、

「君も逃げなきゃいけないんですね」

と言いながら、軽々と私を抱き上げ、

「じゃあ、このまま一緒に逃げますか」

と、駐車場に向かつてスタスタ歩きだした。

天使様との出会い（後書き）

はーい、「赤パニ」で最後に美久が言っていた武の小ネタ入ります。

武が逃げている理由は……もう、お解りですよね。

尚、これはファンタジーではございません。

ま、50歳と36歳の恋愛はある意味ファンタジーなのかも知れませんが。

こんなのでよかつたらお付き合いください。

拉致られた？

「あ、あの……下ろしてください」

確かに一刻も早くホテルを出たかったのは事実だけど、お姫様だつこはちょっと勘弁してほしい。しかも、天使のような容貌をしていたとしても、彼は全く見ず知らずの男性だ。『天使の皮を被つた悪魔』かもしれないもの。それに対して天使様は、まったく歩く速度を落とさないで、

「なぜですか？」

と聞く。

「お嬢さんは逃げなきゃならないんでしょう。僕も逃げなきゃならない。利害は一致します」

と何とも優雅な微笑みを浮かべながら駐車場を目指す。

そして、3ナンバーの国産車の前で一旦私を下ろすと、ドアを開け、助手席のシートを可能な限り後ろに下げて再び私を抱えあげた。よく考えたら、コレ、相当ヤバいんじゃない？　私は今更ながらに逃げ出そうともがいた。

「どこに連れていくんですか！」

「暴れないでください、落ちたらむつと怪我しますよ。

そうですね、どこに行きます？

とりあえず病院に行きましょう。どこに行くかはその時決めましょうか

天使様は暴れる私を再度がっちりと抱え込むとそう言った。

「ただ捻つただけだから、病院なんて良いですよ」

病院？　大袈裟な。こんなの、湿布貼つて大人しくしてればいいのよ。

「ダメです！　今見ましたけど、お嬢さんの足、既に腫れてきてますよ。

それに、捻挫をバカにしちゃいけない。骨折と違つて歩けるからつて無理に歩いたら、骨と筋の間に隙間ができるんです。そうなつたら、もう元には戻らない」

それに対して、天使様は即答でだめ出しをした。

「隙間ができたらどうだつて言つんです」

そんなの別に外から見えないし。私がそう言つと天使様は、「普通にしているなら何にも問題はないですよ、でも長時間歩いたり、立ちっぱなしで作業すると痛んできます。

五体満足に生んでもらつた身体でしょう？ なら、大切に使いましょう」

なんて説教を垂れながら有無を言わせず、私を助手席に押し込んで自分も乗り込むと、すぐに発進した。これじゃ、拉致じゃない。

でも、天使様はそこから何分も行かないコンビニに車を停めると、喉でも乾いたのだろうか、

「ちょっと待つてくださいね」

と言つて一人で車を降りてしまった。

このとき確かに、国産車の助手席では左足に力が入らないと難しいとは言え、どうしてもと思えば私は逃げられたはずだ。

でも、結局私は待つた。どうせ逃げたところでこの足だ、すぐに追いつかれてしまうだろうし、私にはこの天使様がなんだか悪い人にはどうしても思えなくて。

しばらくして戻ってきた天使様の手には小さなビニール袋が二つ握られていた。一つは私の予想通り飲み物で、

「コーヒー大丈夫？」

と言われて頷いた私に手渡されたのは、甘いカフェオレだった。

「あ、ブラックとかの方が良かつた？ 僕、いつもこうこうのしか飲めなくて、つい同じもの買っちゃつたんだけど」と言う彼が持っているのも、同じものだつた。

「いえ、コーヒーなら何でも飲みますよ

カロリーが気になるからいつもはブラックだけど、甘い方が本当は好き。

そしてもう一つには、サンダルが入っていた。

「病院でテーオピングしてもらって、このサンダルでなら松葉杖ついて歩けるでしょ」

「あ、ありがとうございます」

「それから、何か服を買いに行きましょう」

「へつ」

「だけど、何故に服が要る？ 私が天使様の言葉に首を傾げると、帯をしていると、椅子の背に身体を預けられないでしょ。そしたら足、きつくなりますか」

と逆に質問してきた。

「いいえ、普段からよく着物は着ますから」

「そうですか、でもその着物はちょっと……」

この着物の何がいけないのだろう。それに對して天使様は、「えつ、僕たち一緒に逃げるんでしょ。だったら、その着物は目立つし、もつと逃げやすい格好をした方が」と、真顔で言つ。

逃げやすい格好つて……そりや、確かに逃げなきやつて言つたのは私だけど、それはお見合い場所からであつて、別に国外逃亡とかするつもりはさらさらないんだけど。

それにしても、天使様は何で逃げようとしてるんだろう……そう考えたとき、私はある重要なことに気づいた。

……私が、天使様の名前も知らないんだつてことに。

お名前は？

「あの……今更なんですが、あなたのお名前は……」
私がそう聞くと、

「あ、ああ、すいません。僕名前も言つてなかつたんですね。それは警戒されても仕方ないな。

僕は……た、いえ、マイケル。そうマイケルです」

天使様改めマイケルさんは、真つ赤な顔になつてそう答えた。警戒していたこと、気づかれてたか。けれど、名前のところに若干口ひもつたのが気になる。それで、マイケルさんが私に、「あなたの名前も教えてくれますか」

聞き返したとき、私の本名は更紗さらななんだけど、「

「私ですか。さらです」

と、答えた。実際、私の学生時代の友達なんかはさらちゃんって呼ばれているし、コレくらいなら偽名にはならないよね。それにしてもぴつたりだな。マイケルって、大天使ミカエルの英語読みでしょ。「さらさんか、かわいい名前だ。そのね、最近ではミシェルと呼ばれることも多いんだ。新しい義母ははがフランス語圏で育つたんで、マイケルとは呼んでもくれなくて。義妹や義弟はそれに倣うしね。だから、マイケルでもミシェルでもどっちでも良いですよ」

と、マイケルさんは私が訝つているのを察したのか、そう付け加えた。それにしても新しい義母ははつて……口調は全然寂しそうじゃないんだけど、そんなハードな話を見ず知らの私が聞いちゃつていいいのかな。それで、

「あなたはどうちらで呼ばれたいですか」「私は少し考えてそう聞いた。

「うーん、どっちでも良いけど。さらちゃんが呼びやすい方で」するとマイケルさんはそう即答する。本当のお母様との思い出とかあるかなと思つたんだけど、その口振りを聞くと、ホントにビビつ

でもいいみたいだ。

にしても、いきなりさらちゃんって呼ぶ？ 確かに、5つ？ 7つかな、くらいは年上みたいだけ。

そうこいつしている内に車は近くの救急病院に着いた。休みの今日は救急外来から入る。でも、せっかくサンダルまで買ったというのに、私は相変わらずお姫様だっこのままだ。

「サンダルも履いているんだし、もう下ります」

と言つても、ダメだの一点張り。案の定、待合いの椅子に着くまでに、ナースの人から、

「事故ですか？ 歩けないんでしたら車いすをお持ちしますよ」と言われてしまつ。それで、

「い、いえちょっと捻つただけですから。歩けます」
そう返して、再度着地しようとすると、マイケルさんはそれをがつちりとホールドして、

「何度も言つたら解るんですか、捻挫の方が実は骨折より質が悪いんですよ。すいません、僕は一向構わないんですが、この人が歩きたがるので、お願いします」

と、勝手にナースさんにお願いしてしまつて、ナースさんはクスッと笑つて車いすを取りに行つてしまつた。

そして、すぐにやつてきた車いすに乗せられる。何だか格好だけは大げがしてゐみたいで恥ずかしい。

中に入ると、冷却シートをおでこに張り付けてぐつたりしている小さい子とか、いかにも辛そうなお年寄りとかがいて、なんか場違いな感じがする。マイケルさんは待合いの椅子の横に車いすを停めて、

「さらちゃん、保険証持つてる？ あつたら、受付に出していくよ」と言つたので、持つていたバッグをさぐつた。今日は着物だから財布ぐらいしか持つていなければ、保険証は、カード化されてから財

布の中に入っている。車に乗れない私には、これが身分証明書のメイントピックだ。インだし、どうせ今日は休日料金だけど、それでも保険証を出さないよりはマシ。私は保険証を取り出して、マイケルさんに手渡した。でも、受け取った彼は、ちらりとそれを眺めると、「へえ、月島……あれ、コレでさらつて読むの？」と聞く。

あ、あああつ！ しまつたあ！！

保険証つて、ばっちら本名が書いてあるんだつた

私のついた軽い嘘は、こうして一時間も経たない内にバレてしまつたのだった。

おお前は？（後書き）

実年齢50歳のタケちゃんもとい、マイケル君ですが、ムダにバイタリティーのある彼は、更紗ちゃんに40代前半に見られているようです。

究極の選択

「いえ、更紗です」

私は蚊の鳴くような声でそう答えた。

「へえ、そう」

とだけ言つマイケルさんの視線がイタイ。

「マイケルさんこそ、本名なんですか？」

私はそれに負けまいと、マイケルさんを睨みながらそう返した。

「ぼ、僕はもちろん本名だよ」

それに対してもぐらぐらマイケルさんが言つ。

「じゃあ、名字は？」

「櫟原。櫟の木に原つぱの原でいちばんうて読むんだ」

「ホントですか」

「正真正銘、マイケル・櫟原だよ、君と違つて」

そして、念を押す私にマイケルさんは少しふくれつ面でそう答えた。だけど、

「何か証明できるものは？」

と尚も私が食い下がると、

「証明できるものって……」

と、明らかに難色を示してくる。怪しい……私と違つてマイケルさんの場合、絶対に携帯しているはずの身分証明書があるはず。

「免許証、見せてください」

「それは……」

案の定、マイケルさんはじぶんじぶんになる。

「見せられないんですか？」

「良いです。見せますよ、見せれば良いんですね」

それでも私が詰め寄ると、マイケルさんは観念したようにため息をつき、ちよっぴり逆ギレしながら私に免許証を見せた。そこには、櫟原武と書かれていた。やっぱりマイケルは本名じゃなかつたのね。

だけど、予想外に日本人っぽい名前だ。

「やっぱり、マイケルさんも本名じゃないじゃないですか」

と、私が口をとがらせて抗議すると、

「ちゃんとした本名だよ。母がイギリス人だから、英名も持ってるんだ

だ」と言い訳する。

「だからって、何で日本名を隠すんですか？『いちはらたけし』って（名字がちょっと難読だけど）普通じゃないですか？」

そうよ、何で隠す必要があるんだろ。

「たけし……そうだね、そうだよね。僕、何を怖がってたんだろう

な。うん、更紗ちゃんの言つ通りだよ」

私がそう言つと、マイケルさんはそう言つて笑つた。明らかにホッとした様子だ。私、何か彼を安心させるようなこと、言つたかな。

「円島さん、円島更紗さん、診察室にお越しください」

そのとき、診察室から声がかかった。マイケルさんは当然のようこの車いすを押して診察室に向かう。そして私が、

「いいですよ、車いすも借りてもらつたんだし、私一人で大丈夫です」

と言つても、

「慣れないとまつすぐには行かないでしょ。それに今、僕にはすることないし」

と言つてその手を離さず、お医者様の前まで押していく。

「円島さん、かなり強く捻つてるね。今日は救急でサポーターとか用意できないから、しっかりテープニングしておくけど、必ず明日整形に行つてね」

そこにいたのは、私ぐらいかそれより少し若い位の男の先生。先生は、クスクス笑いながら私に、

「それにしても、とんだデートだつたね」と言つた。で、デートですとお！

「いえ、デートなんかじゃありません」
あわてて否定した私に、先生はなおも、
「違うの？ お姫様だつこされてきたつて聞いたし、一人ともおしゃれしてるから。じやあ、転んだのがホテルだつて言つから、お見合い？」

と続ける。お見合いと言われて、私の頭の中に、あの『髪の毛風前の灯火』さんが浮かぶ。

「お見合いなんかじゃありません！！ あたつ！」

私は、その発言に、思わず立ち上がりつて抗議したとたん、足に激痛が走つて車いすに逆戻り。

「失礼じやないですか、ここは他人のプライバシーにまで関わるところなんですか」

なんなら法的処置も辞さないと、マイケルさんもえらい剣幕で怒る。「いや……お一人を見ててほほえましいカップルだなと思つたから言つただけで。そうじやないんだつたら謝ります」

すると、先生は相変わらずへらつと笑いながらそう答えた。おまえ、口では謝つてるけど『反省してないだろっ』。

だからといって、休日の混んだ病院でこれ以上ゴネるのもなんだし、私は頭だけ軽く下げて、隣の処置室で足にミイラのよつたテープティングをされて、かいほうされた。でも……

「あの……できたら松……もごもー」

テープティングを受けながら、松葉杖を借りようとした私に、マイケルさんは私の口に手を当ててそれを制した。そして、耳元で囁くようにな、

「いじで借りたら、また返しに来ないといけないよ。いいの？」
と言つた。あのへらこん医師が整形医かどうかはわからないけど、顔なんか合わせなくつても、電車の沿線が違うからかなり遠回りしないとこれないし、できれば来たくない。私は頭を振つた。それを見てマイケルさんはクスッと笑う。

ん？ 何でそこで笑う？？ 私、なんか大事なこと忘れてるよう

な……

ああーつ、松葉杖を頼まないつてことは、またあの『お姫様だつ』をされて帰るつてことなの！？

イヤだあ！返しに来るのもイヤだけど、お姫様だつこはもつといや。だけじまでよ、もつ既にやられてるんだから、今更もついか……いやいや、やつぱ恥ずかしいし。

わあ、どうする？ 私。

究極の選択（後書き）

タケちゃんが名前を言わなかつたのは、音だけだと、櫻原武が作家市原健につながるのを怖れてでした。

なので、更紗ちゃんが『たけし』と読み間違えてホツとした訳ですね。

青木賞受賞時は、タケちゃんが元櫻原の社長であることをワイドショーなんかでさんざんやってたんですが、もうそれからずいぶん経っていますし、仕事をしている更紗ちゃんはあんまりそういうものを見ませんので知らなかつたのでした。

紳士の國の血？

プルプル震えながら首を振る私に、ナースさんが、

「あら、痛かつた？」

と聞く。

「あ、いえ」

痛くはないです。あ、ある意味痛いかも……心が。それで、

「そうですね、テーピングもしたんだし、肩、貸してくださいされば」

私がそう言つと、マイケルさんは、

「ムリ」

と秒殺した。

「何ですか」

そんなに私をお姫様だっこしたいんですか、マイケルさん。だけど、

マイケルさんは私の質問には答えず、

「じゃあ、聞くけど更紗ちゃん、何cm？」

と、いきなり私の身長を聞いた。

「ひゃく、157cm」

本当は156.2cmだけれど、マイケルさんは、やつぱりそれくらい？ と言つた。

「僕、178cmあるんだよね。肩を貸すのつてある程度同じぐらい身長ないと、高い方がきついんだよね」

その差21cm。私がマイケルさんの肩に手を回すとなると、マイケルさんはずっと中腰で歩くことになる。それは確かにハードかも。マイケルさんは、

「それに行きほど大変じやないと想ひよ」

と私に言つた後、ナースさんに向かって、

「あ、後で返しに来るんで、この車いす車まで押していいですか」

と聞いた。おおーっ、その手があつたか。もちろんそれは快諾され、

ちょつと一安心。

処置室を出てしまはりますへりすると、会計に名前を呼ばれた。するとマイケルさんは、

「ちょつと待つてて、僕が払つてくるから」と、当の本人の私をおいて一人でさつさと会計に行く。私は慌てて

慣れない車いすを漕ぎながら後を追つた。

「マイケルさん、私が払いますから

別にマイケルさんが私を怪我させた訳でもないのに払つてもうう筋合いなんて全然ないから。なのに、マイケルさんは、「

いや、病院に連れてきたのは僕だしね。ここは僕が払うよ」と、まるで当たり前のようにお金を出そうとする。さすが、紳士の國の血を引いてる、フェミニストって奴ですか。私が、

「この怪我は私の不注意で、マイケルさんには何にも関係ないですから」と言つても、

「何で？一緒にいる女性にお金なんて出させたりできないよ」と、まったく払う姿勢を辞さない。何度も押し問答の末、自由に身動きできない私が押し負けた。

駐車場まで車いすを押しながら上機嫌のマイケルさん。今日会つたばかりの他人の治療費払つて、何がそんなに嬉しい。

私を乗せた後、玄関先に待機していたナースさんに車いすを返して、マイケルさんはどこに行くとも言わずに走り出した。

キ、キャラ違うんですけど……

マイケルさんは信号待ちの間に素早くインカムを取り出すと、どこかに電話をかけた。スマホは乗った直後に専用のポートに差し込んである。たぶん、普段からこんな風に電話することが多いのだろう。

「……ああ、櫟原だが。今からそちらに向かうんで、駐車場に車いすを用意してもらいたい。連れが怪我をしているんで。じゃあ、15分後ぐらいにそちらに着くのでよろしく」

それにもしても、いつたいどこに行くつもりなのだろうか。でも私は、電話のマイケルさんの口調が思いの外高圧的なのにびっくりして、それを聞くことができず、マイケルさんも何もしゃべらない。電話のためのか、カーオーディオのボリュームを切つてある静かな車内には微妙な空気だけが流れていた。

そしてついたのは都内の有名デパート。駐車場に着くと、デパートの偉いさんらしき人が、車いすを持って待ち構えていた。

「櫟原様、いらっしゃいませ。お待ちしておりました。こちらのお嬢様をお乗せすればよろしいでしょうか」

デパートの人はマイケルさんにこやかに挨拶をすると、素早く助手席に回り込んでそのドアを開けたけど、

「いや、彼女は私が乗せる。それよりも彼女が動きやすい服を見繕つてもらいたいのだが」

「かしこまりました」

マイケルさんはこちらに回り込み、私を抱き上げると、デパートの人気が持ってきた車いすに私を座らせた。デパートの人は、部下の人らしき男の人には、

「和光さんを外商に」

と指示を出した。すぐさま部下の人人が和光さんを呼びに走つて行く。そして、

「すいません、櫻原様」自身のお買い物だと思いましたので、中村を来させたんですが」と恐縮しながら頭を下げた。

「いや、女性の買い物だと言わなかつた私が悪い」「とんでもございません。お電話を頂いたとき、まずはじめがお伺いするべきでした」

大体、デパートの人つて低姿勢だけど、この人の姿勢は更に低いような気がする。それだけマイケルさんが普段このデパートで買い物しているのだつて解る。でも、相変わらずマイケルさんの口調は高圧的で、私には話しかけてもくれない。どうしちゃつたんだろう。いつもとは違うエレベーターで最上階に上がると、そこは応接室のようなところだった。これが噂の外商部つて奴なのね。私には一生縁のないここだと思つていた。

デパートの人があ開きのドアを開けると、そこには、既に和光と書かれた名札をした女性が衣類ハンガーに服をいっぴい吊り下げて待機していた。そして、

「初めてまして、和光と申します」

と完璧な角度でお辞儀をした後、

「お御足のことを考えますと、ストッキングを穿くことも難しいと思いまして、パンツスーツを中心のご用意させていただきました。トップスは7号でボトムスは9号でよろしいでしょうか？」それでしたらこれなどいかがでしょうか？

とたくさん吊つてある中から、ワインレッドのものを取り出す。たぶん私が今着ているエンジに小花柄の着物を見てのチョイスだろう。でもこれは、ママから『見合い』の為に着せられただけなんだけど。それに気づいているのかどうかは別として、和光さんはさらに私が目で追つているの場所を素早く見て取つて、

「それからこちらなどもよろしいかと」

と、目線の先にあつたスカイブルーのものも取り出した。

それにもしても、体型がわかりにくい着物を着て車いすに座つたま

まの私を見て、どうして即座にサイズが判る？

「それでいいのか」

とマイケルさんが聞く。まあ、男の人は女人の服になんか興味ないもんね。私はそれには答えず、

「うーん……」

と言いながらプライスタグを探す。見た目からして、私が普段バーゲンのワゴンで漁っているような奴の3倍？ 5倍？ もつとかなと思いつつ。

だけど、残念ながらタグは外してあるのか、はたまた最初からこんなどこに用意するものにはついていないのか見つからなかつた。しつこくプライスカードを探し続ける私に、

「決まらないなら、両方買えばいい」

マイケルさんはこともなげにそう言った。折角私はどちらが安いかで品定めをしてるつていうのに、あなたはその努力をムダにするつて言つんですか？

大体、私はちゃんと着物を着ているんです。新たに洋服を買ってもらう必要性を感じません。しかも、こんなフランスだかイタリアだかわからない高級ブランドの服、買つてもらう謂われはありません。

だけど、私は声高にそのことを言つことができなかつた。ここにいるマイケルさんは、何だかさつきとは別人かと思うくらいに顔つきまで違つてゐるし、なんだかんだと言つてもここまで来てしまつた手前、私がギャーギャー騒いだらマイケルさんに恥をかかせてしもうような気がしたからだ。

結局、

「お嬢様はお色が白いですから、この方がお顔映りがよろしいかと」という和光さんのトークに押し負けて、エンジ色に決定。男性陣にはしばしご退出願つて、私はそのパンツスースに着替えた。

ただ、その時、ぜんぜんそれまで話題にもしていなかつたファンデーション（ブラ・キャミソール）までコーディネートして差し出

されたのには、驚きを通り越して寒氣すら感じた。さすがデパートの外商員、怖そるべし。

もちろん、そのサイズがブラに至るまでジャストフィットだったのは言うまでもない。

キ、キャラ違つたですけど……（後書き）

病院を出た途端、人が変わってしまったような武君。

さて、その真意は？

実は国際級の犯罪者？

「あらがとうございました！」

最初に応対してくれた人はもちろん、和光さん、中村さん、果ては呉服部門の人まで深々とお辞儀する中、マイケルさんの車は駐車場を滑るように走り出した。そして、そこを出てしまはらく一般道を走つた後、はあーっと大きく息を吐いた。そして、

「素敵だ。本当によく似合つている」

と田を細めながら言つてから、ふと吹き出した。それ見て、私は、

「ウソつき」

と言つてマイケルさんを睨んだ。

どうせ本当は全然似合つてないって思つてるんでしょ。解つてしまよ、チビ（それでも同世代の中では、そんなに低くないのよ）で童顔の私には、こんな大人のパンツスーツなんて似合いませんよーだ。するとマイケルさんは慌てて、

「ウソじやないさ。もちろん、今まで着てた着物も本当によく似合つていたけど、何で言つのかな……落ち着きすぎてるつて言つのかな」

と取り繕つ。でも、それつて暗に私が童顔だつてことを肯定しだけ。フォローに全然なつてしません！ 私の表情が硬いま返事もないでの、マイケルさんは、

「『めん』めん、笑つたちやつたのは更紗ちゃんのせいじゃないから。僕、実はあそこ苦手なんだよね、ほんとデパートつて疲れる。でも、女性用の服を売つてゐるといへんて他には知らないしさ」と言い訳を始める。

「苦手なら行かなきやよかつたぢやないですか。婦人服を売つてゐとこなんて、デパートじやなくとも、それこそ上野にだつて、浅草にだつて、巣鴨にだつてありますよ」

それにデパートでだつて、あんな外商みたいなとこじやなきや、も

つと買いやすいですよ。でも、マイケルさんは、私の台詞の若干の棘にも全く気づかず、

「そりやあるだらうけど、僕、女性の服なんて買ったことないもんでも、更紗ちゃんってす」によね。あの着物、収納用の紙だけもらって、たつたと自分で畳んじゃつ」

と、暢氣に私のヨイショを始める。

「畳紙たとうがみです。畳む紙つて書いて畳紙」

マイケルさんみたく、半分イギリスの血は入つてませんからね。100% ネイティブ日本人だし、呉服屋の孫娘をなめんなよ、小学生の時の浴衣から畳み方はママからじこかれてるんだから。

『きちんと畳んでおかないと、着物の価値が下がる』

つて、そりやもう煩いのよ。マイケルさんは、それを聞くと、

「へえ、畳紙つていうの。畳う紙、で畳紙。たうしとは言わない。あ、そうか、『し』つて音読みだから……

あ、じゃあ、こんな展開なんかも面白いよね」と、ぶつぶつと訳の分からないことを言い出し、

「ねえ、更紗ちゃんこれからカラオケ行かない？ ネッカフのペアシートじや、更紗ちゃんはやることないだらうし、変にパソ使うと足づくかもしれないもんね」と私をカラオケに誘つた。そう言えば、マイケルさんは何かから逃げてたんだつけ。

でも、ネットカフェのパソで足がつくつて何。実は国際級の犯罪者か。あ、だからデパートで普通に買いや物できなかつた？ いやいや、国際級の犯罪者は外商の「ネとか持つてないでしょ。

私がそれに返事しないでいると、しばらくしてマイケルさんはある有名なカラオケボックスのチーノ店に車を停めてダッシュボードを開けると、

「更紗ちゃん、これ持つてくれる？」

と携帯ゲーム機のようなもの（だけど、ケースがそれっぽくなかった）を取り出して私の膝に乗せた。そして、もうそれがお決まり事

のようにお姫様だっこすると、そのカラオケボックスの中に入つていった。

実は国際級の犯罪者？（後書き）

武君……うん、年齢詐称という意味では犯罪かもですが、国際級ではありません。

ちなみに彼が更紗ちゃんに渡したのは、私も使っている『アレ』です。

不思議なカラオケボックスの使い方

マイケルさんはとりあえず私をその辺の待合い用のいすに座らせ、手続きをした。ちゃんとカードを出しているところを見ると、ここ（あるいは系列店）の常連らしい。確かに、声は高めだけど、悪くはない。だったら歌うのは……洋楽なのだろうか。だとしたら、私はやっぱり退屈で寝てしまいそうだ。

それで案内されたのは、入り口手前から三つ田の「ぐく普通の部屋」。「VIPルームじゃないんですね」と言つ私に、

「VIPルームが良かつた？ 一人ならここだつて充分広いし、あつちのソファーは柔らかいから、足、きついかもしれないよ」と言うマイケルさん。さりげなく足を気遣ってくれるのは嬉しかつたけど、VIPルーム利用したこと、やっぱりあるんかいっ！ と、関西のお笑い芸人さんみたいなツッコミを心の中で入れる。

マイケルさんは、私からさつきの携帯ゲームもどきを受け取ると、「更紗ちゃん、何でも良いから歌つてて。あ、おなかが空いてるんだつたら、好きなもの注文してくれて良いよ。僕用にカフェオレも注文してくれると嬉しいな」

と言つて、携帯ゲームもどきのケースを開く。中身は、キーボードが折りたたみになっている極小サイズの、パソコンだ。マイケルさんは起動するとすぐ、

「これ、フラーさんの回だ」

と満面の笑みで訳の解らないことをつぶやいて一心不乱にパソコンのキーをたたき始める。私はリモコンでとりあえずマイケルさんのカフェオレと、自分の分のミルクティーを注文するが、そこで動きが止まる、何を歌つていいのかわからない。それを見て、「あれ、更紗ちゃん歌わないの？ カラオケしない人だったのかな」

だつたら、ネックカフHとあまり変わらなかつたかなと、マイケルさんが申し訳なさそうに言つ。

「い、いえ。そんなことないですよ」

むしろ、学生時代の女友達とは今でもよく行くほうだ。ただ、今はもう大抵子持ちになつて、子連れでくる彼女らとは……いやそうじやなくとも、昔から歌うのはコアなアニソン。とてもマイケルさんが知つてゐるとは思えない。私がもじもじしていると、マイケルさんは、

「いつも歌つてる曲でいいんだよ。普段はさ、一人でそのまま流してBGM代わりにして書くんだけどき、折角歌える人がいてくれるんだもの。僕、更紗ちゃんの歌、聞いてみたいな」

小首を傾げてさらっととんでもないお願ひをする。仕事の書類だか何だか知らないんですけど、マイケルさん、会員証まで作つてそんな寂しい使い方してゐるんですか？ それに頼むから、その破壊力満点の笑顔は止めなさい、破壊的な笑顔は……つて、一体マイケルさんに何を破壊されるんだ？ 私は、

「あ、いえ、その……」

と、意味のない言葉を繰り返すしかなかつた。すると、マイケルさんは（自分がそのハードルを上げてるとはついぞ気づかず）軽くため息をつくと、

「ま、いつか。じゃあ僕が好きな曲をBGMで何曲か入れとくから、その間に決めといて」

と言つて、選曲用のタッチパネルをとつて、IDとパスワードを入れた。BGMで歌つていないとか言つけど、相當使い慣れているぞ、こいつ。

そして、私は彼が入力を終えて表示された曲名を見てまたびっくり。

「えつ、『月夜の伝説』……」

思わず曲名を口に出してしまつたほどだ。そ、それって、もしかして、いや、もしかしなくてもある大ヒットアニメ、「ビューティー

戦士ムーンライトレディ』の。しかも、第一作目の劇場版エン『ディングテーマじゃないの！』どこからこんなマニアックな選曲が。……いや、私も大好きで絶対に一回は歌う曲だったりするんだけどね。よもや、天使顔のハーフ男性から出てくるラインナップとは思わないじゃない。

「更紗ちゃん、知ってるのこの曲…じゃあ、歌って歌つて！ やつた、この曲歌つているの聞くのは、CD以外では初めてだよ…！」なお悪いことには、マイケルさんの耳は私が曲名に反応したことを見つかり捉えていて、喜々として私に歌うことを強請る。その様はまるで幼稚園児が先生に絵本を読めと言つてるかのよう。どうしようかな……

ええい、歌つちゃん！ もう、足挫いた時点で、一番格好悪いと見せちゃつてるんだもん。それに、この曲なら歌詞のテロップを見なくとも歌えるし。私はマイクをひとつかんで、早速流れてきたスローバラードを歌つた。

歌い終わった後、マイケルさんはすゞい勢いで拍手をした。

「更紗ちゃん、上手いよ。CDみたいだつた。僕、もっと聞きたいな」

と真っ赤な顔でまくし立てた言葉も、歯の浮くような台詞なのに、マイケルさんが子犬のような瞳で言うので悪い気はしない。何を歌おうかと思っていると、

「ねえねえ、じゃあ、この曲は知ってる？」

と、マイケルさんがまた履歴から一曲入れた。それは『GOLD』と言つ曲で、某公共放送の魔法少女アニメの、3番目のオープニングテーマだ。私は返事の代わりに、マイクを握つた。

それから2曲ほどはマイケルさんが入れたけど、後は私がタッチパネルを取り上げて自分で入れて歌いまくつた。マイケルさんは、「うわっ、『雲へ……』！」それ、「マリオの白い雲」の主題歌だよね。更紗ちゃんもマニアックだね。「子供名作劇場」で、唯一原

作を読んだことがなかつたし、設定何気に暗かつたじゃん」「など、その一曲一曲すべてに反応した。けど、どっちがマイケルなのよ、その言葉そのまま返すよ。（作者注・五十歩百歩だと思いますけどね）

マイケルさんは、私の歌にそつやつて「メントを差し挟みながら、滑らかにキーボードを操つていぐ。

そして……

「終わつたあ～、更紗ちゃんありがとう。助かつた。おかげでものすごくしゃくしゃくと書けたよ」

と言ひながらマイケルさんが大きく伸びをしたのは、三杯目の飲み物のウーロン茶も飲み終わつて、そろそろ本格的に声が枯れるかもという2時間半後のことだつた。

マイケルさんは軽く欠伸をして、チササイズのパソコンの電源スイッチに手をかける。私は何となく覗き込んだディスプレーに現れた終了画面に目を瞠つた。

「じ、自動戦士バンタム！？」

それは、私でも知つてゐる往年のアニメ、「自動戦士バンタム」の「ロマ」だつた。その後、設定資料めいたモノが一瞬映つて電源が切れる。徐にマイケルさんがパソコンのふたを閉めると、そこには「バンタム」のロゴがしつかりと入つていた。ひえーっ、「バンタム」仕様のパソコンなんて始めて見た。

「バンタム知つてるの？ オンエアされた頃はまだ生まれてなかつたんじゃない」

すると、マイケルさんが驚いてそう聞く。

「リアルでは見てないですけど、何度も再放送しますから」

そうよ、こんな国民的なアニメ、知らない方がおかしい。（作者注：それは更紗ちゃんもアニメオタだからだと思いますけど）

「僕、ロボットアニメとか基本的にあまり好きじゃないんだけど、これは別。ものすごく人間がちゃんととかかれてたから」

マイケルさんは照れながらそう言つた。そして、少し間を空けて、

「……大好きなんだ」

と言った。私の胸はそれだけで跳ね上がった。絶対にそれは、私じゃなくて「バンタム」のことなんだけれど。

今日のお見合い……マイケルさんだったら良かつたのにな。そしたら、私もあんな風に逃げ出したりしなかつたのに。

「ま、ここにいるのも何だし、食事に行こうか。更紗ちゃん飲み物ばっかで何も食べてないから」

と言うマイケルさんに従つて、と言うか依然歩かせてもらえない私はそこに選択肢はなく、マイケルさんは私にまた「バンタム」パソコンを渡すと、私をお姫様だっこしてカラオケルームを出た。だけど、その足がエントランスにたどり着く直前で止まる。

「あーあ、見つかっちゃった……」

と小声で囁くように言うマイケルさんの目線の先には、彼のことを睨む、年は25? 30? 判らないけど、彼よりも背の高いイケメン男性がいた。私はそのイケメン男性の、

「親父、そう毎回毎回逃げてんじゃねえ。こつちは折角のたまの休みなんだぞ」

という台詞に固まつた。

あ……こんなに大きなお子さんがいるんだ。

そりゃそうだよね。こんなに素敵な人なんだから……

不思議なカラオケボックスの使い方（後書き）

「」でのアニメタイトルと、曲名はそのまま出せないので伏せ字にせず、実在のモノをもじつてあります。

さて、皆さんには元のアニメが何だか分かりますか？（そんなもんどうでも良いくつて？）

でも、「自動戦士バンタム」って弱そ～

ちなみに私が持っている『アレ』もガ○ダム仕様です。この原稿も『ソレ』で書きました。（ははは）

マイケルさんの家族

逃げ回っていたマイケルさんを捜していたのは、彼の息子さんだつた。マイケルさんはプリプリ怒つてゐる息子さんに、「だつて、じつとしても展開が浮かばなかつたんだもん」と、小さな子のように、口をとがらせて答える。息子さんは、「おまけに他人様怪我させてあちこち連れ歩くなんざ、どういう見なんだよ。すいません、義父がおとう迷惑をおかけしまして。あ、俺はこのボンクラ親父の息子で、幸太郎と申します」と、マイケルさんにだつこされたままの私にそつと挨拶した。

「違うよ、幸太郎君」

「何が違うよ」

「違います！ マイケルさんは私が足を挫いて動けなくなつているのを助けてくださつて、親切に病院に連れて行つてくださつただけです」

マイケルさんに怪我をさせられたなんてとんでもない！ これは、正真正銘私が一人で転んだんだもん、情けないけど。

「ま、病院は良いとして、そのあとデパートで服買つて、ここに来る必要があるか？ おかげで、あのデパートならこじだつて渡りを付けられたんだけどさ」

「あ、デパートでバレたんだ。しまつた、なら更紗ちゃんの言つたうに巣鴨に行けば良かつた」

「へつ、巣鴨？」

デパートで足がついたと聞いて、マイケルさんはそつと舌打ちする。でも、巣鴨と言つと幸太郎さんは驚いた顔をした。

いや、私は別に巣鴨に行きたかった訳ぢやない。もっと庶民的なところでお買い物できないかつて言つただけだ。

巣鴨に素敵なお店がまったくないとは言わない。だけど、ジモティージやない私やマイケルさんにそれを見つけられるかどうかわか

らないじゃない。

「あそこから一番近いなじみのボックスつたら、いいだろ? 女連れならどつかにしけこんだのかもとも思つたけど、店長から連れの女性が怪我してゐるって聞いてたから、親父の性格じゃそりやないなつて思った」

続いて幸太郎さんはマイケルさんをここで見つけた根拠を説明する。あの人、偉そうなと思つてたけど、やっぱり店長だったのね。それにしてもしけこむつて……か、顔が熱い。

「お持ち帰りだなんて、僕はそんなことしないよ。幸太郎君とは違うんだから」

マイケルさんもムキになつて反論する。だけど、

「ひつでえ、人が血眼になつて探してたつてのにその言種はねえだろ。んなこと言つんだつたら、奏禁止令発動するぞ」

マイケルさんは幸太郎さんの言つ、『奏禁止令』を聞くとびしつと固まつてしまつた。そして、

「えーっ、かなちゃん禁止令は勘弁して。かなちゃんのあのかわいいほっぺをぷにぶにするのが今の僕の生き甲斐なのに。はい、ごめんなさい、僕が悪かったです」

と、ペコペコ謝りだす。それを見た幸太郎さんは

「解りや、良い。解りや」

と、したり顔でそう言つて笑つた。

だけど、そんな微笑ましい親子（ちょっと立場が逆転してゐる感は否めないんだけど）の会話に、私の心は冷えていった。

会話の内容から察するに、幸太郎さんの言つ『奏ちゃん』は彼のお子さん。つまり、マイケルさんにはお孫さんにあたるのだひつ。そして極めつけに、

「なあ、これからしばらくためないでくれよな。来月は結婚式なんだぜ。父親不在の結婚式なんてしゃれになんねえ。

それでも、女どもつてどうしてああ、結婚式でもりあがるかねえ。英雄や奏の服にまで大騒ぎだしさ、お袋なんて、当田の薫の支

度ができないってぶーたれてやんの。新郎の母親が新婦の支度ができるかってえの」

と、幸太郎さんの口から、彼の母親（つまりマイケルさんの奥さん）の話が出てきて、

「わざや鮎さんはプロだからね。櫻原が絡んでなきゃ、もう少し彼女の自由させてあげるんだろうナビ」

マイケルさんは済まなそうに幸太郎さんにそう返す。その口振りでマイケルさんが奥さんのことを見されているのがしつかりわかつてしまふ。幸せな幸せな家族の情景。そこに私が入る隙は一ミリもない。

そうだよね……一人寂しくカラオケをBGMD代わりにしながら仕事してるからと言つても、だからってそれが独身の証明にはならないのだから。

……つて、私何を期待していたんだろう。マイケルさんは今日会つたばかりの人、名前以外お互い何も知らないのに。

マイケルさんの家族（後書き）

幸太郎登場で、更紗ちゃんは一気に誤解の嵐。一気に屋上まで上つてしまいそうな勢いです。

マイケルさんの仕事

「つと、こんなところでムダ話してる間にひきやつちやと書いてもらわなきやな。えーと……ところであなた、何でお名前でしたつけ」
ちょっと脱線しかかっていた話を元に戻すように、軽くため息をはいて、幸太郎さんがこう言つた。

「月島……月島更紗です」

やだ、幸太郎さんにだけ挨拶させといで、自己紹介がまだだつたわ。
「じゃあ、月島さん。まだお時間大丈夫ですか？ 大丈夫だつたら、俺の方の車に乗つて欲しいんですけど、親父の人質として」
人質つて、何？ その物騒な言い方。さっきから幸太郎さんが『書け、書け』と言つところをみると、マイケルさんは作家さんか何かなのかな。

「私は……帰ります。家族が心配するんで」

それに、今日あつたばかりの私になんて、人質効果なんてありませんよ。

「ねえ、更紗ちゃん、逃げてるつて言つたよね。家に帰つて大丈夫なの？」

そしたら、マイケルさんが、そう言つて私を心配してくれた。

「ええ、マ……母とケンカしただけですから」

そう言いながらママの顔を思い浮かべる。うつ、怒つてんだろうなママ。帰りたくないと言えば帰りたくないよお。でも、ママが騙してお見合いなんかするのが悪いんだからね。

「えつ、お母様とケンカしたけだつたの？ ジャあ、急に更紗ちゃんが消えて、お母様心配してるかな。ホントいきなり連れ出しちゃつてごめん、元のホテルまで送るよ」

でも、私がママとケンカしただけだと聞くと、マイケルさんは蒼くなつて、土下座しそうな勢いで謝る。マイケルさんが悪いんじやないよ。逃げたいつて言つたのは私だもの。

「そりだよ、バカ親父。下手すりや誘拐だぞ。心配するな、円島さんは俺が送つていく。だから、親父はさつさと続きを書くー。」

「ヤダ！ 更紗ちゃんは僕が送つて行く。更紗ちゃんのお母様に僕がちゃんと謝らなきや」

「何だだこねてんだよ、会社俺に投げてまでやりたかった仕事だろっ！」

私を送ると譲らないマイケルさんに、幸太郎さんはびしそう言った。それにしても会社を投げてつづ……マイケルさんやつぱり社長さんだつたんだ。それも結構大きい会社じやないだろうか。だったらあの店長の態度も解る。

「ちょっと待つてよ。原稿ならちやんとできてるよ。わざわざ、いいで書き終えたから。

更紗ちゃん、幸太郎君にそのバンタム渡して「私はそう言われてあわててバンタムを幸太郎さんに渡した。私は行きと同じように既に待合い用の椅子に座っていたんだけど、バンタムは握つたままだつた。幸太郎さんはそれを受け取るとホッとした表情になつて、

「それを先に言えつて。で、どうすりやいい？」

とマイケルさんに聞いた。

「マイクロSDだとどつか行つちゃいやすいし、何が入つてるか書きにくいで、普段はUSBメモリーに焼きなおして渡してるんだけど……」

とUSBメモリーをポケットから取り出す。

「さつき書いたからまだ、最終話は入れてないんだ」「最終話を一旦ドキュメントにぶつ込んで、ここに落としゃいいんだろう？」

「うん、でもパソコン持つて歩いてないよ」

「俺の車に乗つてるよ。OKわかつた。んじや、親父は親御さんで検索願いを出されない内に早く行つてこい」

すべての段取りを聞き終えると、幸太郎さんはそう言つて、親指を

前に立てて笑つた。

「うん、ありがとう。じゃあ、お願ひね」

「じゃあ月島さん。俺はこれで。親父を頼みます」

幸太郎さんはそう言つと、感涙もでの抱きつかんばかりのマイケルさんをあつせり振り払つて、とつととカラオケボックスを出て行つた。

でも、幸太郎さんが最後に言つた『頼みます』ってなんだろう。幸太郎さんみたいな立派な息子さんもいて、（たぶん）すてきな奥さんもいるのに、何を私に『頼む』必要があるの？

マイケルさんの仕事（後書き）

はい、武君の仕事がバレました。だけど、家族のことはまだ絶賛誤解中。

ホントは丹島家まで着く予定でしたが、時間切れ（リアルの）で次回に続く……

傷付いた瞳

「じゃあ、送つていいくよ。あのホテルでいい?」

幸太郎さんの『頼みます』発言に、口悪いMAXになつていていた間に、マイケルさんはカラオケの支払いを終え、私を再び抱き上げた。

「いえ、もうさすがにもうあそこにはいないと思います」

それに対し私は首を振つてそう答えた。ホテルのラウンジになんてそう長い時間いられる訳がない。

「とにかく、どこにいるか電話してみたらい?」

と言つてくれるマイケルさんに、私は、

「今日は携帯を置いてきたんです」

と答えた。

実は着物用のバッグは小さいし、旦那持ち子供持ちの友達たちが休みの日に連絡なんてしていくことなんてないから、携帯置いてきたのよね。

「じゃあ、僕のでかければいいよ。わざと心配されてるから。それで怪我したことまず話せば、少しは怒られるのもマシかもしない」

いきなり現れるよつずつといこみ、とマイケルさん。

「でも、携帯はメモリーに頼つてるから番号なんて覚えてないです」「じゃあ、自宅にかけて。そこそこいらっしゃらなかつたらホテルに戻るつ」

戻るつ

それで私は、おそれおそる自宅に電話した。そしたら、いつもはなかなかでないのに、電話はたつた3回でつながった。

「はい、丹島です」

ママの声が少しづつわざつしている。きっと知らない電話番号だからだ。いつもなら知らない（しかも携帯の）番号の電話こな、ママは怖がつて一回田から出ないのだ。

「……私……」

「更紗ちゃん？ 更紗ちゃんなの！？ あなた、無事なの。元気でいるの？」

ママは私だと判ると、矢継ぎ早にそういう置みかけた。その口調は怒りていらない。心底心配してゐるつて感じだ。

「私ね、ホテルで足挫いちゃつて」

「ホテル足を挫いた？ でも、ママホテル中探したのよ」

「うん、それで偶然通りかかった友達が、病院に連れついてくれたの」

「じゅあ、今は病院？ どこのの、正巳が來てるから迎えに行かせるわ」

「正巳が來てるつて？ 正巳といつのは私の二つ上の弟で、一年半前、姉の私より先に結婚した。

それに、あいつは絶対に私を姉だと思つてない。いつも『更紗』^{まさみ}って呼び捨てだし。

「つうん、その人がつこでに家まで送つてくれて。もう、車にも乗つてるの」

ああ、マイケルさんの車で送つてもらえて良かった。じゃなきや、今日も私を見つけた途端、指さしてさんざんにバカにされるに決まつてゐるわ。

「やつ、ならいいで待つてればいいのね。もひ、本当コレジなんだから」

そう言つたママの声ちよつと涙声で、私はがんがん怒られるよつべつときひやつた。

「今日は、……『めんね。あと、大変だつたでしょ』

おかげで、素直にママに謝れた。そしたらママは、

「良いわよ。ママが更紗ちゃんに内緒であんなお話進めたんだし、あなたが怒るの無理ないわ。

それに渋井さん、バツイチだったのよ。子供までこるつて言つんだ

もの。きっとバレなきやうと隠し通すつもりだつたんだわ。

騙されたと思って、ママもテープル叩いて帰つてきちゃつたわよ。

ホント、更紗ちゃんが逃げ出してくれて正解

と、あの後の顛末を語りだす。

えつ、あの人バツイチだつたの？ ふーん。私はそれを聞かされてもべつに衝撃は受けなかつた。まああの人なら奥さんも逃げだすだろうなあなんて、妙に納得しちやつたし。おかげで、怒られずに済んだのだから、むしろラッキーかもしれないと思つたくらいだ。

「混んでなければあと15分くらいでつくから」

私はそう言って電話をきつた。

「どう、お母様怒つてなかつた？」

「ええ、とつても心配してました。電話ありがとうございます。かけてよかつたです」

「だろ？」

そう言いながらマイケルさんは、今スマホに入れた電話番号を今度はナビに入れて我が家を検索する。出てきたデータを見てマイケルさんは、

「良かった、この辺なら分かるよ。着いたら声もかけないで病院に連れていつた」と、一緒に謝つてあげるね」と言つた。

「じけらの方がお世話になつたのに、そこまでしてもらつたら悪いです」

結局、病院から服にカラオケ代まで全部出してもらつじやつたもんね。すると、マイケルさんは、

「だつて、僕また一緒にカラオケ行つてほしいから。更紗ちゃんのお母様に嫌われたらもう行くなつていわれちゃうでしょ。じゃあ、これ僕の携帯番号。家に帰つたら、更紗ちゃんの携帯から電話して。僕が数字で入力するどうしてか番号間違つちやうんだよね。だから、更紗ちゃんがかけてくれたらそれ、登録するから」

「二二二二」とやう言つた。でも小学生じゃあるまじや、ママに言われたからつてカラオケに行けなくなる歳でもないんですけど。

やうね、お子さんはもちろん、お孫さんまでいるマイケルさんにとつては、私なんて小さな子供とそんなに変わらないかもしねない。だから奥さんがいても簡単に誘えるんだ。

急に黙ってしまった私に、

「どうしたの、長い時間振り回して足痛くなっちゃった?」「心配げにのぞき込むマイケルさん。私は黙つて頭を振つた。

妙な沈黙が流れる中、マイケルさんの車はウチの家にたどり着いた。あ、家の前に誰かいる。玄関先に仁王立ちしているのは……うわっ、正巳だ。なんでママじゃないのよ。

正巳は、車から降りると当然のようすに助手席を開けて私を抱き上げたマイケルさんを睨み上げると、

「あんた誰? 一体、更紗のなんなのさ」

言つて、私を強引にマイケルさんから取り上げた。

「ま、正巳! 何すんのよ! ! !

正巳危ないよ! 私、物じやないんだよ、生身の人間なんだからね。落とされたらさらに怪我するじゃないのさ! ! ! マイケルさんは、

「櫻原武と申します。今日はお声もかけずに更紗さんを連れ回したりして、すいませんでした」

その言葉にそつと置いて、正巳に深々と頭を下げた。その時、

「まあまあ、今日はどうもありがとうございました。どうぞ上がってお茶でも飲んでください」

遅ればせながらママが慌てて走り込んできた。ママを見るとマイケルさんは、

「いえ、車ですし、これから仕事先に顔を出さないといけませんので今日はこれで失礼します」

と言つと、また深々と頭を下げて助手席のドアを閉めた。そして、

車に乗る直前、

「更紗ちゃん、今日はありがとうございました。ホントに楽しかったよ。
あ、それからわざわざ渡したメモださど、やつぱり捨てておこしてくれ
る? それじゃあ

と言つたのだが、その表情は泣きそうなもので傷ついた顔をしてい
た。やつき渡したメモって電話番号のことだけね。どうしていきな
り捨てて……、ビックリして返す言葉も出せないまま、マイケル
さんの車はあつとこに向かって走り去ってしまった。

傷付いた瞳（後書き）

更紗ちゃんに続いて、正巳君も武君も誤解の嵐。誤解スパイクirlになつております。

次回、更に思つてもいなかつたことが更紗ちゃんを襲います。

男が女に服を贈る理由（前書き）

ああっ、切れない……

男が女に服を贈る理由

「更紗、重つ。こつまでも抱きついてないで下りろよ」

「言われなくても、下りるわよ。あ、ママ手を貸して」

マイケルさんが走り去ったとたんそう言う正巳を睨みながら、私はママに手を貸してもらつてやつと地に足をつけ、一人に支えながら家に入った。とりあえず一番座りやすい椅子のあるダイニング向かいながら、

「正巳、マイケルさんに何あんな失礼なこと言うのよ」と正巳に文句を言つ。あんたは私のなんだって言うんだ、弟でしょうが。いまさらあんたに敬つてもらおうなんて思つてないけど、せめて人のことを持ち物みたいに扱うなつて言つの。

「更紗こわびうこうつもりなんだよ。あんなやつがいるんだつたらなんで見合いなんてしたんだ」

そしたら正巳はそう反論した。

「それはママが勝手にセッティングしたんだから。私のせいじゃないわよ。それに、マイケルさんはそんな関係じゃないわ」

それに対し、私はむくれながらそう答へ、

「そうなのよね、更紗ちゃんに内緒でお話進めちやつたのよ」とママがちゃんとフォローを入れてくれたけど、それでも正巳は納得しない。

「マイケル？ 僕には武たけつて言つてたぞ」

あ、そうか。マイケルさんは日本名を名乗つたんだつけ。

「マイケルさんのママはイギリス人だもん。英名も持つてんの」私はそう説明する。知つてるのはとりあえずそれだけだけど、それだけでもマイケルさんと私が以前から知り合いつぼく聞こえるから不思議。それを聞いた正巳は、

「へえへえですか。けどな、あいつさつき着いたとき、更紗を待つてた俺をものすごい眼でじらんでたぞ。あれは完全に飢えた雄

の眼だね。更紗は天然だから氣づいてないだけや」と面倒臭そうに言つ。でも、飢えた雄の目つて、何。それはあんたの目が腐つてんでしょうが。

「そんなことないつて」

そつよ、マイケルさんにはちゃんとすてきな家族がいるもん、悲しいけど。その時、改めて私を見たママがいきなり素つ頓狂な声を上げた。

「あら、更紗ちゃん、着物はどうしたの?」

「えつ、着物? あ、マイケルさんの車の中だ。病院の後、着替えたの。足が不自由だと着物じゃつらいいだりひつて……」

それを聞いた正巳の目が怪しく光る。

「あいつが買つたのか」

と言われて、ちょっと悪寒が走つた。

「う、うん……」

私は、ぎくしゃくと頷く。

「ほりみろ、あいつ更紗落とす氣満々じやん」

それを聞くと、正巳はにやっと笑つてそつと口を開いた。

「どうしてよ」

「男が女に服を贈るのは脱がるのが目的だつてのは、心理学では常識だろ」

「そんなの統計上の問題でしょ。すべての人に対するまつて訳じやないわ」

「いや、俺なら間違になくそれ目的だぞ。それに、この服どうみてもブランドの一点物じゃないか」

う、鋭い。まさしくブランドの一点物ではあるんだけどね。男のあんたが、なんでそれを知つてんのよ。

そうか、あんたは会社のかわいい部下の退路を用意周到に絶つて囲い込むようにゲットした腹黒上司だもんね。それくらいはリサーチしてあるってことか。けど、それがすべての男の常識だとは思わないでね。マイケルさんはお店を知らないから外商買いなんだか

「ねえ、更紗ちゃんそれで着物はけちゃんと畳んであるの？」

そこでママが私たちの会話にそつ割つて入る。

「テパートでちゃんと畳紙もらって、畳んであるわよ
私がそつ言つとママは、

「それなら良いわ」

とホツと胸をなで下ろす。どうでも良いくけど、拘るとこやし？？

「つたぐ、更紗の貞操の危機だつてのに、何をのこかなことを…
と正巳も頭を抱えている。

「貞操の危機も何も、それでまとまってくれるのなら、ここんじや
ない。相手の男性が救世主に見えるつてもんだわ」

それに対して、ママははしゃりとそつ言つた。天使顔だけに救世主
つて……何気に酷くない？

「ま、とにかく飯にしてましょ。更紗ちゃん、マイケルさんには連
絡着こんでしょ。着物のこと、食べたら電話しておきなさいよ。正
巳くんも食べるでしょ？」

と言つと、正巳は、

「こや、俺は美奈子がちゃんと用意してただろひし帰るよ。
あー、一日ムダに振り回されたぜ」

と言つてとつと愛妻の待つ血をへと帰つていつた。おお、おお帰
れ帰れ、幸せ者めが！

ここの後パパが仕事（パパの仕事はカレンダーに関係ないシフト制）
から帰つてきた。ママはここのお見合いをパパにも言つてなかつたら
しく、（パパに言つたら絶対に反対するだろひから）パパには私が
お出かけした先で怪我をしたことにした。たぶん、ことの顛末を正
直に話せば、きっと正巳と同じかそれ以上の反応をするだろひから、
私にとつてもその方が都合が良かつたし。

そして、ここの日、ここの足で一階に上がつても下りるのが大変だろ

うところ」として、私はソビングのソファーベッドで寝るところになつた。

夜中、慣れない空間で眠れない私は、マイケルさんの携帯番号を見つめながらため息をついていた。確かに着物は返してもらわなきゃいけないんだけど。でも、

『渡した紙、捨ててください』

とこう言葉と、あの傷付いた様な瞳を思い出すと、私はその夜、マイケルさんに電話をかける勇気はつこぎ持てなかつた。

……そしてその翌日……

「おい更紗、起きろ！」

私は朝6時、と叫ぶ正巳の電話に叩き起された。

「何なのよ、正巳」

「おまえ今、リビングだよな。今すぐテレビつけろ、4チャンだまあ、準備に時間がかかるけど、今日は病院に行ってから出勤するつもりだったから、もう少し寝ているつもりだったのに。そう思ひながらとりあえずママが枕元に置いてくれていたテレビのリモコンのボタンを押す。

私は、そこに映し出されたテレビのHンタメコーナーの話題に思わず息を呑んで固つた。

何故かと言うと、

『あのイケメン青木賞作家、市原健の熱愛発覚。怪我をした彼女を実家まで優しくエスコート』
という見出しの下、エンタメボードに、家の前で私をお姫様だつこしたマイケルさんの写真が掲載されたスポーツ紙が張り付けてあつたからだ。

男が女に服を贈る理由（後書き）

更紗を襲つたらなる試練は最後の『ワイドショ―』攻撃でした。

まあ、病院 デパート カラオケボックス 自宅と、結構派手に『イベント』ありましたからね、そりやスポーツ紙に撮られてもしようがないでしょう。

武君も遅咲きですから、自分が有名人だという自覚がなかつたりしますしね。

では、次回。

ああ、進まないつ

私は目の前のテレビで自分が取り上げられていることが信じられなかつた。確かにマイケルさんも幸太郎さんも原稿がどうとか言つていたから、マイケルさんは作家なのだろうと思つてはいたけど、青木賞を受賞しているような有名な作家さんだとは思つていなかつたから。

私のことももう調べられているらしく、『お相手は36歳。着物の似合う一般女性』というテロップが差し込まれている。ま、ウチの前で撮られているんだから、近所に聞き込みすれば、生まれたときから住んでいる私の情報なんて簡単に手に入るだろうけれど。

「つたく、芸能人なんだつたらあんな派手なことすんじゃねえってんだ」

と、まだ切つてなかつた電話の向こう側で正巳が舌打ちする。私はそれに、

「正巳、それを言つなら文化人だよ。それに、普段テレビになんか出でないから、自分がそんな風に取り上げられると思つてなかつたのよ」

と一応フオローを入れる。マイケルさんもたぶん、自分がこんな風にワイドショーを賑わせるとは思つていなかつたに違ひない。

そして、続々入つてくるマイケルさんの情報に、私は驚くばかりだつた。

何より一番驚いたのはマイケルさんが独身で、一度も結婚したことがないと報道されていたことだつた。じゃあ、幸太郎さんやアコさんの存在は？ 隠し子というには、幸太郎さんは堂々と親父呼ばわりしていた。

程なくして起きてきたパパがいつものように食事を済ませ、仕事にでかける。あ、ママは低血圧で朝起きられない人なので、夜の間に用意してあつたものを勝手に食べている。いつもなら私がご飯ぐ

らこはつこであるのだが、今日はそれができない。

そして、『じくふつうに出ていったパパが、10分ぐらいした頃、
ムツとした声で携帯から電話をかけてきた。パパは、出たのが私だ
と判ると、

「お前、作家の市原健じかはらたけるとつきあつているのか」

と言つた。でも、パパがワイドショーを見たときにはもう私の『一
ナージやなかつたのに、何でそれを知つてるの？』

「今、家を出たとたんにリポーターって奴だと思うが、『いつ知り
合つたのか』とか『結婚はあるのか』だと、しつこく聞かれたぞ。
それで、今駅について新聞を見た。

昨日はママと出かけたんじゃなかつたのか」

げつ、わつきのテロップを見る限り、私の素性もリポーターにはバ
レているのはわかつていたけど、まさか家まで張つてたのか。

「いえ……あの……その、ママとちやんと出かけたよ。それでさ、
怪我したときにな、動けなくなつてる私をマ……その人が親切に病
院に運んでくださつただけなんだ。ただ、それだけ。私も今テレビ
見てビックリしたとこ」

私はマイケルさんと云いそうになるのをすんでの所で堪えてそう説
明する。アブナイアブナイ……今親しげにマイケルさんなんて呼ん
だら逆効果だ。

「そうか、それならいいが、パパは15も年上の男なんぞ、いくら
賞を取つた作家でも反対だぞ」

パパは案の定、不機嫌な口調でそつまつて電話を切つた。
そうなのだ。42～3歳だと思つていたマイケルさんの歳は、実
際は51歳だという。

でも考えてみればそうだらう。私が思つていた40代前半だと、
幸太郎さんの正確な歳はわかんないけど、とんでもなく若いときの
子供になつてしまつもの。

それにして困つた。家を張つているとなると迂闊に出られない。

たとえタクシーで病院に行くにしても、だからこそ立つてしまつ。顔にぼかしが入つたつて、近所の人にはきっとちょんばれだ。

仕方ない、今日は休もつ。どうせ動かさない方が足のためにも良いのだから。ただ、何日も休めないだろうしな……

そんなことを考えていると、まだ電話が鳴つた。ディスプレーを見ると……良かつた、正巳だ。

「もしもし正巳？」

「更紗、家張られてるんだって？」

正巳も出勤途中なのだろう、がやがやと外の音が聞こえる。

「うん、そうみたい。どうして知つてんの？」

「父さんがこっちに電話してきた」

「パパが？」

「パパ、私だけじゃなくて、正巳にも電話してたの？」

「市原健つてどんな奴かって聞かれただけさ。なんこと聞かれたつて俺も知らないって答えるしかないけど」

それを言つなら、正巳どころか私だつてそうだ。もちろん正巳こは内緒だけど。

「けど、このままじやさ、病院どころか仕事にも行けないだろ。連絡先教える、俺がガシンと文句言つてやるから」

続けて正巳はそう言つたが、私は、

「いいよ、別に……」

と答えた。別にマイケルさんが悪い訳じゃないから。そしたら正巳が、

「更紗、着物のことは連絡したか？」

と聞いた。

「つうん……まだ」

「ちゅうどいい、怪我が治つて更紗が行くとしても、あいつが持つてくるとしても騒ぎになるだろ。だからそれも含めて俺が電話して取りに行つてやるから。ほら」

確かにもう田をつけられていのだから、私たちのうちのどちらか

でも動けばまた撮られてしまう確率は高い。度々報道されれば、マイケルさんとアコさんとの中にヒビを入れてしまうかもしれない。私が原因でそんなことになつてほしくない。私は、「解った、えっとね、〇九〇の……」と、マイケルさんのスマホの番号を正面に告げた。

熱愛報道（後書き）

あーあ、更紗ちゃん正巳君に連絡投げちゃいました。自分で連絡してれば誤解は解けたかも知れないのにねえ。

てな訳で、彼らの誤解スパイラルはまだ続くのでした。

ただ、助けられただけの……

正巳との電話を切つてから今度は私の会社に電話を入れた。

私が勤めるのは、作業ロボットを作っている会社。作業ロボットというと大手の企業が独自に作っているように思われるだろうが、実は割と小さな会社が手作業でということも多い。相手の一ーズをいかに形にできるか。それは施設の規模ではなく、開発者の発想能力に負うところが多いからだ。

工業高校の機械科を出した私は、そんなオーダーメイドな物づくりに惚れ込んでこの会社に入った。

だけど、だからと言ってロボットアニメはあまり見ない。小さい頃はともかく、少し大きくなつてからは特に。何故かといふとメイントークンを張るロボットたちは結局がっこ兵器として扱われていることがほとんどだからだ。

ロボットは人を幸せにするものじゃなくっちゃ。誰かが不幸になるような使い方は『彼ら』とってもかわいそうだと思つ。

そして、その台詞も実は社長吉田直也の受け売りだ。彼は私の遅ればせながらの初恋の相手。だけど、12歳も年上の社長に私が淡い思いを抱いたときには、既に奥様の由佳さんとの結婚が決まっていて、私はいきなり失恋してしまったのだけど。

「はい、吉田工作所です」

由佳さんがハキハキと明るい声で電話に出た。

「あ、由佳さん、月島です」

それに引き替え私の声はどよんとしている。足が痛いせいもあるけど、それだけじゃない。正直どう言って休もうか悩んでいる。納期の差し迫った仕事があつて、本当なら休んでいる暇などないのだ。

「あ、あのね……昨日、足怪我しちゃって……いま動けないんです。

今日……休ませてもらえないませんか

続いて、びくびくとそう切り出した私に、

「足怪我して動けないって、入院しちゃったの？」

由佳さんは驚いてそう聞き返してきた。

「い、いえ入院はしてないんですけど。昨日日曜日だったでしょ、まだ松葉杖がないんですよ。こんな足じや運転できないですし、ウチの母は免許持つてなくて」

と、私が由佳さんに事情を説明していると、

「月島、怪我したって？」

電話の声が急に社長に変わつて、

「月島、今すぐ着替えて出られるよつに準備しておけ」

社長がそう言つた。

「へつ？」

「俺が迎えに行つてやる

えつ、わざわざ？

「良いですよ。ミコートスの納期もうすぐでしょ？ 私にかまけてる間に動作確認しておいてください」

「だからだろうが。こいつは月島の女性的な発想のおかげでモノにした奴だ。月島が動作確認しないで、誰がやる」

確かにこの仕事は私が女としていつも疑問に思つていたことをふと口に出したことで一気に形になつた『子』だ。

「でも……」

「お前、怪我したといつてホントはサボりたいのか」「口」もる私に社長がちょっと怒つた様子でそう言つ。

「違いますよ。ただ、家の前今……」

だけど、そこで私ははたと困つた。マスコミが家に来てますとストレートに言つても、私は一般人。鼻で笑われそうだ。

「月島の家の前がどうだつてんだ」

その時私は川崎ブルージーンズの大ファンである社長が愛読しているスポーツ紙が今回熱愛報道を取り上げた「毎朝スポーツ」だということを思い出した。

「社長、今日のスポーツ新聞見てください」

「なんだ、藪から棒に」

「三面開いてください」

バサバサと耳元で新聞をめくる音がする。

「ん？ 釣りがどうかしたか。まさか、その下のH口い小説じゃないだろうな」

釣り？ ああ、社長本当に3面田を開いたのか。しかもH口い小説つて……そんなもん見せて何を説明するつて言つてますか。

「違います！ 裏の方、芸能欄ですよ」

「おお、ならそれを早く言え。なんだ、Tetraの武道館コンサートか？ 違う？ ああ、青木賞作家の熱愛報道つて奴か。それがなんだ」

「そのお姫様だつこされているのが私です」

「これが、月島？ 確かに言われれば似てないこともないな」

私は、怪我をして動けなくなっているところを助けられて家まで送り届けてもらつただけなのにスポーツ紙にとられたと、この写真の状況を搔い摘んで説明した。

「じゃあ、まだ表にリポーターがいるつてんだな」

「はい」

「由佳、俺は月島を病院に連れていくから

「外にはリポーターが張つてるんですよ」

それを聞いて私が慌ててそういうと、

「張つてるからつてどうだつてんだ。それは月島のせいじゃないだ

ろ」

と、社長が言つた。そりやそうですけど。

「あつちも仕事だらうが、こつちも仕事だ。堂々と出てくつやいいんだ。ただ、月島単独で行動するのは大変だらう。だから、今日は俺が行つてやる

そう言わればそうだ。何も、私が逃げ隠れする必要はないのだ。私は本当に怪我したところを助けられたそれに過ぎないのだから。

私は少ししてからやつてきた社長の車で家を出て病院に行き、松葉杖を借りて会社に出勤した。

病院に行っていた分、段取りがくるつていいつもより遅くなつたお昼休みにつけたテレビのワイドショード、マイケルさんが緊急会見を行つていた。私との関係を取りざたされて、「彼女が怪我をされたところを偶然通りかかり、車で来ていたので病院に連れて行って自宅まで送つただけ。恋人とかそういうものではないです」

マイケルさんは関係各所にファックスを送つて済む内容を、みんなの前に出て拳を握りしめて力説していた。でも、「本当に彼女とは何の関係もないんです。ですから、くれぐれも彼女の所には取材をしたりしないでください」

そう土下座せんばかりに頭を下げるマイケルさんの姿を見て、奥さんには誤解されて大変だったのかもしれないな思つた私は、これで良かつたと思いながら何となくもやもやしていた。

その効果があつたのかどうかは知らないが、雨が降つてきたこともあり、帰りは後輩の庄司君が贈つてくれたのだが、行きにはいた報道陣がもう見あたらなくなつていた。

そして、帰宅後、正巳から

「俺がガツンと言つてやつたから。なかなかまともな会見してやがつたじやん。これで更紗も安心だろ」と、言われたけど、それを聞いても私のもやもやはそれなかつた。

そうして、翌日は全くいつも通り（怪我しているから全くとはいえないのかもしないけど）の朝だった。でも、私にはそれがなんだか寂しかった。別に芸能人のように追いかけられたいわけじゃない。ただ、それが一度とマイケルさんと会えないんだだと改めて実感しただけだ。

「円島さん、今朝も芸能レポーターいたんですか？」

朝から無言で仕事を続ける私に、まだ見習い中の智くんがそう呟つた。

「ひ、ん、じ、う、し、」

「だつて、円島さんいつもなら誰が聞いてるわけでもないのに、作業工程を説明しながら、一一一二として仕事してるから。

それが今日はため息ばっかだし、なんか顔も変です」

「昨日櫻原さんが会見開いてくれたから、今朝は誰もいなかつたよ」智くんの答えに、私はムリに笑顔を作つて答えた。確かに、大好きな仕事だから社長にも『お前、作業てるときは気持ち悪いぐらい笑顔だな』と言われたこともあるし、段取りを口に出しながらやる方が作業効率が上がるのよね。にしても、『顔が変』って……何気にお酷い。

「お前な、先輩に言つて良いこと悪いことがあるだり」

その言葉に庄司さんがすかずかしそうに笑みをいれる。でも、智くんは、悪びれる様子もなく、

「じゃあ、顔が怖いって言えればいいんですか？」

と庄司さんに返している。たすが平成生まれと聞つのか何とこののか。

「お前な、機械いじるのより先に日本語もつと勉強しない」とこう庄司さんに智くんは

「へいへい」

と言いながら表の方に逃げて、ちょろりヒドアから首だけ出している。その様子がまるで叱られた犬みたいで、私は声を出して笑ってしまった。庄司さんもそれを見て、「しょうがねえなあ、あいつは。まあ、更紗ちゃんを笑顔にしたんだから、由としてやつか」そう言つて苦笑している。

「あ、どうも」

そんな智くんがドアに手をかけたまま頭を下げて、

「社長、お客様です」

と、大きな声で社長を呼んだ。でも、

「すいません、月島さんという方がここにお勤めだと思つんですが」という声が外から聞こえて、私を含めた作業場にいる全員の顔がこわばつた。

「あんたマスクの人？ だったら今すぐ帰んな！ 」
「うのを
プライバシーの侵害つて言つんだる」

智くんも一回は中へと導いた手を一杯に広げて私をガードしつつ、中の面々にそう尋ねる。その場にいた全員がその言葉に頷いた。

「違います。私は月島さんにこれをお届けに上がつただけですから」と、その人はそう返した。

「何だ？ それ」

智くんが胡散臭そうに荷物を見つめる。座っている私にはドアの外側にいるその人は全く見えない。でも、智くんの様子からして、宅配の業者さんではなさそうだ。

「一昨日、お預かりしたものですので、月島さんにお渡しいただければそれで」

続いてその人はそう言つた。一昨日と言えばあの「お見合い」の日だ。まさか、マイケルさんが着物を返しに来た？ 智くんが受け取るのを戸惑つていると、その人はその荷物を智くんの鼻先ににゅっとつけ

きだした。

「うへつ」

と智くんが後ずさりする。その勢いに任せて作業場に入ってきたのは……マイケルさんではなく、幸太郎さんだった。しかも、入ってきた幸太郎さんといきなり目が合ってしまった。

「幸太郎さん……」

「あ、月島さん。そこですか。昨日弟さんからお電話いただいたて、取りに来られるつてことでしたけど、何か双方に誤解があるみたいなんで、お話がてら私が伺いました。今お時間頂戴できますか」幸太郎さんは、あのときは打つて変わってすごく丁寧な言葉遣いだつた。そう言えば、幸太郎さんつて、マイケルさんの後を継いで社長してるんだっけ。

「誤解……ですか？」

双方に誤解ということは、私にもマイケルさん達にも誤解があるといふことだ。一体、何を誤解してると言つたんだろ？

「ええ、すいませんお仕事中申し訳ありませんが、月島さんをしばらくお借りします」

幸太郎さんは肯きながらそつと、奥にいる社長の所まで行き、「私、こういう者です」

と言つて、社長に名刺を差し出した。すごい、ちゃんと社長のところに行つちゃつた。庄司さんが年上に見えるから（実は社長の方が2つ上だけど）、初めてきた人はみんな庄司さんの所にいつちやうのに。社長が幸太郎さんの名刺を読み上げる。

「株式会社 櫟原 くねがはら 代表取締役社長 櫟原幸太郎……ちょっと待て！」
いちはらつてことは、市原健の関係者か

「はい、息子です」

社長に聞かれて、幸太郎さんは迷いもなくそう答えた。

「息子？ 確か、市原健は結婚していないんじやなかつたのか」

テレビ報道とは違つと、その発言に社長がそつと幸太郎さんに食つてかかる。

「ええ、義父は独身です。実は義理仲なんですよ。会社を継ぐために、姪の婿である私が養子に入つたんです。義父は一度も結婚したこと�이ありません」

それに対して、幸太郎さんは笑顔そうで答えた。えつ、幸太郎さんとマイケルさんって本当の親子じゃないの？ しかも、結婚したこともないって…… ジやあ、アコさんは？？ 私の頭の中は疑問符で一杯になつた。

「やっぱりご存じなかつたようですね。来て良かつた」

その様子を見て、幸太郎さんはそう言って微笑んだ。

幸太郎さんから着物を受け取る。その時、幸太郎さんのポケットで携帯が鳴つた。その着信音はなんと「月夜の伝説」！ 幸太郎さんは、

「あ、親父ですよ。何なら直接本人から聞きます？」

と言いながら携帯を取り出した。だけど、

「はい、幸太郎。何だ薰？ お前何で親父の携帯で電話してんだよ。えつ？ 親父が！ うん、ああ、ああ、泣くな。それで……どこに？ うん、解つた。すぐ行く」

笑顔で電話を取つた幸太郎さんの表情が見る見る曇つていいく。そして、電話を切つた幸太郎さんは、涙目でため息を吐くと、

「月島さん、一緒に来てくれませんか」

と言つた。薰さんというのは今の話から考へると、幸太郎さんの奥様ではないだろうか。マイケルさんの携帯で奥様からの電話。すごくイヤな予感がする。続けて幸太郎さんは、

「親父が倒れました。原因はまだ聞いてませんが、危篤状態だそうです」

と震える声で絞り出すようにそう告げた。私は自分の予感が当たつてしまつたことに、目まいがした。

マイケルさんの生い立ち（前編）

危篤状態つて、マイケルさんが死んじゃうかもしれないの？ 私はキュッと胸が締め付けられたようになつて、体から力が抜ける。ああ、立つてなくて良かつた。

「すいません、少しお話をさせて頂くだけのつもりできましたか、月島さんをこのままお連れしてもよろしいでしょうか。もしかしたらしばらくかかるかも知れないと？」

幸太郎さんがそう言つて社長に頭を下げる。でも、しばらくかかるつて……そうよね、症状が落ち着くまでは時間がかかるはずだわ。決して幸太郎さんがお葬式まで想定しているわけじゃないよね。

「ああ、ウチの方は構いません」

それに対して社長はそう即答した。

「で、でもそれじゃミユースの納期が」

「ミユースのは月島がメイン張つてるだけであつて、お前一人でやつてる訳じやない」

そりやそうだけど……

「あ、あの、差し出がましいようですが、ミユースといつと、ミユース工業のことですか？」

それを聞いた幸太郎さんが社長にそう聞く。

「ええ、ミユース工業ですが、それが何か」

それに対しても、社長がうなづきながらそう言つと、

「それでしたら、あちらの専務は私の舎弟（「ホン」）……いや、旧知の仲ですので、少しくらいなら納期の融通はつけさせます、もどりお願ひできます」

幸太郎さんは、そう言つて、ミユースに口添えする（といつにはちょっと相応しくない単語が若干混じっていたような気もするけど）とまで言つてくれた。それを聞いた社長は、

「いや、そこまでお気遣い頂かなくても」

と、幸太郎さんに言つた後、私に向かって、

「月島、行つて来い。行かなければ、持ち直してもそうじやなくてもきつと後悔するぞ。

それには、上の空での仕事は事故の元だ。ウチみたいな小さな会社は、ムダな金も人も置いとける余裕はないんだからな」と言った。確かにそうかもしれない。今の私の精神状態ではきっと今日は仕事にならないだろう。行つて、その目でマイケルさんの無事を確認しなきゃ。

「は、はい……行つてきます」

私はそう言つて、深々と頭を下げる幸太郎さんに続いて会社を出た。

駐車場に着くと、幸太郎さんは黒のボックスタイプの車の助手席のドアを開けて、

「その足では乗りにくいかもせんが、後ろでもやはり同じだと思うので」

と言つた。そう言われて後ろの座席を見ると、運転席の後ろにはチャイルドシートが装着されている。小さな布のおもちゃも置かれていた。幸太郎さんは私を支えて車に乗せると、自分も乗り込んで走り出した。

途端に、カーオーディオから童謡が流れる。

「奏のCDが入れっぱなしだった」

幸太郎さんは慌ててボリュームをゼロにした。

「別に良いですよ

「そうですか？」

「気分が和みます」

私がそう言つと、幸太郎さんはまたボリュームをさつきより少し落としたくらいにまで戻した。

「親父はね、小さい頃いじめられっこだったんですよ」

それから幸太郎さんは、ぽつぽつとマイケルさんのこと話を始め

た。

「喘息持ちだった親父は小さくてひょろひょろで、そばかすだらけね、目だけが光つてるような子供だったんですよ。

『お前の顔は日本人離れしてんじゃなくて、人間離れしている』よくそう言われていたそうです。

気弱な親父は、3つ年上の姉、嫁の母親の絵美奈と、後に嫁の父親になる幼なじみの紀文以外とは口も利けないようなそんな子だつたそうです。

そんな親父は現実ではない世界、本やアニメなどに逃げ場を求めました

マイケルさんがいじめられっこだったなんて信じられないな。でも、昔はハーフということだけでいじめられることもあったみたいだし。ただ、本やアニメが好きなことは別に悪いことじゃないんじやない？ 逃げるつて、何かやな言い方だな。そう思つたけど、私は口を差し挟まずに幸太郎さんの話の続きを聞いた。

「思春期を迎えてみるとその容姿が整つても、親父の心は小さないじめられっこのままだったんです。

ちょうどそのころ、タイミング良くといふのか悪くといふのか、祖父の事業が成功し、櫻原は飛躍的な成長を遂げました。甘いマスクと、大会社の御曹司というステータス。幼い頃とは打つて変わったモテるようになつた事に一番ついて行けなかつたのは、当の親父自身でした」

マイケルさんの生ご立ち（前編）（後編を）

今回と次回でマイケルさんが結婚しなかつた理由（できなかつた理由とも書けます）をお送りします。

ミコートス工業というのは「赤パー」で出てきた彰教の会社。『のりちゃん』金弟扱いわれちゃつてます。

それに、幸太郎の車も……ふふふ、こいつ企んでます。

マイケルさんの生立（後編）（前書き）

生立といひて、青春時代かな。

マイケルさんの生い立ち（後編）

「大体、そういうのは本当に親父の外見とか地位とかに惹かれている者が大半でしたから、親父も適当にあしらっていたのですが、一人だけ、華子さんという女性だけは違っていました。

ちょうど生みの母を失つたばかりの親父の心をしつかり支えてくれる優しい女性で、親父は真剣に結婚を考えていたようです。しかし、妻の死をきっかけに一層仕事人間と化してしまった祖父は次々に事業を拡げ、二人は会うこともままならぬようになっていました」

やつぱり、そんな人いたんだ。そうよね、外見だけを見る人ばかりじゃないもの。そうは思つても、私は胸の奥の方がちよつぴり痛かつた。

「そして、ある日突然、華子さんは別れを切り出しました。

『もう待つだけの日々はいやだ。自分だけを見てくれる人の所にいく

と。もちろん、親父だって止めました。

『もう少し待つてほしい。今の仕事が片づいたら父親に話すから』と。でも、華子さんから返ってきたのは、

『あんたその年で「ビューティー戦士ムーンレディ」だつて？ キモいよ。あんたがお金持ちだと思って私、今まで何とか合わせてたけど、もう限界。オタクのお守りなんてもうコリゴリだわ』

という、今までの優しい彼女からは考えられない手のひらを返したような言葉でした

「ひどいっ、その人マイケルさんのこと騙してたの！」

あきれた、お金目当てだなんて最低っ！

「その言葉に傷ついた親父は華子さんと別れ、祖父と共に仕事三昧の日々を送るようになったのです。

実はその頃、さる代議士のお嬢さんが親父を気に入り、華子さんに

身を引くように強要していたこと。華子さんもその方が親父のためになると自分から身を引いたことが判るのはずつと後の話です。

結局、親父はその代議士の娘との縁談もゲイだと偽のカミングアウトをして自分の殻に閉じこもってしまいます

なんて、寂しい話なのかしら。それじゃあ、結婚もできないよね。ん？ で、でもちょっと待つて？ その話つて……

「映画化された『コーラルブルー』じゃないですか」

確かに原作はマイケルさんだけど、それ小説じゃないですか。

「ええ、親父（主人公の圭のように）は死んでないし、本当はゲイではなく、自分のオタク趣味を誇張して相手を引かせて破談に持ち込んだり、代議士ではなく、銀行の頭取のお孫さんだつたり。人物が特定されないように巧く脚色されますが、これ親父の実話から生まれた作品です。親父は華子さんに謝罪の意味も込めて、あの時彼女がどんな気持ちでいたのかを、彼女の気持ちになりきつて書いたものなんですよ」

「華子さん、文句言つてこなかつたですか」

自分がネタにされて。

「同じように、相手方の報復を心配してくれて、『ありがとうございます』と言つてくれたそうですよ」

ホントに優しいいい人だったのね。

「それで元の鞄には収まらなかつたんですね」

「事の真相を聞いたのが、華子さんの（もちろん別の男性との）結婚式ですからね。親父が『コーラルブルー』を発売したのがその18年後です」

そ、それじゃムリだね。

「その……それじゃ華子さんはともかく、頭取さんがなんか言つてこないんですか？」

「あれから25年以上経つんです。頭取はもつとうに引退されちゃるし、当のお嬢さんも別の方と結婚して久しいですし、自分だと特定される要素がなければ敢えて『藪から蛇』を突つつき出した

りしませんよ」

そんなものかしい。あれは自分のことなのよなんて、ミーハーにいえる種のHペソードじゃないけどね。

「着きましたよ」

そうして、マイケルさんの昔話をしている間に、私たちはマイケルさんが運ばれたという病院に着いた。無事でいてほしいな。私は玄関の前で、口クリと唾を飲み込んだ。私の表情をまじまじと見た幸太郎さんは、

「ああ、お連れして良かった。

すいません、怒らないでくださいね。

シャイで不器用な親父がああまでしてきつかけをつかもうとしたんですね。息子としては是が非でも今度は成就してやりたいと思つじやないですか。

過去のことは気になるかもしれません、生理的にいやいやなれば、改めて月島さん、親父をお願いします」と、さわやかな笑顔で意味不明なことを言つて、病院の中に入つていつたので、私は首を傾げながら後に続いた。

マイケルさんの生立（後編）（後書き）

韓流ドラマも真っ青な純愛H・Pソード？ しかも実話ベースかよつ！

「実話をそれと見せすに書く」作家の皆様、そういう経験ありますか？

『コレ、時効だよね』とか言こながら……

そうじゃなくても、この浅慮なたすくの「」とい、そこ中こたすくキャラ充満しますが。

病院に入った幸太郎さんは受付にも寄りすまつすぐエレベーターホールに向かつた。着いたエレベーターに乗った幸太郎さんは、迷わず7階を押す。あれつ、あの電話の口振りでは、あわてて奥さんが電話してきたっぽかつたんだけど、なんで部屋まで知つてるの？

「ふふふ、何で部屋まで知つてると思つたでしょ」

すると、幸太郎さんがそう言つていたずらつぼく笑つた。で、でも何で私の考えること分かるの？ 実は幸太郎さんってエスパー？

? そう思つた途端、幸太郎さんは私の顔を見て吹き出した。

「今、俺のことエスパーと思つたでしょ」

そして、また私の思つていたことを言い当てる。

「月島さんつて分かりやすすぎです。ま、そこがあなたのいいところなんですけどね」

でも、これは超能力でも魔法でもありません。言わばちょっとした

手品かな

「手品……ですか」

「コレですよ」

幸太郎さんはそう言つて私に携帯を見せた。そして、メニューキーからアラーム画面を出す。そこには2番目のアラーム設定に、ウチにいた時間が表示されていた。あれつて、かかつてきたんじゃなくてただのアラーム音だつたんだ。

「じゃあ、マイケルさんが倒れたつて言つのはウソだつたんですか？」

それを見て私は、プリプリ怒りながらそう言つた。内心ではウソで良かつたつて思つてたけど。でも、幸太郎さんは私に、「いや、ウソではありません。ウソだつたら病院になんて来る必要なんてないですよね」

と返した。

「本当……なんですか？」

「ええ、実際に倒れたのは昨日の夜ですが」

「じゃあ、何故こんな芝居みたいなことをしたなんですか」「普通に昨日倒れたからきてくださいで良いじゃない。私がそう言つて怒ると、

「えつ、それはほんの意趣返しですよ。それと、再確認もあるかな」幸太郎さんは、そう言つて笑顔で答えた。それにしても笑顔で『意趣返し』って何？ ぐ、黒い……黒すぎる。正巳も黒いけど、負けてない。幸太郎さんは、

「意趣返し？」

と聞き返した私の言葉には返事せず、

「さあ、着きました」

と言つて病室のドアを叩いて開いた。

冷蔵庫にクローゼットとソファー、窓際に置かれているベッドこそ病院仕様だけれど、それ以外は病室といつよりもどつかのワンルームマンションのような部屋。おそらくは特別室つてやつなのだろう。ソファーにはマイケルさんと同じ栗毛の髪の若い女性が憔悴した様子で座つていて、私たちが入ってきたのを見ると顔を上げて、「パパ、遅いよ。たつた今……」

と言つて、うるうるの瞳を幸太郎さんを見てから、マイケルさんのベッドに田を移した。その仕草に私の脳は一瞬でフリーズした。

「……えつ、たつた今つて何？ 幸太郎さん、笑つて『意趣返し』だつて。マイケルさん、ホントに死んじやつたの？ それつて、何かの悪い冗談だよね。 ウソ、ウソだつて言つて……」

「ま……マイケルさん死んじゃイヤあー！ お願ひ、もう一回田を開けて！ また、一緒にカラオケ行って……」

私は松葉杖を投げ捨てて、マイケルさんのベッド際に倒れ込むよ

うに縋りついて泣いた。

意趣返し（後書き）

更紗ちゃん、完全にとつからかってしまって、何度書き直しても、いつも語ってくれないので、いつもそのまま放り出します。まあ、この子は元々こういった子ですけど。

で、意地の悪い作者はこうして次回へ。さて、武蔵は無事な感じですか。（黒笑）

誤解スパイク

私が、おぼつかない足でタックルするよ！」マイケルさんにすがりつくり、

「ゲホン、ゴホン……」

と激しく咳き込む音がして、

「ぐ、苦しい……」

といつ弱々しき声が聞こえてきた。見るとマイケルさんは赤い顔で息も荒いけど、生きていた。

「マイケルさん……」

マイケルさんが生きている！私はただ、彼が生きていたことが嬉しくて、思わず自分から彼を抱きしめた。でも、マイケルさんは身を捩つてもがき、その仕草でまた咳き込む。その様子を見た幸太郎さんが、

「重いんですよ、月島さん」

と言つて、慌てて持つてきた折りたたみの椅子に私を座らせた。そして、『重い』というワードに私の顔がひきつったのを見て、「すいません、決して月島さんが太つてるとかそういう事じゃないんですよ。元々気管が弱いし、肺炎で負担がかかつてるから、今は着ている布団ですら重いと感じるようなんです」

と補足した。マイケルさん、肺炎だつたのね。すごい病気とかじやなくてホッとした。幸太郎さんは、私が体型を気にして顔に出したと思つたらしい。確かにボトムの方が大きい下半身デブだけど。実はそうではなく、私は私の気持ちが重いと言われてしまったのだと思つたのだ。

そして、座つて改めてまじまじ見たマイケルさんは何とも複雑な表情をしていた。

「更紗ちゃん、どうして來たの？」

どうせ、幸太郎君が大げさな事言つて連れて來たんだよね。『めんね、昨日はちょっと酷かつたけど、今日はもう大丈夫だから』

心配しないで早く帰つてと、マイケルさんはやつひつと、また2回咳をして私から目を逸らした。

「迷惑ですか？ 私お見舞いに來てもダメなんですか？」

私なんて、マイケルさんからすればがきんちよみたいなものだらうけど、私たち、お友達にもなれないの？ 悲しくて涙があふれてくる。ぐすっと鼻をすすつた私に、

「な、泣かないで。迷惑だなんてとんでもない。……僕は嬉しいよ。でも、ここに來たことが分かつたら、更紗ちゃんが旦那さんに怒られちゃうでしょ？ 電話で僕もう会いませんって彼に約束したもの。だから、僕に妙な期待を持たせないで」

と、私の涙に慌てた後、マイケルさんは沈痛な面もちでそう返した。妙な、期待つて……私もそういう期待してもいいのかな。ただ、さつきのマイケルさんの言葉の中に聞き捨てならないワードがあつたんだけど。

「は？ 旦那さん？？」

独身の私に旦那さんなんていない。誰と勘違いしてるんだろう。待てよ？ 今、電話つて言つたよね……

「旦那さんつて誰のですか？」

私は改めてマイケルさんにそう聞くと、

「もちろん、更紗ちゃんの旦那さんだよ。『俺の更紗に洋服なんて贈るな』って、すごい剣幕だった」

マイケルさんから予想通りの答えが返つてくる。間違いない、犯人は正巳だ。私は、

「それ、正巳つて言つづつ下の弟です。あいつ、姉を姉だと思つてなくて、いつも呼び捨だから。私は正真正銘独身ですよ」と言つた。付け加えないけど、彼氏いない歴=年齢だよ。

正巳め、絶対にわざとだわ。わざと弟だと名乗らずに電話したのに決まつてゐる。こんなことなら自分で電話すれば良かつた。

まったく、自分はさつと嫁をもらつておきながら、人の恋路は邪魔するなんて、最っ底。腹黒だとは思つてたけど、『まつくりくろくろすけ』じゃん。しかも、かわいくないし。

すると、マイケルさんも私が独身だと分かつてすげホッとしたよな泣きそうな表情になつた。

「更紗ちゃん、独身だったの？ 彼、玄関先まで迎えに来てたし、すごく田で僕のことをにらんでたから、てっきりそうだと思つてたあのとき、マイケルさんから私をひつたくつたしね。だから、電話番号も捨ててつて言つたのか。私の中で一つ一つの誤解が解けていく。

「でもね、最後に直接一言だけでもお詫びが言いたくて、僕、記者会見の後、こつそり電車で更紗ちゃんの家の前まで行つたんだ。だけど、いざ着いてみるとインターフォン押せなくて……ずっと、あの近くをうろうろしてたんだ。

そしたら、夜、更紗ちゃんと田那さんが仲良くお家に戻つてきたから……望みはないつて解つてたけど、それを見たらなんか糸切れたみたいになつて、後は、どこをどつ歩いたか覚えてない。で、気がついたら、ここにいたんだ」

だから、私に夫はいませんつて。それに、昨日は正巳にも会つてないんですけど。一体、誰のことを勘違いしてる？

あ、昨日は庄司さんに送つてもらつたんだつけ。そういえば庄司さんと正巳とは背格好が似ている。ぜんぜん別人だけど、夜の暗がりでは正巳も庄司さんも同じように映つたのかもしれない。

「俺が見つけたとき、親父は朦朧としてしきりに月島さんに謝つてました。

で、ピンときました、弟さんのことだなつて。今後のこともあるから、月島さんの家族構成は調べてありましたし、俺にも実の姉貴がいますからね、気持ちは分かるんです。でも、これはおイタが過ぎます。俺が見つけるのがもう少し遅ければ、命に関わることだったんですから。

それで、そつちがそうくるなら絶対にくつづけてやるって思つた。

親父の気持ちは分かつてましたから、あとは月島さんがどう思つてるか。それを確かめるために、今回こんな芝居を打つてみました。

月島さんも、親父のこと……

「パパ、それは武叔父様に任せたら。パパは武叔父様にちょっと過保護すぎるわ」

私の気持ちを確かめよつとした幸太郎さんをわざわざ制した奥さんは、

「あ、自己紹介が遅れました。私、この櫟原の妻の薫です」と、立ち上がって私に深々と頭を下げた。

「あ、月島更紗です」

私も慌てて立つて挨拶しようとしたら、薫さんにやんわり止められた。

「お怪我されてるんですからそのまままでびりわ」

「あ、すいません」

「つてかさ、薫、おまえさつき俺に何言おうとしてた?」

そして、薫さんに『過保護』と言われた幸太郎さんは、ムツとしながら彼女にそう尋ねた。

「そうよ、パパ、何でもう少し早く帰つて来てくれなかつたのよ。大変だつたんだから」

それに対して、薫さんはため息混じりでそう答える。

「一体何があつたつてんだよ。親父、落ち着いてるじゃん」

「今は終わつたからよ。さつきまで看護師6人がかりだつたんだから」

私も手伝つたから7人よと薫さんが言つ。7人がかりで一体何をしあつて言つんだろつ。しばらく首を傾げた幸太郎さんは、答えに気づいた途端もつと不機嫌な顔になつて、

「親父、いい加減注射器に慣れろよ。ただの採血だろ」
ぼそつと、そう吐き捨てた。ち、注射器？ 採血？？

「だつて、怖いんだもん」

幸太郎さんにそう言われて、マイケルさんはしゅんとなりながらそう答えた。

「だからって、全力で逃げないで欲しいわ」

薰さんが呆れ顔でそう言ひ。

「怖いんだもん！」

マイケルさんは涙目でもう一度そう言ひた。50歳を過ぎた大の人が注射器から逃げてる図つて……でも、マイケルさんならなんとなくそれもアリかもしないって思つから不思議だ。吹き出してげらげら笑いだした私に、

「あ、とんでもないこと聞かせちゃったかな」

と蒼くなる薰さん。マイケルさんも、

「そうだよ、フロリーちゃん。コレで更紗ちゃんに嫌われちゃったらどうしてくれるの」

と、真っ赤な顔で薰さんをたしなめる。

「嫌わない嫌わない。なんだかマイケルさんらしいですもん」

それに対して私がそう言つと、マイケルさんの顔がぱあっと輝いた。だけど、

「月島さん、甘やかさない。そつだ、次の採血には月島さんもいてもらおう。そしたら、親父頑張れるよな」

間髪入れずそう言つ幸太郎さん。マイケルさんは、

「うつ、それは……頑張つてみる」

口をへの字に曲げながら、渋々肯いた。相変わらず、この親子は逆転してゐるな。でも、本当に良い親子だ。ずっと、側で見ていたいと思つ。

「やつ言つわけで、月島さん、こんなへタrena親父ですけど、面倒看てもらえないですかね」

私は相変わらず『過保護』な幸太郎さんの発言に笑顔で頷いた。

誤解スパイ럴（後書き）

ホント『過保護』な幸太郎です。
でもなあ、こうでもしないと、武くんと更紗ちゃんじゃ一生くつ
きませんから。

私が頷くのを見た途端、幸太郎さんは、「月島さん、俺、仕事があるんで会社に戻ります。夕方、またここに迎えに来ますんで、それまではじゅうくりどりば。ほら、薰行くぞ」

と私に頭を下げ、ソファーに座っていた薰さんの手をとつて外に向かう。いきなり帰ると言に出したことに首を傾げた薰さんも、少し考えてウンウンと首を縦に振る。

「へっ、それなら私が送つて……ああ、ええ。私も奏が心配なんで帰ります。じゃあ、叔父様頑張つてね」

と、マイケルさんにウインクを投げて幸太郎さんと一緒に病室を後にした。所謂、お見合いで言うところの「後はお若い方同士で」つて奴だ。ただ、状況を考えてみても、みためでも私とマイケルさんが年上なんだだけね。

「ごめんね、幸太郎君が勝手なこと言つて。あれでもね、普段は会社の事を考えるいい社長さんなんだよ」

マイケルさんは幸太郎さんがいなくなつたとたん、そう言つて私に謝つた。幸太郎さんはたぶん、本当にマイケルさんに幸せになつてもらいたいだけだ。だけどこんな風に私に父親を売り込むことができるのは、義理仲だからかもしれない。

「更紗ちゃん、本当に結婚していないんだつたら、僕のお嫁さんになつてくれる？」

更紗ちゃんはまだ2回しか会つてないつて言つかもしれないけど。そうやつて、待つてたら別の誰かにとられちゃうかもしれないから。そうなつたら、僕今度こそ死んでしまうと思つ

それから、マイケルさんは改めて自分の口でプロポーズしてくれた。開発部門の女は私だけだけど、周りは妻帯者とつんと若い智く

んだけ。黙つてたつて誰も寄つてこないですつて。だけど、

「そんな私はもてないですよ」

と言つても、

「つうん、更紗ちゃんかわいいもん。僕、心配で
とゆづらない。

「私の方がマイケルさんのお嫁さんになんかなつていいんですか」「
マイケルさんなら、もつとすてきな人が選り取り見取りだと思つけ
ど。

「もちろんだよ。受けてくれるの?」

「私でよければ」

マイケルさんは私の返事を聞いて、

「やつたあ!! ジヤあ、一刻も早くここから抜け出さなきゃ」

と言つて大喜び。すぐにでも点滴の管（これは意識を失つていると
きにつけたものなので、大丈夫だつたと後から聞いた）を抜きそ
な勢いだ。

「ダメですっ、ちやんと体を治さないと。私はビリにも逃げません
から」

私は慌ててマイケルさんにそう返した。

「解つてるよ。そうじやないと、弟さんとちやんと鬪えないもん。
弟さん、絶対に阻止すると思うから。幸太郎君じやないけど、僕に
も解るんだよね。フロリーちゃんと幸太郎君のことは素直に認めら
れたけど、ベス……あ、僕の母親の違う妹のことなんだけどね、ベ
スと美久君のことはなかなかね。

僕の場合は、年の離れた妹だからなんだと思つてたけど、お姉さん
でもやっぱりそつなんだと思って。弟さんに親近感感じたくらいだ
から。

それに、できるだけ早く両親には挨拶しておきたいし。病弱だと
思われたくないからね、きつちり治すよ

「いいですよ、正巳の肩なんか持たないでください。あの子のせい
でマイケルさんがこんな大変な目に遭つてるんですから。あいつに

は私が文句なんか言わせません」

正巳には何も言わせない。言わせるもんですか。でもパパは……ち
ょつとヤバいかも。

それから、私たちはお互いの家族の話をした。

仕事一辺倒だったマイケルさんのお父さんが今の奥さんと知り合つたのが15年前、あちらはなんと、私たちの倍の31歳の年の差なんですって。だから、お義母さんと言つても、8歳も年下だとか。仕事人間だつたはずのお父さんは、そのお義母さん……クラウディアさんと結婚した途端、マイケルさんに会社を任せて社長を辞任。一応会長として籍は置くものの、家庭第一のマイホームパパに。これにはマイケルさんも驚くやらあきれるやう。

それはともかく、そうやって新しい幸せを掴んだ父親を見て自分もやりたいことをやろうと思つたんだって。それで、マイケルさんは若いときのあの苦い思い出をベースに「コーラルブルー」を書いたといつ。あくまでも仕事の合間に楽しみだつたそれは、それを見せた友人のライターさんが出版社に売り込み、編集者さんも気に入つて、あれよあれよという間に本になり、ベストセラーとなり、ついには映画化までしてしまつた。

そうなつてしまつともう、社長業の合間に執筆というわけにも行かなくなり、ちょうどそのころまとまつた姪の薫さんの（マイケルさんが薫さんのこと）ことをフローリーと呼んでいるのは、英名がフローリアナんだつて）結婚相手が櫻原の社員の幸太郎さんだつたことから、彼を養子にして社長につけたということだつた。

それにしても、お嫁さんかあ。なんか実感がわからない。別に結婚するのがイヤだつたわけではなく、好きな仕事をして、時々友達と遊んでそれで十分満たされていたから、焦つてしようと思わなかつただけだけだ。

そして、夕方私を迎えてくれたのは、社長秘書の宮本美久さん。実はマイケルさんの妹さんの婚約者だ。

ちなみに、年の離れた妹のベスちゃん（日本名は絵梨紗といつら
しいが）は、13歳でその彼氏の美久君が25歳とこちらも一回り
違う。

マイケルさんは、美久君のことをなかなか認められなかつたつて
言つてたけど、そりやそうだ。一回りの年の差より、中学生が婚約
の方があり得ない。しかも、政略結婚とかではなく、彼が彼女の命
の恩人だというロマンチックな理由だと言つからびっくり。彼の口
からも、

「タケちゃん（会社を引退した後は、みんなにはそつ呼ばせている
らしい）には幸せになつて欲しいんです」
といふ言葉が聞かれた。本当にマイケルさんはみんなに愛されてい
る。

何で今まで結婚しなかつたんだりうと思つ反面、今まで一人でい
て、一人でいてくれてよかつたと思つた。

運命の歯車は……回り始めるといつも早かった

家に戻ると正巳がなんとも言えない表情で出迎えてくれた。

「更紗、悪かつたな」

と言つので、

「謝る人が違つよ」

と返す。

「その……あいつは？ 今日、行つて来たんだろ」

続いてこわごわと言つ感じで聞いてくる正巳。あの幸太郎さんのことだ、『意趣返し』と言つていたくらいだから、きっと正巳にも危篤状態で明日をも知れないように言つたに違いない。私は、ちょっと意地悪な気分になつて、

「うん、なんとか。でももう大丈夫みたいだよ」

と、さもマイケルさんが九死に一生を得たように正巳に言つた。案の定、正巳はそれを聞いてホッとした顔になつている。

「俺も……あの歳でのルックスだろ。今は独身でも、バツの一つや二つは付いてる。むしろ、バツを付けずに遊んでるとか。とにかく、絶対に更紗が騙されてると思ってたんだ。そんな奴にはちゃんと一発かましてやらないとなつて思つてさ。

あいつがそこまで真剣に更紗のこと考えてるとは思わなかつたから、

ゴメン」

そして素直に謝つた正巳に、私は、

「いいよ。マイケルさんも弟だつて言つたら、正巳の気持ち解つてくれたよ。マイケルさんも、姪御さんの旦那さんはすんなり受け入れても、妹さんの婚約者はなかなか受け入れられなかつたんだつて。それに、『もう誰にも渡したくない』って言つてくれたから。正巳のおかげだよ」

と笑つて答えた。

でも、その後、

「にしてもさ、どこで知り合つて、何でこうなつたんだよ。更紗とあいつって接点なさすぎじゃん」

と、正巳に言われて、私は一気に冷や汗をかいた。ホントはたつた3日前、お見合いを逃げ出して口ケていたところを助けられたんだけど、それを言つたらこの子また反対しかねない。なんか適当な理由ないかな。私は慌てて考えを巡らせ、

「あ、あの……そ、そう、私の会社の人の紹介。マイケルさん、その人の学校の先輩なんだ」

と庄司さんを思い浮かべながら口から出任せ。このあと、本当に高校の後輩だと判るんだけど、庄司さんとマイケルさんは5歳違い。当然接点など何もない。

「でね、櫟原先輩と月島は絶対に気が合つだろつからつて」そう言いながら私は携帯を取り出してメロディーを検索する。流れてきたその曲を聴いて、正巳は頷きながらも呆れていた。曲はもうろん、『月夜の伝説』

「もう俺、何も言わない。更紗、幸せになれよ

正巳は、あつけないほどあつさり折れた。だけど、相変わらず上から目線なのは何故？ 私、姉なんですけど。そりや、先に結婚したけどや。

正巳は言いたいことを言つとさつさと帰つていった。

そして夜、社長から電話があった。あんな早退の仕方をしたんだから、一言報告を入れなきゃと思つて矢先だつた。

「月島、おまえもう今週中は来なくて良いぞ。ミューースの副社長からのお達しだ。それから、来週でてきたら、智にできるだけ早く引き継ぎしろ。期限は1ヶ月だ」

「くつ、どうして？」

で、いきなり切り出された話に私は蒼くなる。

私、何か致命的なミスでも犯した？ すると社長は、

「どうしてだあ？ おまえ、市原健と結婚するんだろ？ が。ミュー
トスの副社長がな、『相談役が大変なときに、婚約者殿をウチの仕
事に駆り出しているのは申し訳ない、看病に専念してくれ』だとよ
と、ちよっとムッとした調子でそう言つた。

「は、はあ」

私はそう返事するしかなかつた。

この時まで知らなかつたんだけど、マイケルさんは今も相談役と
言う形で櫟原に一応籍があるらしい。確かに幸太郎さんはミユート
スの副社長を舍弟だつて言つたけど、本当に圧力？ カケちゃつた
んだ。

「んで、明日の朝も櫟原の秘書が迎えに行くらしいからその車に乗
れとよ」

「それで……良いんですか？」

「良いも何もおめでたいことだろ？ が。

そりや、月島は俺にとつて妹みたいなもんだ、いつまでもいて欲し
いよ。けどよ、だからこそ幸せになつてもらわなきやな」

社長は私にそう言つて電話を切つた。

でも、一ヶ月で引き継ぎ？ そこから結婚準備に入れというんだ
ろ？ か。

確かに私はマイケルさんのプロポーズを受けたけど、私、パパや
ママには何も話してないわよ。ママは私を結婚させたかつた張本人
だから、相手が変わつたところで一も二もなく大賛成だろ？ けど、
問題はパパ。パパに言つ前に仕事を辞める算段をしてたと分かつた
ら……更に反対されそう。

生まれて36年、さび付いて動かない感のあつた私の運命の歯車。
マイケルさんという潤滑油を得て回り始めたそれは私が考えていた
よりもずっと高速で、私自身が一番付いていくつて感じ……

でも、こんなのは序の口で、私はこの先もつともつと櫟原家に振
り回されることになるのだった。

鮎さん、来襲！

翌日、朝8時に美久さんが迎えにきた。インターフォン前に待機していた私は鳴った途端、カフをあげる。パパはいつも出勤していなければ、ママが起きてきたら厄介だ。

そうやって、素早く家を出て美久さんの車に乗り込んだ。

「朝早くからすいません」と、頭を下げる私に、美久さんは、

「いいえ、別に。それに、どうせ『親父の様子を見ててくれ』と社長に言われていますから。どうせ病院に行くのなら、月島さんを乗せて行くのはそんなに手間ではありませんし」

と言つた。

そして、病室に着いた時、マイケルさんは眠つていて、美久さんは、

「経過の方はナースステーションで聞いて帰ります」と、すぐに病室を出て行つてしまつた。

一人残された私（正確に言えばマイケルさんがいるんだから一人ではないのだけど）は、ソファーに座つて徐に携帯ゲーム機を取り出した。入っているソフトは「ぱよぽよ」、単純明快『落ちゲー』だ。どうせ完全看護だから何もすることはないし、これなら既に何度もクリアしているから、どの面からでも遊べるし、逆にいつでも止められる。私はヘッドホンをしてやり始めた。別に、BGMなんてなくても良いけど、面クリアの時のキャラクターのビーでもいいやりとり、結構面白いのよね。

ゲームをじれくらいやつただろうか、不意に病室の扉が開いた。相手の名誉のために言えば、たぶんノックはされていたと思うけど、脳に直接ゲーム音を浴びていた私には聞こえなかつただけだ。

「タケちゃん、ちょっとは元気になった」

そして、そう言って現れたのは、品の良いスーツを着た40代くら

いの女性。彼女は部屋を見回すと、

「あら、どうやら様？」

私を見咎めてそう言った。

「あ、はじめまして、月島です」

「ああ、もしかしたらあなたがタケちゃんの婚約者？ 私、幸太郎の母です」

その人はそう言つと名詞を取り出した。受け取つとしたとき、横のベッドに動きを感じる。

「鮎さん、来てくれたんだ」

目を覚ましたマイケルさんは、かすれた声でそう言つた。そうか、この人がアユさん？ そう思いながら渡された名刺を見ると、そこには、ブライダルコンサルタント鮎川 寿子の文字がある。アユさんって言つから『あゆこ』とかそう言つ名前なのだと思つていたんだけど、鮎川さんって名字だったのね。分かつてしまえばなんてこともない話。それにしても、櫟原家では私はもう婚約者として位置づけられているの？ 別に断る気もないんだけど、なんか落ち着かない。

「幸太郎から倒れたつて聞いてびっくりしたわよ」

「心配かけちゃったかな、でも、もう大丈夫だよ。結婚式までにはちゃんと良くなるから」

「ああ、そういう、それそれ。私、月島さんだけ？ あなたにお願いがあつてきたのよ。仕事帰りにくらいにはここに見えると思つたから、タケちゃんにお願いしてもらおうと思つたんだけど、手間が省けたわ」

「私に……ですか」

「一体、何だろ。

「ええ、来月の幸太郎と薰さんの結婚式なんだけど、月島さんがタケちゃんと両親として出席して欲しいの」

ええーっ！ 新郎の親として出席！？ 自分たちも結婚していないのに？？

「幸太郎はもう櫟原の家に養子に出したんだし、櫟原に両親そろつているんだつたら、私が母親面して座つてることないでしょ？」

驚いている私に当然のようにそう言う鮎さん。

「そ、そんなこと言つたつて、鮎さんは幸太郎さんの実のお母さんなんでしょう？」

確かに今、私そう聞いたけど。

「ま、それはそうなんだけど、私結婚式でじつとしてるなんて耐えられないの。結婚式は私の戦場だもの」

鮎さんはそう言つてウインクする。確かに名刺にはウエディングコンサルタントと書いてあるけど、自分の息子の結婚式まで「コーディネートすることないじゃない。

「あ、あの、でも聞きますけど、幸太郎さんお子さんいらっしゃるみたいなんんですけど、なんで今頃結婚式なんですか？」

それで、私は前から疑問に思つていたことを口にした。それを聞いた鮎さんは、

「なんだ、タケちゃん話してないの？」

と呆れ口調でマイケルさんに尋ねる。

「だつて、幸太郎君たちの結婚は更紗ちゃんと知り合つ前から決まつてたから。それに、いきなり息子の結婚式に出てくれつて普通言える？」

それに対してもイケルさんは口を尖らせてそう答えた。

「要するに、結婚式する前にデキちゃつたのよ。

ホントだつたら、安定期に入つてやれば良いんだけど、薰さんが切迫流産になつたもんだから幸太郎が怖がつちゃつてね、絶対に生まれてからしかしないつて聞かなかつたつて訳」

そう言う訳だつたのか。そう言えば、幸太郎さんの車に乗つたとき、いきなり童謡がかかつたもんね。ホントにお子さんを大事にしてるんだ。

「ま、私も最近は結構そういう『おめでた婚』のお世話をするけど、結構新婦さんが大変だつたりするから、幸太郎の選択は間違つては

いなかつたつて思つのよね。なんたつて奏のお披露目も一緒にでき
ちゃうわけでしょ」

一粒で一度おいしいと、鮎さんはどうかのお菓子メーカーみたいな
台詞を吐いて笑つた。

で、少しは抵抗したけど、

「ね、親代わりとして席に座つてくれてるだけで良いんだから」
最後は鮎さんのそんな言葉に押し負けて、私が渋々幸太郎さんの母
親役を引き受けると言つと、鮎さんは、

「じゃあ、そう言つことで、スタッフに知らせておくわね」「
とスキップでもしかねない勢いで、病室を出でいった。

「ひつゝ、幸太郎さんは櫟原の社長な訳だし、義母としては装いは
黒留め袖よね。正巳の時に着たからあるにはあるけど、どうママに
言おう。それに、今からこんなに嫁扱いつてわかつたら、パパは
荒れるんだろうな。ホントに許してくれる気がしない。」

「鮎さん本気だよ。ずっとディアさん（クラウディアさんのこと。
つまり幸太郎さんの義理のおばあちゃん）に頼み込んでたんだけど、
あまりにもそれっぽいから、パパが拗ねちゃつてね、立ち消えにな
つちゃたんだ。そこに、更紗ちゃんが現れたもんだから、今度こそ
はと思つてる」

鮎さんを見送つた後、マイケルさんがため息をつきながらそつそつ
た。

クラウディアさんはマイケルさんよりも8歳下だもんね。

「それにさ、ディアさんが僕の隣に来るとなると、『デビはパパ一人
で見なきやならないからね。そりや拗ねるよ』

「デビというのは、マイケルさんの末の義弟デビッド（日本名は英
雄）くん。もうすぐ4歳になるやんちゃ盛りだ。そりや、お父さん
一人では荷が重いだろ？ でも、デビはもちろんデビッドの相性だ
けど、実はデビルの意味も言外に含んでいるのを知るのは、この後
なんだけどね。」

「ねえ、お嫁にくるの怖くなっちゃった？ 僕、退院したらすぐ」
挨拶に伺つから、更紗ちゃん、嫌がらないで絶対に僕のところにきてね

たぶん不安感一杯の顔になつている私に、マイケルさんは泣きそうになりながらいつづけた。

鮎わん、来裏一（後書き）

いやあ、幸太郎母、予想に違わず濃いです。

書く理由

そして、マイケルさんが倒れてから10日、彼の退院が決まった。ちょうどその日がパパの公休に当たっていると私が言つと、マイケルさんは一旦家に戻つてシャワーを浴びるとすぐに美久さんの車に乗つてやつて来ると言つた。本当は自分で運転するつもりだったらしいけど、退院後すぐ行くと言つたマイケルさんに、幸太郎さんはそれなら迎えに行つた美久さんの運転で行けと譲らなかつたらしい。

「シャワーなんてダメですよ。まだぶり返したりびりするんですか」と言つ私に、

「そんなこと言つたつて、病院の空氣を背負つたまま更紗ちゃんのご両親に会えないよ」と返すマイケルさん。

「次の公休でも良いんじゃないですか」と言つた私に、

「ダメ、今度は絶対に失いたくないんだ。それに、こうこうのつて勢いが大事だと思わない?」

マイケルさんはそう言つて納得してくれなかつた。でも、今度は…か。マイケルさんの中にはまだ華子さんへの想いがあつたりするのかな。そうだよね、私とはまだ一月も経つていない訳だし。

「どうしたの?」

「い、いえ……何でも」

私が歯切れの悪い返事をすると、マイケルさんは、

「何でもじゃないでしょ、更紗ちゃんつて自分の気持ちをすぐ飲み込んじやうよね。僕にはどんなことでも全部ぶつけて」と、ちよつとムッとした表情で私にそつ言つた。

「……」

「思ひが膨らみすぎると爆発するよ」

マイケルさんは、ベッド脇に座っている私の髪を撫でながらそう付け加えた。

「マイケルさん……」

「何?」

「マイケルさんは……今でも華子さんのこと……好き……なんですか」

それで、私がよつやく華子さんのことを口に出すと、マイケルさんはふつと笑った。

「華子? ああ、香澄のことか。幸太郎君に聞いたの?」

そうか、華子は「コーラルブルー」の登場人物の名前だもんね。本名は香澄さんっていうのか。私は黙つて頷いた。

「好きと言えば好きかも知れない」

そして、ものすごく穏やかな顔でマイケルさんはそう返した。だよね、やっぱり忘れていないんだ。解つてたけど、胸が痛い。頭が熱くなる。

「そうじやないかな。そう、好きって言つよう感謝だと思つ」

だけど、私が泣きそうな顔をしたからだろうか、マイケルさんはそう付け加えて、静かに語り始めた。

「パパが結婚して、僕も僕らしく生きようと思つたとき、一番最初に思い出したのは確かに彼女のことだったよ。

で、あのとき、僕はどうすれば良かつたんだろう、彼女は何を考えてあの言葉を口に出したんだろうって思ったとき、一次元で僕は彼女になりきつて生きてみよう。そうすれば彼女の気持ちが少しでも解るかもって考えたんだ。そうして書いたのがあの、『コーラルブルー』だった。

だからって何が解るつてこともなかつたんだけどね、ただ、自分の中で彼女への想いが昇華された。それでも僕は充分だつたんだ。でもね、それを遅ればせながらの恋愛収束宣言のつもりで学生時代の物書き仲間テツちゃんに見せたら、テツちゃんは香澄のことを全

部知つてゐるのに、それでもこれは小説として売れるからって、勝手に知り合いの菊田編集長のところに持ち込んじゃつたんだよね。

それでなし崩しにこんな風に小説家になつちやつた。

だから、どうしてもつて理由が自分の中になかつたんだと思つんだ。書くことはもちろん大好きだし、手を抜いているつもりはないんだけど、書いてると逃げ出したくなつちやう」

マイケルさんはそう言つて舌を出しながら笑つた。そして、「だけどね、最近やつとわかつたんだ。僕が小説家になつた理由」と、嬉しそうに続けた。

「わかつたんですか？」

私も逃げ出して出会つたんだから、極々最近だよね。まさか、入院して悟りを開いたとか？ マイケルさんはそう思つた私の手を握つて、

「うん、それはね……更紗ちゃん、君に会つたためだよ。

櫻原で仕事に明け暮れていたら、君には絶対に出会えなかつたもん」と言つた。しかも、その表情は撃破りの？ 天使スマイル。つながれている手からざー一つと音が聞こえる位の勢いで熱が頭に上つてくる。

「あ、あ、あのこと……」

パクパクと金魚みたいな呼吸をしている私に、

「それにね、更紗ちゃんがいつしょにいてくれると、カラオケの時みたいに、どんどんネタが湧いてくるんだ、だからね」

とマイケルさんは続ける。

「だから？」

「捨てないでね」

と、マイケルさん。そして、

「ヨボヨボのおじいちゃんになつてもだよ」

さらにそつ念を押す。冗談を言つてる訳じゃなく、そのヨボヨボは至つて真剣。私のどこがそんなに良かつたのかと首を傾げたくなるくらいに。

で、そんなマイケルさんをかわいいと思つてしまつ私。
たぶん……似たものなんだろうな。

「はいはい、私もその頃にはオバサンですからね、その言葉そのまま返します」

私もそり言つて笑つた。

書く理由（後書き）

本当は月島家に行く段取りのつもりが、武君がビリしても語りたかつたらしくて……話が全く進みません。

次回、やっと月島家へ殴り込みます。

はあ……ホントに終わらない。

パパとマイケルさんの攻防戦（前編）

そして、マイケルさんの退院の日が来た。

さすがにアポなしでは特にママは出かけてしまうかもしれないの
で、とりあえずママには

「会わせたい人がいる

と言った。

「あら、あのイケメン作家さん？」市原健だけ

すると、ママはすぐにそう言った。

「う、うん。ま、まあね

「更紗ちゃん、恋人がいるんだつたらもつと早くこママに会ってく
れなきや。だつたらあんなお見合いなんか進めないの。」

そしたら更紗ちゃん慌てて逃げ出して、痛い思いもしなかつたでし
よ

口ごもりながらさう言つ私こ、ママは顔をしかめてそり返したけど、
私が答えられずになると、

「あ、このお見合いで？ それだつたらママに感謝しなさいよ。

それにしても、いきなり更紗ちゃんのお着物を着替えるなんて、
余裕ないわよねえ

と、勝手な想像を始めてひとり盛り上がつていい。でも、あのお見
合いがなかつたらこほほならなかつたのは事実だし、誤解されたま
まの方がいいのかな。

退院の日、朝10時きつかりにマイケルさんは来た。後で聞くと、
朝8時までに退院の準備をすべて終えて、会計が開くと同時に支払
いをして病院をでてきたり。

ママにリビングに通された彼をけりりと見たパパは、こいつと
逃亡しけたけど、パパの行動なんて全部お見通しのママごガード
されて、超不機嫌な顔でリビングに入つて來た。

「はじめまして、櫻原武いちばらたけると申します」

マイケルさんはパパが入ってくるのを見ると、飛び上がるよつに立ち上がり、そう言つて緊張マックスで、ウチのロボちゃんたちの方がまだなめらかなんじやないつてくらい、カクカクのお辞儀をした。パパは

「ああ」

とだけ言つて、マイケルさんが座つている反対側にある椅子椅子子にどつかと座る。

かくしてパパとマイケルさんの攻防線が始まった。とは言つても、マイケルさんは緊張で、パパは不機嫌でおし黙つたまま膠着状態。

そんな男共を横目で見ながら、ママは手招きで私をキッチンに呼ぶと、

「マイケルさん、お酒は？」

と、聞いた。確かにパパはお酒好きだけど弱いから、巧くすれば丸め込めるかもしれないとママは考えたんだろう。でも今、マイケルさんは病み上がり。まだ抗生素は完全に手を離れていないはずだ。たとえ強くてもお酒は飲ませたくない。

「たぶん大丈夫だけど、風邪気味だから」

私は胸の前でバツを作りながらそう言つて、棚からインスタントコーヒーの瓶を取り出すと、コーヒーを淹れ始めた。お酒ほど効果はないかもしけないけど、それでも少しは緊張が解けるはず。私はキツチンの棚を開けて、

「ママ、コレもううね」

と、塩キャラメルを取り出した。ママはこのキャラメルが大好き。でもコレ、この辺ではちょっと離れたホームセンターでしか売つてなくつて、ママは行つたときにまとめ買いするから、かなりの高確率でストックがあるので。それをフレッシュと一緒にカップに入れ1分30秒チンしたら、そこにコーヒーとお湯を入れ、砂糖も入れてかき混ぜる。頑張つて、私はここにいるからといつ思いを込めて。

それをママに運んでもらう。ずいぶん治つたとはいえ、まだコーヒーを運べるほどまつすぐは歩けないのよね。

そして自分の前に置かれた明らかにパパとは色の違つコーヒーを見つけて、マイケルさんは私を見た。私は、黙つて頷く。一口飲んだマイケルさんは、

「キャラメルラテ……」

とつぶやいて、もう一度私を見ると今度はマイケルさんが力強く頷いた。でも、

「突然お伺いして失礼しました。今日は折り入つてお話をあつて伺いました」

と、やつと今日の本題を切り出しあつとしたマイケルさんに、「

「断る」

と、パパは内容も聞かない内にダメ出し。

「パパ、まだマイケルさん何にもいってないじゃない」

と、私が言つと、

「言わんでも判る。だから、ダメだ。ダメ、ダメ、ダメだ」とパパはまるでだだつ子みたくダメを連発し始めた。

パパとマイケルさんの攻防戦（前編）（後書き）

ああもう、なかなか本題にいけません。

今年中に終わりたいのに……

パパとマイケルさんの攻防戦（後編）

「だから

「ダメだったら、ダメだ」

パパは話も聞かずicamenteダメダメの連発で、しまいにはそっぽを向いてしまつてマイケルさんと目も合わせない。まったく、とりつく島もないっていうのは、こういうのを言うのだろうか。確かに反対はされるとは思つてたけど、このリアクションは予想外だ。仕方がないなど私たちは顔を見合わせてため息をついた後、マイケルさんが

「じゃあ、日を改めてお伺い……」

言いかけた時だつた、

「パパ、いい加減にしなさい！」

とママの怒号が響いた。

「何がダメなのか、言わるのは反則技でしょ」

そんなママの剣幕に、パパはごによごによと小さな声で、

「51なら更紗より俺の方が歳が近いじゃないか。あつと言つ間に一人になつたらどうすんだ」

とつぶやく。ママはそれに対して、

「今からなら、平均寿命まで25年以上あります。それに、そんなのどっちが早いかななんて誰にもわかんないでしょ」と、返す。パパは

「そりやそうだが

と、一旦は頷いたけど、

「一時の感情で盛り上がつてもすぐに話が合わなくなるぞ。それにだな、その姿容だ、今まで一度も結婚してないらしいが、それは遊んでたからじゃないのか。更紗、元社長だとか、人気作家だとかそんな上つ面ばかりみると泣きを見るぞ」

なんて、マイケルさんの前なのにさんざんなことを言ひ

「パパ！ ひどいよ。歳なんて逆立ちしたつてどうにもならないし、

顔もそりよ。整形しろって言うのー！」

と、私は怒った。話が合わないなんてとんでもない、下手すれば高校の同級生（機械科には女の子なんていなかつたから、主にデザイン科の子たちだからだけど）よりも口ボット談義には花が咲くくらいよ。すると、マイケルさんは私の手を握つて言った。

「更紗ちゃん、待つて。大事なお嬢さんの結婚相手がこんなチャラチャラした男なんてね、お義父さんの心配は解るよ」

「マイケルさんはチャラチャラしてません！　見た目で判断しているのはパパの方じゃない」

そして口をとがらせてパパを睨みながらそう言つ私に、

「解つてもらうまで、何度もお伺いするから」

マイケルさんは、そう言つてポンポンと優しく頭を叩いた。

「いいえ、市原さん、何度も来てもらう必要はないですよ」とすると、ママは急にそう言つた。いきなり何？ 賛成してくれてたんじやないの？？ 驚く私に更にママはまくし立てる。

「パパ、更紗さんは今いくつ？　36歳にもなるのよ。それまでこの子が彼氏一人連れてきたことがあった？　なかつたでしょ。まあ、だいたいは正巳ちゃんが握りつぶしてたつてこともあるけど、そんな更紗ちゃんがやつと連れてきた人を無碍に追い返して、この先誰かいい人が現れる保証もあるって言うのかしら。

それに、パパのお眼鏡に叶う男なんて世界中探したつて一人もいないし、内心、悪くないって思つてるんでしょ。でなきや、こんなただつ子みたいな反対の仕方なんてしないわよね。反対する理由が見つからないながら、だだこねてるんでしょ

「へつ？　今までも正巳が握りつぶしていたとか、何か捨てならないことを聞いた気がするけど、ま、いつか。

その言葉はパパには図星だったりじぐ、首をすくめながら小さな声で、

「ああ、思った以上にいい奴そうだな」

と言つた。ああ、許してもらえるんだとほつとしたのもつかの間、

ママは私たちに田を移すと、

「じゃあ、問題ないわね。といつ訳で、更紗ちゃん、今すぐお嫁に行きなさい」

と言ったのだ。

「い、今すぐ……」

ママの爆弾発言にママ以外の3人がカミ方も一緒にハモってしまつた。

「そう、今すぐ。市原さん一人暮らしなんだよ

「はあ、それはそうですけど……」

「じゃあ、問題ないでしょ」

「いいの？」

目を丸くして見つめあうマイケルさんと私に、ママは力強く頷く。

「い、今すぐなんて俺は許さんぞ。せっぱりこの結婚反対だ」

このぶつ飛び発言に呆気にとられていたパパだけ、ママに見事に押し切られていることに気づいてあわてて踵を返す。^{きびす}

「どうせ結婚するんですよ、今でも一月先でもそう変わりはないでしょ

それに対してママは一步も退かない。

「それはそうだが、心の準備というものがだな

そして最後の抵抗を続けるパパだったが、

「36年もあつて何が心の準備なの？」

それには、更紗ちゃんの歳を考えると、できるだけ早くしないとどんどん大変になるのよ。妻の定年はまだまだだけど、女の定年は意外と早いのよ。パパは孫の顔見たくないの？」

『孫』という伝家の宝刀を抜かれてグッとなつたまま押し黙つてしまつた。

私は完全に置物みたくなつてしまつたパパの隣で超上機嫌なママに、

「さあさあ、パパも大人しくなつたことだし、更紗ちゃん当座の服

だけ鞄に詰めてらっしゃい。後は宅配でつてあげるから」と自室に追いやられ、慌ただしく荷物を詰めると、マイケルさんが部屋に来てそれを玄関に運んでくれる。でも……本当にコレでいいのだろうか。

「行つてきまーす」

私は、いつも会社に行くときみたいにそつそつと奥に声をかける。すると、パパが玄関先に出てきた。見送つてくれるのかと思つたら、パパは一直線に横にあるトイレに入つて行く。なんだトイレなの? だけど、

「おう、一度と帰つて来んな。意地でも幸せにしてもらひえ。俺はもう知らん」

トイレの中からぐもつた音でそんな声が聞こえた。パパ、許してくれてありがと。うん、意地でも幸せになるね。

パパとマイケルさんの攻防戦（後編）（後書き）

最後の決まり手は寄り切つて更紗ママの勝ち……でした。

櫻原家もぶつとびですけど、月島家もなかなかどうして負けてはいません。

ま、母としてはアラフォニーにもなる娘の将来を案じてと云つてヒド
ご理解ください。

やまと黒幕は…… Iの男

家を出て私たちは美久さんが待機してるとこ、う近くの「アミレスに向かつた。

大きなボストンバッグを抱えている（とはいって、私の当座の荷物と言つてもその程度なのだけれど）マイケルさんを見て美久さんは、「よかつた。首尾は上々だつたようですね」

と言つた。

「うん、あんまりにも上手くいきすぎて怖いくらいだよ。更紗ちゃんをそのまま連れて帰つて良いっていうんだもの」

その言葉にマイケルさんは、手に提げているボストンバッグを示しながらため息をつく。だけど美久さんはそれを聞いてもちつとも驚かなかつた。

「荷物があるんでしたら、電話で呼んでくれれば、行きましたよ」と言つただけ。

「良いや、重くないから。それに、マンションに帰つても何にも食べるもののないし、ここでお昼食べてとりあえず買い物に行かなきゃ。更紗ちゃんのもの、何もないもの」

でも、ベッドなんてその口に運んでなんてくれないよねとぶつぶつ言つマイケルさん。確かに一緒に住むつていうのはそういうことだと思つけど、何気にリアルすぎて辛い。

「ああ、それなら心配ないですよ」

だけど、美久さんはこともなげにそう言つた。

「ま、そのかわりと言つては何ですけど、ほかにやつてもうひとつありますので、ここでお昼は無難な選択かもしれませんね。じゃあ、まずははいコレね」

と、私たちに一枚の用紙を手渡した。私たちはその特殊な紙質に同時に驚く。

それは婚姻届けだった。それも白紙ではなく、保証人の欄にはも

うママと幸太郎さんの名前がしつかりと書かれてあり、あとは私たちが署名押印すれば良いだけになつていて、更にその横にはご丁寧に一人の戸籍抄本を入れた封筒まであつたりして……

「ねえこれって……」

私がおそるおそるそう尋ねると、

「月島さんのお母様がいきなり初対面の男性に大事なお嬢さんを渡す訳ないじゃありませんか。ちゃんと社長が根回ししてあつたんですよ」

と、美久さんはウインクしながらそう答えた。うわっ、じゃあママもグルだつたつてこと?

「できるだけ長く一緒にいてもらひたい、ちょっとでもスタートを早くしてもらつた方がつてね。タケちゃんが入院している間に、社長がお母様にお話を持つて行きました。

僕なんかは突拍子もないと言つて叱られるんじゃないですかって言つてたんですけど、予想に反してお母様が大乗り氣で、『パパの説得の方は任せせておいて』とおっしゃつてくれつて

そうかもしね。娘に内緒で見合い話を進めるよつな人だもの。もらいにくる……しかも交渉に行つたのが、息子の幸太郎さんなら、ママ二つ返事で受けるだろう。ママ、イケメンに弱いもんね。

「それを区役所に出したら、一曰お宅に戻りましょ。月島さんが気に入るかどうかは分からなことですけど、一応調度も絵梨紗ちゃんとで揃えてありますから。

食材も薰さんが入れてくれてます」

至れり尽くせりというのはこのことを言つのだらうか。あまりにも用意周到な作戦に、私は若干目眩を覚えてしまつたほど。幸太郎さんつてば、本当に過保護過ぎだ。

お皿ご飯がくるまでに婚姻届けに署名押印し終わつた私たちは、もはや味なんて分からなくなつてしまつたそれを食べ、美久さんの運転で区役所に行き、そのまま櫻原更紗になつた。

「さ、行きましょうか。お義兄さん、お義姉さん

区役所の駐車場で美久さんに早速そう言われた。

「うれしいな。僕ね、男ばっか3人の兄弟なんです。お姉さん欲しかったんですよね。タケちゃん、僕もそう呼んで良いですよね」と本当に嬉しそうにいう美久さん。

「う、うん」

マイケルさんも一旦は肯いたんだけど、

「お義姉さん、お義姉さん。お義姉さん。言い響きだなあと、やたら連発している内にみるみる機嫌が悪くなる。

「やっぱダメ！ お義姉さんって言つてる美久くんの顔がエロい」

「ひどいな、そんな気なんてないですよ。僕は純粋にお姉さんが欲しかつただけなのに」

「それでもダメ」

「じゃあ、なんて呼べば良いんですか」

そんなマイケルさんと美久さんの会話をききながら、ああ私は櫻原の一員になつたのだなと思つた。

やつは黒幕は…… IJの男（後編）

はい、影のドン？ 幸太郎裏で糸引をまくつの巻でした。

年が明けともどんどんと話を膨らます「道先」メンバー。ゴールはすぐそこのはずなのに、落とし穴がいくつもいくつも開いてます。

結局、私の呼び名はお義姉さんに落ち着いた。実際問題、私の名前『更紗』はさん付けすると発音しにくいのだ。『更紗さん、お皿の中のサラダをさらつてください』なんて早口言葉にもなっちゃいそうなくらい。だからと言って義弟の立場にあたる美久さんが更紗ちゃんなど呼ぶ訳にもいかず、無難なお義姉さんに戻ったというわけだ。

そうして私たちは美久さんの車に乗り込んでマイケルさんの家を目指した。

しかし、10分くらい走ったところで、

「あれ、美久くん更紗ちゃんどこからだとウチわかんない？ それとも、まだどこかに寄るの？ 道につけちじやないよ」

マイケルさんがあわててそんな声を上げた。実は美久さん、かなりの方向音痴らしいのだ。だけど、そう言われても、

「いえ、こっちで良いんですよ。ちゃんとナビを見て走りますから」

と、美久さんはどこ吹く風でどんどんと家じゃない方に車を進める。いや、私は家を全く知らないから、マイケルさんの青ざめ具合で美久さんが全然違う方向に走っているのが分かるだけだ。

やがて、美久さんの車は私の家から3駅ほどのいかにもオシャレなマンションの前で停まった。

「はい、着きましたよ」

「いいい、どこ？」

マイケルさんが半ば泣きそうになりながら辺りをキョロキョロ見回しながら言つ。

「 です」

それに対して、美久さんは事務的に地名を答える。

「そんなんの分かってるよ。僕は美久くんみたいに方向音痴じゃない

もん」

だから、こここのどこのが自分ちなんだと怒るマイケルさんと、元「そりや そうですよ、タケちゃんの退院に間に合ひよつて大急ぎで用意したんですから」

と、胸を張つて言う美久さん。

「用意したつて、なんで？」

「いくら別棟だと言つたつて、いきなり隣に会長のこる櫟原の本宅はお義姉さんにはハードでしょうし、だからと書いて、仕事用のマンションに一人で住むのは手狭でしょ？」

それに、お義姉さんはまだお勤めがあるでしょ。本宅だと、沿線違うじゃないですか。

『ゆくゆくは本宅に戻るとしても、今新婚の間ぐらいはここでお二人ゆつくり過ごしてくださ』って、社長からの伝言です』 目を丸くしているマイケルさんに、美久さんはにっこり笑つてそう答えた。

「ちゃんとお風呂を沸かしておくからつて、今朝美久くんちに連れていったのはその為なの？」

「ええ。家具はこちらに合わせて揃えましたけど、私物は運び出しましたからね。いくら短時間でも、自分のものがじつそり消えたらさすがに異変に気づくでしょう」

「それはそうだけど……」

それから案内された新居は、たつた一〇日で用意されたとは思えないくらいすべてが完備していて、幸太郎さんの気合いの入りよう改めて驚く。そう言えば、正巳の仕打ちに彼、『絶対にまとめてやる』って言つてたつけ。絶対に敵にはしたくないタイプだわ。

そして、マイケルさんは美久さんが帰つたあともそのリビングの真ん中に立つたままずっと複雑な表情をしている。

「お茶でも……煎れましょウか」

とりあえずマホガニーの猫足ダイニングの椅子に座つた私は、そう

言つてマイケルさんの顔をのぞき込んだ。ケトルはコンロの上に乗せて貯めてあるし、お茶のセットも食器棚の見える位置にちゃんと用意してくれてある。ただ、カップとかは結局マイケルさんに運んでもらわなきゃならないけど。

「ねえ、更紗ちゃんはこれで良いの？ このインテリジェンスく僕好みだけど、更紗ちゃんの趣味もあるでしょう？」

すると、マイケルさんは私の質問には答えず、そう問い合わせ返した。ああそうか、マイケルさんは幸太郎さんの気持ちはうれしいけど、私の気持ちを蔑ろにしているようであんな表情になっていたのか。

「ええ、ちょっとどびつくりしてるので、この部屋の内装私も好みです」

「ホントに？ 無理してない？」

「ええ。幸太郎さんならママに私の好みも聞いてるんじゃないですか？」

と言つより、ママが率先して口を出してそいつな気がする。

「ホントに、コレで良いんだよね」

「はい」

再度念押ししたマイケルさんはふっとため息をつくと、

「幸太郎くんに電話する」

と、やにわにスマホを取り出し、まだ仕事中であるつ幸太郎さんを呼び出した。

「ああ、幸太郎くん？ 僕。酷いよ、勝手に全部決めちゃつなんて。僕ってそんなに頼りない？」

口を尖らせてそう抗議する相手の幸太郎さんの答えは全く聞こえないけど、照れくさやうなその表情の奥にはつづらと涙が光っている。

「じゃあ、君の悪巧みにそのまま乗らせてもらひつから。あつがどうマイケルさんはそう言つて着信を切つた。

経験値ゼロ（前書き）

今回何とか全年齢枠に収めたつもりですが、糖度高めです。

電話を切ったマイケルさんはとりあえず私と同じダイニングの椅子に座る。でも、

「あ、お茶だつたよね」

とまた立ち上がる。

「あ、私やります」

「いいよ、いいよ。じゃあ一揃え持つていくからそっちでしてくれる」

そう言いながらマイケルさんはキッチンに立つてケトルに水を入れると火にかけた。

そして煎れた緑茶を寿司屋みたいな大きな湯呑みで飲むマイケルさんを見て何となくアンバランスだなと思った。確かに日本人離れた顔だというのもあるのだけど、ここは始めて訪れたとは言え、自宅だと言うのに、マイケルさんまだウチに来たスーツのままだった。彼、今朝は退院してウチにそのまま来たわけで、病み上がりなのにいろいろなことがありすぎて、相当疲れているに違いない。

「マイケルさん、それ 飲んだら着替えて横になつてください」

「なんで？」

「なんであつて……マイケルさん、今田退院してきたばかりでしょ。ちゃんと安静にしてないとまたぶり返しますよ」

「大丈夫だよ、しつかり完治させてきたもん」

「ダメです。こういうのは治りかけが肝心なんです」

私はそう言つとお茶を飲み終わったマイケルさんを早速寝室に追い立てる。マイケルさんは、

「大丈夫だつてば」

と渋つていたが、寝室の前まで来るとぐるっと私に向き直り、

「じゃあ、更紗ちゃんも着替えて一緒に横になる。治りかけが肝心なら、更紗ちゃんも一緒だよ」

と言いながら私の手を取り寝室に入った。

一緒に横になるつてことは、一つのベッドに寝るつてことだよね。大体、このマンションに着いたときの一通り見て回ったから解つているのだけど、寝室にはベッドは一つしかない。たとえそれがクイーンサイズという奴であったとしても。

「私は

「怪我も病気も一緒だよ」

焦つて逃げようとする私に、マイケルさんは余裕の笑みを向けた。そして、寝室に入ったマイケルさんは着替えるのだから当然だけど、ぽんぽんと躊躇なく服を脱ぎ始めて、あつと言ひ間に下着姿になつた。田のやり場に困つた私は、あわてて脱いだスースを拾い上げて、かけるために作り付けのクローゼットへぱりつく。

「美久くんの話だと、パジャマはこの棚に入れてあるんだつたよね

「は、はい確か……」

と言つた声も相当うわずつていたと思つ。

「あつたあつた」

そう言いながらマイケルさんはそこから真新しいパジャマを取り出すと、それを着た。ああ、助かつた。すると続けて棚の中を確認していったマイケルさんは、

「あ、ちゃんと更紗ちゃんの分も用意してくれてるみたいだよ」
と言つて、私にピンクの物体を手渡した。でも、それを広げてでびつくり！ それは所謂ベビードールという、ヒラヒラスケスケの奴だつた。こんなのは、着られないよお、まるで私が誘つてるみたいじやん！ ！

「あ、あの……私はウチから持つてきましたのがありますから。持つてくれるついでにシャワー浴びてきます」

色気なんてゼロビンのかマイナスくらいの単色スウェットだけど、良いよね。

私は逃げるように寝室を出た。そしたら、

「まだ慣れない家なんだから、シャワーなんかで済ませたら風邪引

いやうよ。今日は僕はもうこいつから、更紗ちゃんお湯ためてゆつくり浸かっておいで」

マイケルさんのそんな声が聞こえた。とりあえずそんなマイケルさんの指示に従つてさつと浴槽の表面を洗つてお湯を張つてその間に体を洗う。だけどそれもいつもより念入りに洗つてゐるなと思つたら、急に恥ずかしくなつてしまつた。違う違う、これはお湯がたまるまでの時間稼ぎだから……私つてば、何で自分に言い訳してゐんだろう。

ああ、でもここから出たらやりっぱり、あーんなこととか、こーんなこととかするんだろうか。さつき婚姻届けを出したんだから、もう夫婦な訳だし、誰も咎める人はいないんだけど……恥ずかしい。女36歳、友達はみんな一回は結婚していて、経験値はゼロだけど、知識は豊富。私は出た後のこといろいろ想像してすっかり長湯をしてしまつたようだ。

とりあえず体にバスタオルを巻き付けたものの、パンツを穿いてにして俯いたら吐き気がして目の前が真つ暗に。これ以上足を悪くしたくないので、慌てて座り込むけれど、視界は一向に良くならぬい。その時、

「更紗ちゃん……どうしたの」

とこうマイケルさんの小さな声が聞こえた。私があまりにも遅いのでマイケルさんがお風呂場を覗きにきてくれたのだ。

私の意識はマイケルさんに抱き上げられたところでフロードアウトした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006r/>

道の先には.....

2012年1月13日14時49分発行